

鳥取県日野郡江府町

中国横断自動車道岡山・米子線建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 佐川遺跡群

(佐川第1遺跡・第2遺跡、岩屋ヶ成遺跡)  
佐川古墳群の調査



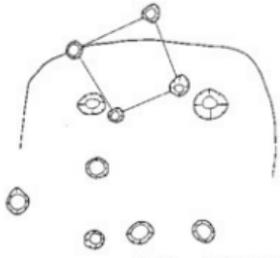
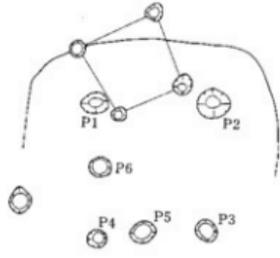
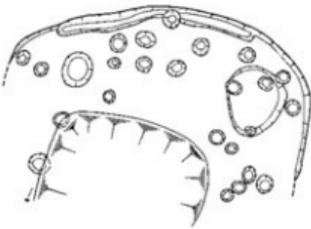
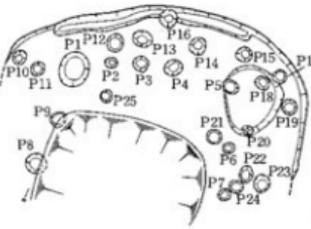
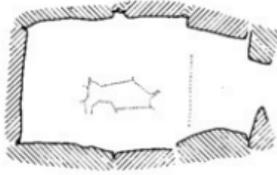
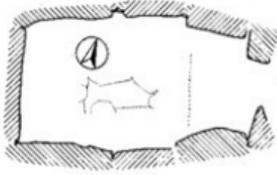
寄贈

1986



財団法人 鳥取県教育文化財団

# 『佐川遺跡群』 正誤表

箇所	誤	正
P27 挿図20	 <p data-bbox="439 521 612 544">※ピット番号落ち</p>	
P28 挿図21	 <p data-bbox="439 841 612 864">※ピット番号落ち</p>	
P36 l 1	器台 (Po80̇~85)	器台 (Po82̇~85)
P36 l 10	勢を <small>示</small> めるが	勢を <small>占</small> めるが
P67 l 5	…… <small>しきみ</small> 両袖石と框石により……	…… <small>かまち</small> 両袖石と框石により……
P86 挿図78	 <p data-bbox="495 1351 612 1374">※方位落ち</p>	

## 『佐川遺跡群』 正誤表 (追加)

箇 所	誤	正
P / 2 l 5	ナイフ型土器	ナイフ形土器



## 例 言

1. 本報告書は1985年度中国横断自動車道建設に伴う鳥取県日野郡江府町佐川に所在する佐川遺跡群の発掘調査記録である。
2. 佐川遺跡群の名称は今回調査した佐川第1遺跡、佐川第2遺跡、岩屋ケ成遺跡、佐川古墳群等を含めた仮称であり、遺跡の性格等を規定するものではない。
3. 遺跡・古墳名は鳥取県教育委員会「大山西麓埋蔵文化財分布調査報告書」1977に従った。第5章岩屋ケ成遺跡は新発見の為字名を採って命名した。
4. 出土遺物の整理は鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得て調査員が行なった。
5. 遺跡、遺構の実測は調査員、補助員が協力して行なった。遺物の実測は鳥取県埋蔵文化財センターの小林、桑崎、笹尾、田中、福田、山崎が行ない調査員が補足した。
6. 遺跡、遺構の写真撮影は調査員が行なった。遺物の撮影は中原と太田が行なった。
7. 図面の浄写は左藤、田中、中原が行なった。
8. 本報告書の作成は調査員の討議に基づくものである。執筆は調査員が分担して行ない、執筆担当者名は文末に記載した。編集は中原が行なった。
9. 出土遺物、図面等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は将来的には江府町に移管する予定である。
10. 本書に記載した江府町歴史民俗資料館所蔵の考古資料は、江府町教育委員会の御好意で中原、太田が資料化した。
11. 本書に掲載の地形図は国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」「大山」「根雨(高梁)」「湯本」を使用した。
12. 現地調査及び報告書作成にあたって、下記の方々に助言・指導戴いた。  
赤木三郎、小田富士雄、網見安明、久保穰二郎、真田廣幸、田中精夫、田中弘道、田中義昭、角田徳幸、土井珠美、中村徹、西尾克己、西村彰滋、根鈴輝雄、野田久男、平川誠、平勢隆郎、益田晃、松沢亜生、村上勇、森下哲哉、柳浦俊一、柳沢一男、山橋雅美(敬称略、五十音順)
13. 発掘調査に際しては地元の方々を始め下記の方々に便宜をはかっていただいた、謝意を表します。下村穰、砂原清、松原公明、東光寺(佐川部落)、末次雅雄、小澤壽正(江府町教育委員会)、小田隆、江府町文化財保護審議会

## 凡 例

1. 本報告書における方位は、すべて磁北を示す。
2. 本報告書に記載した遺物には観察表中の〈取上番号〉をネーミングしてある。
3. 本報告書における遺構記号・遺跡記号は次のように表わす。  
S I : 竪穴住居跡、S B : 掘立柱建物跡、S K : 土墳、S X : 土壇墓、P : ピット  
S : 石器、J : 玉類、F : 鉄器類、Po : 土器
4. 石製品における加工痕、使用痕の表示は次の通りである。  
磨面及び磨耗：、敲打痕：、凹み：、磨減範囲：、敲打範囲：  
一、凹み範囲：
5. 本報告書中のピットの計数は、P (長径×短径-深さ) で示した。単位はcmである。
6. 遺構挿入図におけるセクション、エレベーションの基準線標高はH=の記号で表わす。

# 目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
日 次	
第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過及び概要	1
第3節 調査体制	3
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	12
第3章 佐川第1遺跡	
第1節 試掘調査	14
第2節 縄文時代の遺構と遺物	15
第3節 弥生時代以降の遺構と遺物	19
第4章 佐川第2遺跡	21
第5章 岩屋ヶ成遺跡	
第1節 縄文時代の遺物	22
第2節 弥生時代以降の遺構と遺物	26
第6章 佐川古墳群	
第1節 佐川3号墳	44
第2節 佐川5号墳	51
第3節 佐川6号墳	66
第4節 佐川4号墳、7号墳及び遺構外出土遺物	77
第5節 A、B、C地点の試掘調査	79
第7章 若干の考察—まとめにかえて—	
第1節 縄文時代	81
第2節 弥生時代以降	83
第3節 古墳時代	84
附載 江府町歴史民俗資料館所蔵の考古資料	87
おわりに	90

## 挿 図 目 次

挿図1 佐川遺跡群全体図	折込
挿図2 佐川遺跡群の位置	4
挿図3 鳥取県の地質層序	6
挿図4 遺跡周辺の地形面分布図	8

挿図5	佐川遺跡群周辺セクション柱状図	9
挿図6	周辺遺跡分布図	折込
挿図7	佐川第1遺跡土層断面図	14
挿図8	佐川第1遺跡全体図	14
挿図9	佐川第1遺跡SK01遺構・遺物実測図	15
挿図10	佐川第1遺跡出土縄文土器実測図	16
挿図11	佐川第1遺跡石器実測図	18
挿図12	佐川第1遺跡SB01遺構図	19
挿図13	佐川第1遺跡出土弥生土器・土師器・須恵器実測図	20
挿図14	佐川第2遺跡試掘トレンチ位置図	21
挿図15	佐川第2遺跡試掘トレンチ土層断面図	21
挿図16	岩屋ヶ成遺跡縄文土器実測図	22
挿図17	岩屋ヶ成遺跡石器実測図①	24
挿図18	岩屋ヶ成遺跡石器実測図②	25
挿図19	岩屋ヶ成遺跡全体図	26
挿図20	岩屋ヶ成遺跡SI01遺構図	27
挿図21	岩屋ヶ成遺跡SI02遺構図	28
挿図22	岩屋ヶ成遺跡SB01遺構図	29
挿図23	岩屋ヶ成遺跡SB02遺構図	29
挿図24	岩屋ヶ成遺跡SB03遺構図	30
挿図25	岩屋ヶ成遺跡SB04遺構図	30
挿図26	岩屋ヶ成遺跡SX01遺構図	31
挿図27	岩屋ヶ成遺跡SK01遺構図	31
挿図28	岩屋ヶ成遺跡SK02遺構図	31
挿図29	岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器実測図①	33
挿図30	岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器実測図②	35
挿図31	岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器実測図③	37
挿図32	岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器実測図④	38
挿図33	3号墳調査前地形測量図	44
挿図34	3号墳墳丘土層断面図	折込
挿図35	3号墳墳丘実測図	45
挿図36	3号墳周溝遺物出土位置図	45
挿図37	3号墳石室実測図	46
挿図38	3号墳石室検出状況図	47
挿図39	3号墳石室掘り方実測図	47
挿図40	3号墳周溝遺物出土状況図	48
挿図41	3号墳周溝出土須恵器実測図	48
挿図42	3号墳土器棺遺物実測図	49
挿図43	佐川西尾根地形測量及びトレンチ配置図	折込
挿図44	佐川西尾根古墳位置図	51
挿図45	5号墳墳丘実測図	52

挿図46	5号墳墳丘土層断面図	折込
挿図47	5号墳墳丘遺物出土位置図	53
挿図48	5号墳石室検出状況図	54
挿図49	5号墳石室実測図	折込
挿図50	5号墳石室掘り方実測図	55
挿図51	5号墳周溝外土器検出状況図	55
挿図52	5号墳周溝内石棺実測図	56
挿図53	5号墳墳丘内遺物出土状況図	57
挿図54	5号墳周溝内遺物出土状況図	58
挿図55	5号墳出土鉄器実測図	58
挿図56	5号墳周溝外出土土師器実測図	59
挿図57	5号墳須恵器実測図①	60
挿図58	5号墳須恵器実測図②	61
挿図59	5号墳須恵器実測図③	62
挿図60	6号墳墳丘実測図	66
挿図61	6号墳墳丘土層断面図	折込
挿図62	6号墳墳丘遺物出土位置図	67
挿図63	6号墳石室検出状況図	68
挿図64	6号墳石室実測図	折込
挿図65	6号墳石室閉塞状況図	69
挿図66	6号墳石室内遺物出土状況図	70
挿図67	6号墳石室掘り方実測図	71
挿図68	6号墳鉄器・玉類実測図	71
挿図69	6号墳周溝遺物出土状況図	72
挿図70	6号墳須恵器実測図①	73
挿図71	6号墳須恵器実測図②	74
挿図72	4、7号墳土層断面図	77
挿図73	佐川古墳群遺構外出土鉄器・須恵器実測図	78
挿図74	A・B・C地点土層断面図	79
挿図75	B地点出土土器実測図	80
挿図76	佐川第1遺跡出土縄文土器DOT-MA P	折込
挿図77	米子市宗像1号墳A石室(羽子板形プラン)	85
挿図78	江府町貝田1号墳石室実測図	86
挿図79	江府町助沢竜王遺跡、縄文土器実測図	87
挿図80	江府町出土弥生土器・土師器実測図	88
挿図81	江府町出土石器実測図	89
挿図82	江府町出土須恵器・土師器実測図	89

## 挿 表 目 次

挿表1	佐川第1遺跡縄文土器組成表	17
挿表2	佐川第1遺跡縄文土器観察表	17

挿表3	佐川第1遺跡石器観察表	18
挿表4	佐川第1遺跡弥生土器・土師器・須恵器観察表	20
挿表5	岩屋ヶ成遺跡縄文土器観察表	23
挿表6	岩屋ヶ成遺跡石器観察表	25
挿表7	岩屋ヶ成遺跡S I-02ピット一覽表	28
挿表8	岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器観察表①	39
挿表9	岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器観察表②	40
挿表10	岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器観察表③	41
挿表11	岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器観察表④	42
挿表12	岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器観察表⑤	43
挿表13	佐川3号墳出土須恵器・土師器観察表	50
挿表14	佐川5号墳出土須恵器・土師器観察表①	62
挿表15	佐川5号墳出土須恵器観察表②	63
挿表16	佐川5号墳出土須恵器観察表③	64
挿表17	佐川5号墳出土須恵器観察表④	65
挿表18	佐川6号墳出土須恵器観察表①	75
挿表19	佐川6号墳出土須恵器観察表②	76
挿表20	佐川西尾根遺構外出土須恵器観察表	78
挿表21	佐川B地点出土須恵器・弥生土器観察表	80・81

## 図 版 目 次

図版1	佐川5・6号墳、岩屋ヶ成遺跡遠景	図版16	佐川5号墳石室石積状況・隅角部
図版2	佐川第1遺跡全景、S B01・S K01 佐川第2遺跡試掘トレンチ	図版17	佐川5号墳石室腰石・掘り方・箱式石棺
図版3	岩屋ヶ成遺跡S I01・S I02	図版18	佐川5号墳遺物出土状況
図版4	岩屋ヶ成遺跡S B01・02・03・04	図版19	佐川5号墳土師器・須恵器①
図版5	岩屋ヶ成遺跡S X01・S K01・02	図版20	佐川5号墳須恵器②
図版6	佐川第1遺跡、岩屋ヶ成遺跡土器・石器	図版21	佐川5号墳須恵器③
図版7	岩屋ヶ成遺跡石器・土器	図版22	佐川6号墳全景・石室検出状況
図版8	岩屋ヶ成遺跡土器	図版23	佐川6号墳石室補石・閉塞状況
図版9	佐川3号墳全景・石室検出状況	図版24	佐川6号墳石室側壁石積状況
図版10	佐川3号墳墳丘土層断面・石室腰石・裏込	図版25	佐川6号墳石室奥壁・隅角部
図版11	佐川3号墳石室・遺物出土状況	図版26	佐川6号墳石室敷石・腰石・掘り方
図版12	佐川3号墳土器棺	図版27	佐川6号墳遺物出土状況
図版13	佐川3号墳須恵器・土師器	図版28	佐川西尾根トレンチ・A・B・C地点
図版14	佐川5号墳全景・石室検出状況	図版29	佐川6号墳須恵器①
図版15	佐川5号墳石室奥・側壁・玄門部	図版30	佐川6号墳須恵器②
		図版31	佐川6号墳鉄器・玉類・遺構外出土遺物

## 写 真 目 次

写真1	調査風景	3	写真3	佐川6号墳調査中風景	72
写真2	佐川2号墳石室露出状況	11	写真4	宮市・山神臨遺跡出土石器	87

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経過

日本道路公団による中国横断自動車道（岡山・米子線）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和57、58年度の西伯郡岸本町久古第3遺跡（主要地方道名和、岸本線道路改良工事関連）、貝田原遺跡、林ヶ原遺跡、昭和59年度の米子市上福万遺跡、石州府29・30号墳、日下遺跡、石州府第1遺跡の調査が行なわれている。昭和60年度は、日野郡江府町佐川地内の佐川第1遺跡、佐川第2遺跡、佐川古墳群が江府インターチェンジ建設計画地内に既知の遺跡として存在しており、これに、昭和59年2月に確認された溝口町上野、金屋谷の下山南通遺跡を併せて記録保存の為の調査を行なう必要が生じた。日本道路公団は、鳥取県教育委員会と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団が発掘調査の委託を受け、西部埋蔵文化財調査事務所が調査を担当した。本書には、江府町佐川地区の佐川第1遺跡、佐川第2遺跡、佐川古墳群に新発見の岩屋ヶ成遺跡を加えて、「佐川遺跡群」と呼称し、調査結果を記載した。（中原 斉）

註 「佐川遺跡群」という呼称は本報告に限り、暫定的に使用する名称であり遺跡の性格等を規定するものではない。

## 第2節 調査の経過及び概要

**調査の経過** 現地での発掘調査は1985年4月2日から開始された。当初、佐川地内での調査対象としては鳥取県教育委員会文化課により、東光寺裏山の佐川第1遺跡（散布地）600㎡と西尾根3基、南斜面1基、東斜面2基の計6基の古墳が挙げられていた。『大山西麓埋蔵文化財分布調査報告書』<sup>2)</sup>によると西尾根には佐川4～7号墳の4基が記載されており、さらに東斜面下段に若干の高まりと石材の露出がみられたため、鳥取県教育委員会、埋蔵文化財センターと協議し、総数8基の古墳を調査対象とした。実際の調査にあたっては『西麓分布』を基礎として、雑木伐採と現地踏査を踏まえ、佐川3～7号墳の5基を古墳と考えた。南斜面と東斜面下段の2ヶ所は古墳の可能性を考慮し、それぞれA地点、B地点として試掘調査を行ない、東斜面上段の3号墳北隣のC地点は表面清掃により古墳とは認められず、トレンチ調査に切り換えた。調査は7月1日に終了したが、西尾根古墳調査中に弥生～古墳時代初頭の遺物が多く出土し、古墳造営に先行する遺跡の存在が予測された。その後、5号墳墳丘断面を段階で住居跡状の落ち込みを確認し、関係機関と協議した結果「岩屋ヶ成遺跡」と命名され、7月13日まで引き続き調査を行なった。現地説明会は6月15日約50名の参加者を得て行なわれた。その他、調査中に江府町立小、中学校を始め多数の見学者のあったことを記しておく。発掘調査の経過については、調査日誌（抄）を参照されたい。出土遺物は現地の発掘調査と併行して鳥取県埋蔵文化財センターの協力のもとに整理を進め、1986年1月25日すべての整理作業を終了した。（中原 斉）

註 鳥取県教育委員会『大山西麓埋蔵文化財分布調査報告書』1977年、以下「西麓分布」と略称する。

### 調査日誌（抄）

4月2日	本日より現地調査を開始する。BM移動。	除去、清掃。破壊された横穴式石室を発見。
4月3日	古墳の調査前地形測量開始。	佐川3号墳と推定する。
4月4日	佐川第1遺跡の試掘調査開始。東斜面の倒木	4月5日 佐川第2遺跡試掘調査開始（～10日迄）。遺

	構・遺物を発見せず。	5月23日	3号墳何講究部。
4月6日	A地点試掘調査開始（～15日迄）。	5月24日	チリホールによる主体部石材の引き上げ開始。 悪戦苦闘。
4月9日	佐川第6トレンチにて縄文・弥生土器出土。 DOT・MAP作成を決定する。	5月28日	調査員・作業員で溝口町下山南通遺跡を見学。 松本調査員活躍。
4月11日	埋文センター、文化課、日本道路公園を加えて 現地協議。調査対象を古墳6基から8基と する。	5月29日	明徳学園約70名見学。
4月15日	佐川B地点調査開始。	5月30日	6号墳玄室敷石を検出。直刀が出土。B地点 調査終了。
4月16日	佐川4・5号墳調査開始。佐川第1遺跡の調 査範囲を決定する。	5月31日	3号墳調査終了。6号墳より鉄鏝・管玉出土。
4月17日	佐川6号墳調査開始。	6月5日	岩屋ヶ成遺跡S101の床面を確認。
4月22日	5号墳の周溝を確認する。佐川第1遺跡S B 01を検出。	6月6日	5号墳周溝内より幼児用と考えられる箱式石 槨を検出。
4月23日	佐川3号墳調査開始。西尾根古墳調査中に弥 生土器が多く出土。	6月8日	5号墳石室実測終了。
4月25日	佐川7号墳調査開始。	6月12日	6号墳石室実測終了。
4月26日	佐川第1遺跡調査終了。	6月15日	PM2:00より約50名の一般参加を加え現地 説明会を行なう。
5月1日	西尾根古墳下層を岩屋ヶ成遺跡と命名し、一 部調査開始。	6月22～26日	まで雨天により作業中止。
5月10日	3号墳北東周溝にて土器箱を検出。	6月24日	太田・左藤を残し、浅川・中原・西原は溝口 町下山南通遺跡に転任。
5月15日	江府町立江尾・俣野・明倫小学校見学。	7月1日	6号墳石室解体終了。
5月16日	江府町立江府中学校1・2年生見学。（18日同 3年生）。	7月8日	岩屋ヶ成遺跡S102確認。
		7月13日	全ての調査を終了。

## 調査の概要

### ○佐川第1遺跡

佐川東光寺裏山散布地の北限にあたる約200㎡を調査した。縄文早期～晩期の包含層と土壇1基、さらに弥生時代後期後半と考えられる掘立柱建物1棟を検出した。地区外から表面採集された奈良、平安時代の土器も収録しており、佐川第1遺跡は縄文早期～奈良・平安時代にかけての集落関連遺跡である。

### ○佐川第2遺跡

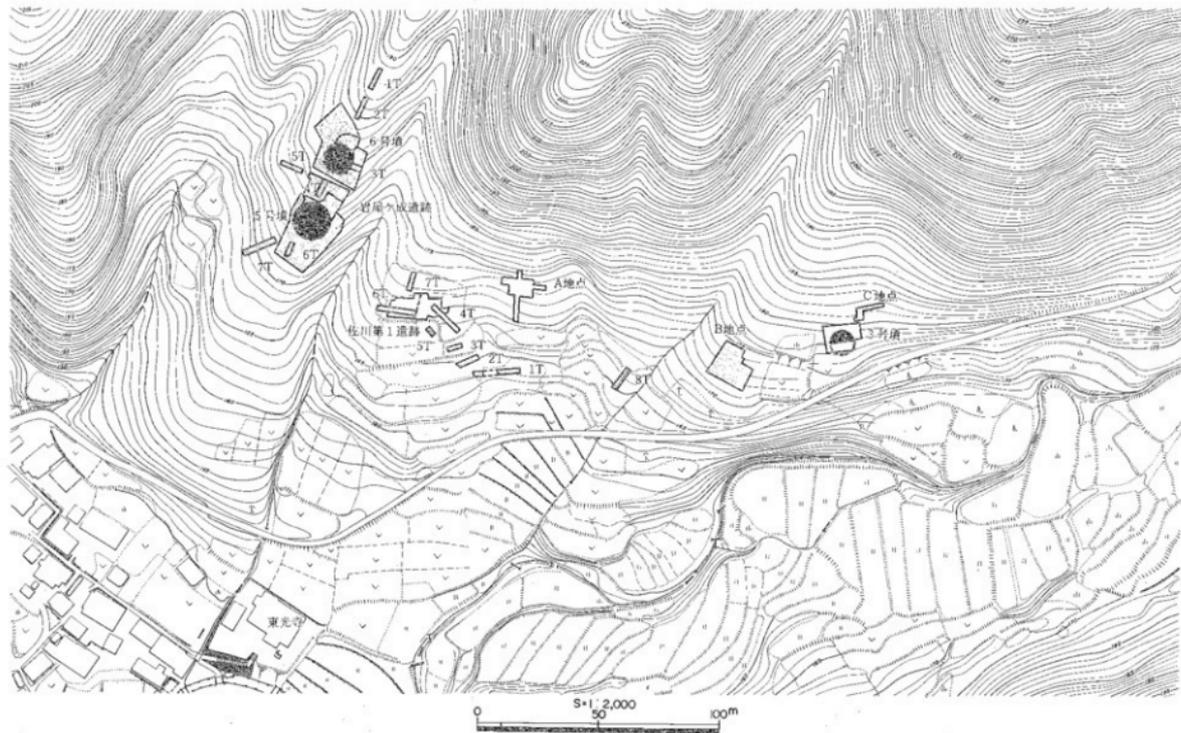
かつて水田造成時に土器が多数出土したと伝えられるが、試掘調査によると遺構、遺物を検出できず、本調査は行なわなかった。

### ○岩屋ヶ成遺跡

佐川古墳群の西尾根支群を調査中に古墳下層から縄文土器・弥生土器・古式土器器が出土し、新発見された遺跡である。弥生時代後期後半～古墳時代初頭の竪穴式住居跡2基、掘立柱建物跡4棟、土壇墓1基、土壇2基と多数の土器、石器を検出した。古墳の調査と重複したため十分な調査とはいえませんが、佐川第1遺跡同様、縄文時代早期～古墳時代初頭の集落関連遺跡である。

### ○佐川古墳群

佐川3～7号墳の5基と、他3ヶ所の調査を行なった。結果的に佐川3・5・6号墳の3基のみが古墳であり、B地点とした試掘箇所ではかつて古墳が存在したことが推定された。3基の古墳はいずれも直径10～15mの円墳で、横穴式石室を主体部としているが、造成や石取りにより著しい攪乱を受けており、遺存状態は良好とはいえない。6号墳石室から直刀・鏝・鉄鏝・管玉といった副葬品が出土した。石室は玄室奥幅が広く、玄門側が狭い圓袖型平面プランをとる。出土遺物から6世紀後半の築造と考えられる。（中原 齊・西原徳善）



挿図1 佐川遺跡群全体図

### 第3節 調査体制

調査は鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもと下記の体制で実施された。

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西尾 邑次

副理事長 坂田 昭三

常任理事兼事務局長 平木 安市

財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター

所 長 田刈 康允

次 長 田中幸治郎

庶務係長 竹内 茂

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財調査事務所

所 長 永原 功

主任調査員 中原 齊 松本 琢己

調 査 員 太田 正康 浅川美佐子 西原 徳善

調査補助員 野崎 正美 左藤 博 西田 直史 長谷川篤代

事務担当係員 杉田千津子

○調査協力 江府町教育委員会 江府町佐川部落（代表上口 勝茂）

下記の方々に発掘調査作業員、整理作業員として協力していただいた。記して謝意を表したい。

発掘参加者（五十音順）

赤井広美、石本茂雄、井上みのり、宇田川千鶴枝、遠藤和子、遠藤清子、大塚夏枝、岡本恵美子、岡本千鶴子、岡田美貴子、小田隆、奥田房子、奥田喜子、奥田益枝、奥田浩志、小倉浜代、加藤岩雄、加藤正美、加藤百子、加藤善久、加藤喜文、川上良夫、川上理敬、川上富士子、川上久子、川端末子、吉川美智枝、草原恒子、小林富治、坂本都子、藤田智恵子、藤田乃里恵、清水孝子、清水美智枝、下坂憲一、下坂冬子、下村栄夫、下村稔、下村節恵、下村富美子、下村緑、鈴木茂雄、砂原清、砂原のぶ子、関内きみ子、千藤しん子、田中長美、田中須奈恵、土井みどり、中川薫雄、仲田茂、中田ハルカ、中原節子、長井千登世、原田永保、飛田初江、久山くらよ、久山頼吉、福田幸枝、福田久子、藤原かほる、前角節、松原公明、前田政子、村上美之、森下秀夫、森谷茂子、山口健次郎、山本邦文、吉岡幹江、米山喜美栄

整理参加者（五十音順）

神矢紀子、河上敦子、桑崎知早子、小林美奈、酒巻佐代子、田中出夫、田中真由美、谷口恭子、福田和美、松岡朋子、山崎保子、山根八重美、山本久美恵



写真1 調査風景

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### 鳥取県

**位置** 本州の西部、中国地方の北東に位置し、東は兵庫県、南は岡山県・広島県、西は島根県に接している。北方には日本海が広がり、南方には標高1,200mを越える山地が連なっている。県域は、東西126km、南北61.85km、総面積3,492.34km<sup>2</sup>で、日本全体の約1%を占める。また県土の約75%は林野である。気候は、比較的温暖で、年平均気温14.3~14.7℃(冬季:0.7~1.1℃、夏季:29.4~30.8℃)である。これは本県沖合を流れる対馬暖流によるところが大きい。また本県は皆国でもあり、年間の降雪日数は人口39.1~42.8日、最大積雪深は80~129cmである。人口は、61万6,025人(男29万5,498人・女32万527人、昭和60年10月1日現在)で県庁は、鳥取市に所在する。

**地形** 山地が総面積の86.3%を占め、脊梁部に、県東部では、氷ノ山(1,510m)、二室山(1,358m)、那岐山(1,240m)、県中部では高鉢山(1,203m)、蒜山(1,200m)、県西部では毛無山(1,218m)、道後山(1,269m)などが高くそびえている。また、県西部には、東は倉吉市周辺、西は米子市付近、南は脊梁山地などに接し、北は日本海へ没する、

**大山** 広大な裾野を持つ大山(弥山:1,710.6m)が中国地方随一の秀峰として、ひときわ高くそびえている。晩秋初冠雪の頃(10月下旬)に、米子市、島根県松江市側から眺める、大山西側の山容は、「伯耆富士」の名にふさわしい。志賀直哉「暗夜行路」、大町桂月「一蓑一笠」、島崎藤村「山陰土産」、など大山の登場する文学作品も数多くあり、なかでも高浜虚子の「秋風の急に寒しや分の茶屋」が大山寺参道に句碑となって、また郷土の文学者大江賢次の「望郷」の一節「おお大山ノいや大山さんノおんみは私の親父ノ永遠に慈愛と威厳をもつノ母なるふるさとの父よ」は日野郡江府町大平原に文学碑となっている。平野は、県三大河川と呼ばれる

**平野** 千代川(東部)、天神川(中部)、日野川(西部)、に沿って発達する。上~中流域には、小規模な谷底平野がみられ、下流域には三角州平野、砂丘(又は砂州)が



挿図2 佐川遺跡群の位置

広がっている。東部では、鳥取平野-鳥取砂丘、中部では、倉吉・北条平野-長瀬・北条砂丘、西部では、米子平野-弓浜半島の砂州（又は砂丘）があり、これらの三角州平野は、東部では湖山地、中部では東郷池、西部では中海などの潟湖を有し、地盤は軟弱である。鳥取砂丘は、東西15km、南北幅最大2km余の規模を持つ。その起伏に富んだ地形や砂表面の風紋は、四季を通じて、あるいは1日のなかで様々な表情を見せ、これは、田賀久治写真集「砂丘の幻想」で紹介されている。郷土作品を含め、多くの文学作品に登場し、阪本四方太「夢の如し」、志賀直哉「暗夜行路」・「城の崎にて」、島崎藤村「山陰土産」、高浜虚子「砂丘秋晴」などがある。有島武郎は、「浜坂の遠き砂丘の中にしてさびしきわれを見出でけるかも」と詠み、砂丘に句碑が残っている。

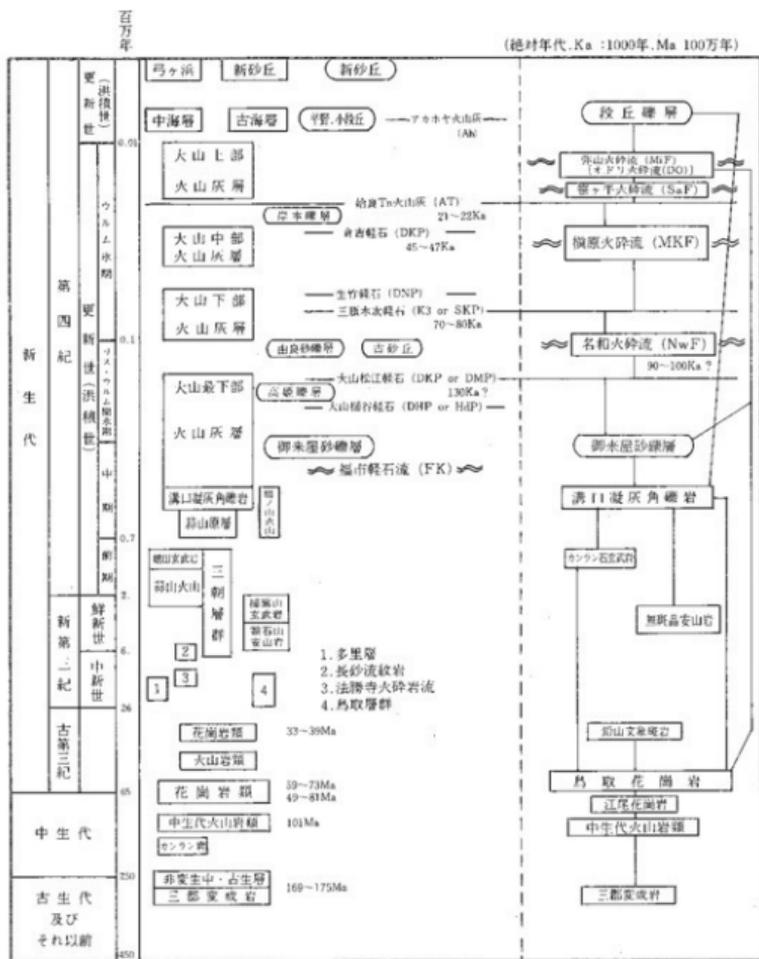
**地質** 県内最古の岩石は、三郎変成岩<sup>#1</sup>と呼ばれ、県東・西部の脊梁部に小規模に分布している。この岩石は、本州地向斜時代のうち、古生代石炭紀～二疊紀にかけて堆積した海成層を源岩とし、古生代二疊紀末～中生代三疊紀初めに変成作用を受けたもので、このことは、当時（約3.45～2億年前）本県は海域にあったことを示している。その後、古生代二疊紀末～中生代三疊紀前半に起こった地殻変動（本州造山）によって海域が縮小し、本県は陸地化していった。中生代ジュラ紀中頃以降、西南日本内帯において広島変動と呼ばれる大規模な火成活動が起こった。本県では、中生代白亜紀後期～新生代古第三紀初頭と古第三紀の2回の火成活動がみられる。この火成活動は火山岩類の噴出とそれに続く花崗岩類の貫入がセットになっている。火山岩類のうち流紋岩質の砕屑岩は溶結した構造<sup>#3</sup>を示すことが多く、このことは火山活動が陸上で起こったことを示している。火山岩類のうち前者は中生代火山岩類と呼ばれ、主に県東・西部の脊梁部、東・中部の海岸部に分布する。後者は、主に中部脊梁部に分布する。花崗岩類のうち前者の代表的なものは、鳥取花崗岩<sup>#4</sup>と呼ばれるもので、分布は本県全域にわたり、その延長は県境を越えて東方及び西方へと続く底盤状岩体を構成する。後者の代表的なものは鉛山文象斑岩<sup>#6</sup>と呼ばれ、主に県中・西部の脊梁部、東部の海岸部に分布する。広島変動の時代が終わり、新第三紀初頭になると、地殻の陥没による堆積盆地の形成と、これに続く海底（または湖底）および陸上で火山活動で特徴づけられるグリーンタフ変動が始まった。本県は、山陰-北陸区と呼ばれる西南日本の日本海側を占める新第三紀の地質区に属し、東部では鳥取層群が発達した。また西端部では法勝寺火砕岩層<sup>#9</sup>（中新世中期）、西南端部では、多里層<sup>#10</sup>（中新世中期）がみられる。

**広島変動時代** 中生代ジュラ紀中頃以降、西南日本内帯において広島変動と呼ばれる大規模な火成活動が起こった。本県では、中生代白亜紀後期～新生代古第三紀初頭と古第三紀の2回の火成活動がみられる。この火成活動は火山岩類の噴出とそれに続く花崗岩類の貫入がセットになっている。火山岩類のうち流紋岩質の砕屑岩は溶結した構造<sup>#3</sup>を示すことが多く、このことは火山活動が陸上で起こったことを示している。火山岩類のうち前者は中生代火山岩類と呼ばれ、主に県東・西部の脊梁部、東・中部の海岸部に分布する。後者は、主に中部脊梁部に分布する。花崗岩類のうち前者の代表的なものは、鳥取花崗岩<sup>#4</sup>と呼ばれるもので、分布は本県全域にわたり、その延長は県境を越えて東方及び西方へと続く底盤状岩体を構成する。後者の代表的なものは鉛山文象斑岩<sup>#6</sup>と呼ばれ、主に県中・西部の脊梁部、東部の海岸部に分布する。広島変動の時代が終わり、新第三紀初頭になると、地殻の陥没による堆積盆地の形成と、これに続く海底（または湖底）および陸上で火山活動で特徴づけられるグリーンタフ変動が始まった。本県は、山陰-北陸区と呼ばれる西南日本の日本海側を占める新第三紀の地質区に属し、東部では鳥取層群が発達した。また西端部では法勝寺火砕岩層<sup>#9</sup>（中新世中期）、西南端部では、多里層<sup>#10</sup>（中新世中期）がみられる。

**グリーンタフ変動** 中生代ジュラ紀中頃以降、西南日本内帯において広島変動と呼ばれる大規模な火成活動が起こった。本県では、中生代白亜紀後期～新生代古第三紀初頭と古第三紀の2回の火成活動がみられる。この火成活動は火山岩類の噴出とそれに続く花崗岩類の貫入がセットになっている。火山岩類のうち流紋岩質の砕屑岩は溶結した構造<sup>#3</sup>を示すことが多く、このことは火山活動が陸上で起こったことを示している。火山岩類のうち前者は中生代火山岩類と呼ばれ、主に県東・西部の脊梁部、東・中部の海岸部に分布する。後者は、主に中部脊梁部に分布する。花崗岩類のうち前者の代表的なものは、鳥取花崗岩<sup>#4</sup>と呼ばれるもので、分布は本県全域にわたり、その延長は県境を越えて東方及び西方へと続く底盤状岩体を構成する。後者の代表的なものは鉛山文象斑岩<sup>#6</sup>と呼ばれ、主に県中・西部の脊梁部、東部の海岸部に分布する。広島変動の時代が終わり、新第三紀初頭になると、地殻の陥没による堆積盆地の形成と、これに続く海底（または湖底）および陸上で火山活動で特徴づけられるグリーンタフ変動が始まった。本県は、山陰-北陸区と呼ばれる西南日本の日本海側を占める新第三紀の地質区に属し、東部では鳥取層群が発達した。また西端部では法勝寺火砕岩層<sup>#9</sup>（中新世中期）、西南端部では、多里層<sup>#10</sup>（中新世中期）がみられる。

**鳥取変動** グリーンタフ変動期が終わると鳥取変動と呼ばれる時代に入り、火山活動と山地の上昇があり現在にいたる。中新世末～更新世前期にかけて、東部では、霊石山安山岩、稲葉山玄武岩、中部では、ウランを含む陸水成層と陸成火山岩類とからなる三朝層群、西部では、長砂流紋岩、無斑晶安山岩、鶴田玄武岩、蒜山火山の活動などが見られる。更新世中期には、東部で扇山火山の活動が始まり、これに遅れて西部で、大山火山の活動が始まった。大山火山は、更新世中期頃～更新世末にかけて活動した二重式火山で古期大山、新期大山よりなる。古期大山噴出物のうち最も広い面積を占めるのは

大山火山



挿図3 鳥取県の地質層序

溝口凝灰角礫岩と呼ばれる火砕流 (又は火山泥流) 堆積物で、大山の周辺部とくに東側に広く分布し広大な裾野を形成する。また、船上山溶岩、甲ヶ山溶岩、矢箸ヶ山溶岩、吉原溶岩、城山溶岩などの厚い溶岩や、孝霊山、鏑山、眞戸山、豪円山などの側火山もこの時期のものである。新期大山噴出物は、古期大山の中央部に現在峻険な山肌を見せる弥山、三鉢峰、鳥ヶ山などの溶岩円頂丘と、古期大山噴出物や、これ以前の岩石 (基盤岩類) でできた山地の侵食谷を埋める、新期火砕流堆積物と、これら

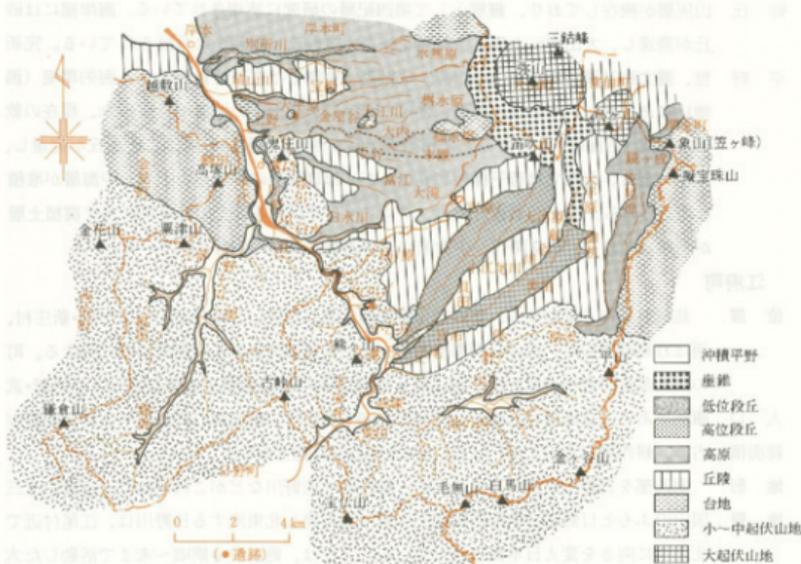
積によって下流域に火山麓扇状地が形成された。その堆積物は、古いものより御来屋砂礫層、高姫礫層、由良砂礫層、岸本礫層と呼ばれすべて段丘化しており、大山火山灰層が被覆している。また、大山火山灰層中には大山起源の軽石層<sup>砂丘16</sup>、外来の軽石層・火山灰層<sup>砂丘17</sup>が挟在しており、鍵層として第四紀層の研究に活用されている。海岸部には砂丘が発達し、大山中～上部火山灰層を挟んで古砂丘と新砂丘に分けられている。完新世、縄文海進最盛期(約6,000年前)に県東、中部では古砂丘背後は、入海的環境(潟地)にあったが、その後の海退に伴って河川による土砂の堆積が行なわれ、現在の軟弱な地盤(古海層)からなる三角州平野が形成され、古砂丘の上位に新砂丘が発達し、現在に至る。西部では若干様相が異なるが、ほぼ同様の形成をたどり、中海層が堆積し現在に至る。また、新砂丘には、クロスナと呼ばれる砂丘の安定期を示す腐植土層が介在しており、縄文時代～中世末に至る遺物、遺跡が包含されている。

### 江府町

**位置** 鳥取県4市6郡のうち、県西部日野郡の北部に位置し、東は岡山県川上村・新庄村、西は日野郡溝口町、南は日野郡日野町、北は東伯郡関金町、同郡東伯町に接する。町の南西部を日野川が流れ、これに沿って国道181号線、国鉄伯備線が通り、江尾駅・武庫駅がある。総面積124.9km<sup>2</sup>、人口約5,000人の町で、総面積の約91%を山林と原野が占め、耕作地(水田・畑)は約7.3%を占めるに過ぎない。

**地形** 南西部を日野川が流れ、小江尾川・船谷川・俣野川などがこれに注ぐ。道後山・三

**地質** 国山のふもと日野郡日南町新屋宇天ヶ淵に源を發し北東流する日野川は、江尾付近で北北西に向きを変え日本海に注いでいる。これは、更新世中期頃～未まで活動した大山火山の噴出物(溝口凝灰角礫岩・新期火砕流)によって江尾付近で河川がせき止められた結果(大山火山活動以前はそのまま北東流して日本海に注いでいたと考えられる)、江尾～溝口にかけて分布する江尾花崗岩と鳥取花崗岩の接する弱線(北北西～南南東)に支配されて、現在の流路に至った。現在、日野川右岸には主に江尾花崗岩がみられ左岸には主に鳥取花崗岩がみられる。日野川、俣野川流域には沖積層からなる谷底平野が発達し、圃化していないが、江尾・荒田・池の内・助沢付近などで小規模な河岸段丘がみられる。町の大部分は高地で占められ(海拔200～1,200m位)、日野川・俣野川を挟んで(江尾一下蚊屋ライン)北東側は主に大山火山の新期火砕流からなる高原(大平原・笠原・鏡ヶ成など)と、大山火山の溝口凝灰角礫岩からなる丘陵とで構成されており、北端部には大山火山の新期溶岩からなる大起伏山地(烏ヶ山: 1,448m)がある。南西側は、白亜紀後期～古第三紀の火山岩類・花崗岩類、及び三都変成岩からなる小～中起伏山地で構成されている。また、蒜山火山群が町の東端(県境付近)に分布している。



挿図4 遺跡周辺の地形面分布図

### 佐川遺跡群

**位置** 佐川遺跡群は、江尾の北西約2km、佐川部落北方及び東方（佐川第2遺跡）に位置し、佐川第2遺跡が小規模な河岸段丘上（沖積平野として扱った）に立地するほかは

#### <用語解説>

**沖積平野** 現成の日野川流域、または日野川水系流域に沿って発達する谷底平野と扇状地（小規模に段丘化しているものも含む）。主に水田として利用されている。

**崖壁** 新期大山噴出物の溶岩円頂丘の裾部に円錐状に発達する堆積物。

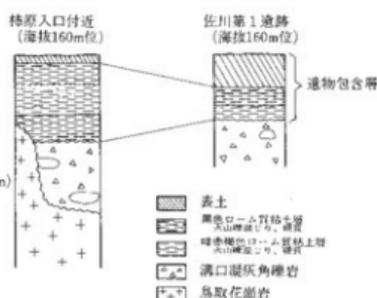
**低位段丘** 沖積平野との比高差が10～20mの平坦地、主に水田として利用されているが、溝口町溝口付近の段丘面は畑地として利用されていることが多い。大山上部火山灰を被覆していないため形成時期は完新世以降であろう。

**高位段丘** 沖積平野面との比高差が40m±の平坦地。溝口町溝口、岡町付近に小規模に見られ、主に水田として利用されている。大山上部火山灰を被覆している可能性があるが確認していない。

**高原** 新期大山噴出物の火砕堆積物で構成された、海拔200～900mと大山に向かって高度を増す、表面起伏の小さい緩傾斜地（3～6°）。後述の丘陵・台地・山地が開析されてきた谷部を埋めるように発達する。海拔200～500m位までは、水田として利用されていることが多いが、大半は原野が植林（または雑木林）地である。岸本町岸本東方に発達する岸本雑層からなる段丘化した扇状地堆積物もこれに含まれた。

**丘陵** 古期大山噴出物の溝口凝灰角礫岩（火砕流または火山泥流堆積物）で構成された、海拔100～1,000mと大山に向かって高度を増す、高原よりはやや開析の進んだ緩傾斜地（3～4°）。後述の台地・山地にせき止められる様な分布を示す。畑地、植林地として利用されているが大半は雑木林である。岸本町岸本西方に発達する、御来原砂礫層からなる段丘化した扇状地堆積物もこれに含まれた。

花崗岩類を不整合に覆う溝口凝灰角礫岩からなる丘陵上に立地する。佐川第1遺跡は日野郡江府町佐川上代に、佐川第2遺跡は同字ユウメに、岩屋ケ成遺跡、佐川第5・6号墳は同字上ミ岩屋ケ成に、佐川第3号墳は同字蓋り塔下タにそれぞれ所在する。



挿図5 佐川遺跡群周辺セクション柱状図

地形 佐川第2遺跡は、海拔140mの小段  
地質 丘上に立地し、水出床土または表土

下に、砂質で細～中礫を含む粘質土層が60cm±で発達する。遺物包含層は確認できず後世の擾乱によって破壊されたものと考えられる。他の遺跡及び古墳群は、南下がりの傾斜地上(10°位)に立地し、谷部と尾根部の微地形が見られ、谷部には、小河川(清水)が発達する。この付近の土層を第1遺跡のものに代表させ柱状図を作成した。表土下に黒色ローム質粘土層(火山礫を多量に含む・硬質)が厚さ25cm±で発達する。この下位に赤みがかった暗褐色ローム質粘土層(火山礫を多量に含む・硬質)が厚さ20cm±で発達し、下位の溝口凝灰角礫岩層(第3章中の④層以下の堆積層に相当する)に不整合にのる。表土下部には弥生土器が、表上下の2層中には縄文土器がそれぞれ包含されている。溝口凝灰角礫岩層は、本地域では橙～赤色を呈するが第3号墳付近及び柿原入口付近では、黄褐色を呈する。また柿原入口付近では下位の鳥取花崗岩に不整合にのり、この上位にはローム質粘土層が厚さ110cm±で発達する。二層に分層でき、下位は黒色ローム質粘土層(火山礫を多量に含む・硬質)で厚さ40cm±、上位は暗赤褐色ローム質粘土層(火山礫を多量に含む・硬質)で厚さ70cm±である。この層は破線部分でさらに2分できるが、その境界は両者がブロック状に混じり合い不明瞭なため、上部はクロボク化したものと判断した。

台地 鶴岡玄武岩と呼ばれるカンラン石玄武岩溶岩で構成された、頂上に海拔200m±の平坦地をもち、沖積平野面と急崖をなす卓状の高地。主に畑地、果樹園として利用されていることが多い。溝口町字代西方、金尾町鶴岡付近では、この玄武岩が下位の花崗岩類を不整合に覆い、上位に溝口凝灰角礫岩が不整合にのり、その上位に、火山最下部火山灰層(風化してけばけばしい赤色を呈する)、大山松江礫石層(DK PorDMP)が被覆する様子が観察できる。カンラン石玄武岩が分布する岸本町上畑見、溝口町大平原東方、同町金屋谷南方、及び普通礫石・カンラン石玄武岩が分布する溝口町宇殿付近もこれに含めた。また無斑晶安山岩が分布する溝口町大内東方、岸本町水無原北方及び霧山火山群(象山、寝室珠山など)もこれに含めた。

小～中起 三郡変成岩と、白亜紀後期～古第三紀の火成岩類(火山岩類と花崗岩類)で構成された、海拔200～1,200mのやや急峻な地形を呈する山地。主に植林地として利用されているが、大半は雑木林である。三郡変成岩は、溝口町内にも小規模に分布するが(谷川東方・大内付近)、その大部分は、江府町武庫一池の内を結ぶ断層線より南側に分布する。火山岩類はこの断層線に沿って分布し、北方の江府町江尾付近まで広がる花崗岩類は、溝口町溝口～江府町江尾 同町助沢を結ぶラインより南側に、主に、鳥取花崗岩、鉛山文象斑岩などが分布し、溝口～江尾ラインの北側(日野川右岸城)には、主に江尾花崗岩が分布する。たたら製鉄遺跡は、この花崗岩の分布する地域に集中している。

大起伏山地 新期大山噴出物の滑り円頂丘で構成された、海拔1,200m以上の急峻な地形を呈する山地。弥山、三鈴峰、鳥ヶ山があり、崩壊が激しいため、土地利用は見られない。

- 註1三都変成岩 中国地方東部から、九州北部にかけて各地に分布する低変成度の広域変成岩。県内では、泥質の堆積岩を源岩とする黒色片岩、石英長石質の岩石を源岩とする珪岩、塩基性火山岩を源岩とする緑色片岩が卓越し、石灰質の堆積岩起源のものは極めて少ない。最近、八頭郡船岡町大江川の河原で、初めて本岩中より中生代三疊紀(約2億年前)の化石が地元の小学生によって発見されたのは記憶に新しい。
- 註2西南日本内帯 日本列島の本州区のうち、糸魚川-静岡線(フォッサ・マグナ)より西方を西南日本といい、さらに中央構造線より大陸側を内帯、南側を外帯という。
- 註3溶結した構造 色、組成または組織を異にする部分(軽石や火山ガラス等)がしまつまたはレンズ状に重なり合う構造で、これは火砕岩、凝灰岩などが堆積時に高温を保っていたことを示す。
- 註4鳥取花崗岩 主に粗粒黒雲母花崗岩とわずかに角閃石を含む中粒黒雲母花崗岩の2相からなり、細粒相、アブライト相、ベグマタイト相を伴う。カリ長石が淡紅色を呈し、黒雲母は六角板状、石英は球形に近いのが特徴。
- 註5底盤 主として造山帯に分布する花崗岩質の大規模深成岩体で、露出面積が100km<sup>2</sup>以上にわたるもの。バソリス。
- 註6鉛山文象斑岩 三朝町鉛山地区を模式地とし、岩相は、文象斑岩、微文象花崗岩、花崗斑岩、石英閃緑岩などがある。石英と長石(ふつうカリ長石)が楔型文字状に組み合った文象組織(顕微鏡的大きさのものは微文象組織という)が顕著に見られる。
- 註7グリーンタフ グリーンタフ変動によって堆積した、溶岩、火砕流堆積物、火山灰等の火山岩のうち、中新世中期以前のものをさす。一般に緑色を帯びているためグリーンタフ(緑色凝灰岩)と呼ばれる。
- 註8山陰-北陸区 大規模な堆積盆地が形成された北陸地方の北陸層群、近畿北部の北但-照木層群、鳥根県地域の石見-出雲層群が代表的である。鳥取層群は、北但-照木層群のうち北但層群に含まれる。
- 註9法勝寺火砕岩 米子市の南から西伯郡西伯町法勝寺にかけて小範囲に分布する、石見-出雲層群の緑色凝灰岩。玄武岩-安山岩とその砕屑岩をもとする下部層、石英安山岩とその砕屑岩を主とする中部層、流紋岩とその砕屑岩を主とする上部層からなる。
- 註10多里層 丹野郡日南町多里の南方に分布する。中国脊梁山地の南麓に点在する備北層群の一部である。礫岩、砂岩、泥岩の互層からなる。
- 註11溝口凝灰角礫岩 古期大山及びそれ以前の噴出物が、火山泥流として2次的に堆積したものの、東麓における典型的な岩相は、淘汰の悪い、最大径50cm以上の岩塊を含む凝灰角礫岩で、厚さ数m〜約20mの多くのフローユニットからなる。
- 註12溶岩円頂丘 粘性の大きな溶岩からなる急傾斜の側面をもつ丘状の火山。鐘状火山、塊状火山ともいう。
- 註13俵食谷 河川の流水や水河などの侵食作用によって生じた谷。
- 註14新期火砕流堆積物 活動の時期によって古いものから順に、名和火砕流堆積物(津久井、1984) [太田1962a、bの名和軽石流にほぼ相当し、北麓香取から北西へ名和付近を経て日本海へ達するもの、甲川に沿って北へ分布するもの2流からなる]、横原火砕流堆積物(津久井、1984) [太田1962a、b、cの弥山熱雲のうち、草草原、横原から赤松にかけて、末兼から添谷にかけて、吉原から江尾にかけて分布する4つの分流からなる]、笹ヶ平火砕流堆積物(津久井、1984) [太田1962a、b、cの弥山熱雲のうち、鏡ヶ成から笹ヶ平を経て関金付近に達するもの、鏡ヶ成から南へ分布し、下敷屋へ至るもの、美用から江尾に至るもの、弥山南方から西南西へ富江、白水へ至るものの4流からなる]、弥山火砕流堆積物(津久井、1984) [太田1962a、b、cの弥山熱雲のうち、弥山北方清水原から大雀付近まで阿弥陀川に沿って分布するもの、西麓清水原から西へ向かって分布するものからなる]に区分されている。
- 註14火砕流堆積物 火山灰や軽石などが火口から空中高く吹き出ないで、地表をほう乱流となつてある方向、または四周へ流れ下つたもの。地形の凹部を埋めて流下する場合が多く、また一般に分級が悪く(砕屑物あるいは砕屑性堆積岩を構成する粒子の粒径の分布のひろがりが多いこと)、類質や異質(同じ火山

体の岩石を類質、その火山体と関係のない岩石を異質と呼ぶ)の岩片を含むことが多い。

註15大山火山灰層 活動の時期によって、大山最下部火山灰層(御来屋砂礫層を被覆する)、大山下部火山灰層(由良砂礫層を被覆する)、大山中部火山灰層、大山上部火山灰層(岸本礫層を被覆する)に区分されている。

註16大山起源の軽石層 大山最下部火山灰層中では、大山樋谷軽石層(DH PorH d P)、大山松江軽石層(DK PorDMP)が、大山下部火山灰層中では、生竹軽石層(DNP)が、大山中部火山灰層中では、倉吉軽石層(DKP)が、それぞれ知られている。

註17外来の軽石層、火山灰層 大山下部火山灰層中の、生竹軽石層より下に、三瓶木次軽石(K3 or SKP)層(鳥根山の三瓶火山起源。大山西麓で厚さ40~45cm、東麓で厚さ20cm程度)が、大山上部火山灰層中の最下部に発達する始良Tn火山灰(AT)層[南九州始良カルデラ起源。大山一帯に分布がみられ厚さ約20cm程度]が、それぞれ知られている。また、約5,000年前に噴出した、南方の火山島起源と考えられているアカホヤ火山灰(Ah)層[黄褐色、おがくず状、軽しようで可塑性のないガラス質火山灰、黒ボク土層中に火山ガラスの密集帯として介在する]が知られている。

註18鍵層(key bed) 任意の地域内で、比較的短期間に堆積し、相対的に大きな広がりを持ち、かつ、他の層とくらべて特徴のある岩相を示す地層。それを手がかりとすることによって、その地域の層序、構造の解明を容易にし、また、地層の区分、対比の一つの基準となりうるもの。鍵層が、鍵単層(一枚の単層)または火砕質鍵(単)層(凝灰岩などの火砕質岩からなるもの)の場合には、厳密に同時間をしめす。

註19ク ロ ス ナ 砂丘を構成している砂層中に介在する厚さ20~50cmの黒色を呈する砂。過去の砂表面が、植物遺体の腐食によって黒色に土壌化したもので、砂丘の安定期(飛砂などによる砂の供給の休止期)をしめす。日本海沿岸の砂丘では普遍的に見られ、かつその形成期が同時期であることなどから、鍵層として、砂丘発達史の解明に役立っている。

註20江尾花崗岩 日野郡江府町江尾から同郡溝口町長山にかけて、おもに日野川右岸に分布し、ほぼ北西-南東方向の分布傾向をもつ。主に角閃石黒雲母花崗閃緑岩-石英閃緑岩からなり、しばしば、有色鉱物が一定方向に配列して、片麻状構造を示す。鳥取花崗岩によって各地で貫入されている。

#### 参考文献

- 赤木三郎 「大山火山の地質」『大山隠岐国立公園、大山地区学術調査報告』(財)日本自然保護協会調査報告第45号、P 9~32、1973
- 赤木三郎 「上福万遺跡の自然環境」『上福万遺跡、日下遺跡、石州府第1遺跡、石州府古墳群』、鳥取県教育文化財団調査報告書17、P 9~15、1985
- 津久井雅志 「大山火山の地質」『地質学雑誌』90(9)、P 643~658、1984
- 豊島吉則 「大山の地形」『大山隠岐国立公園、大山地区学術調査報告』(財)日本自然保護協会調査報告第45号、P 43~54、1973
- 鳥取県 「10万分の1鳥取県地質図および同説明書」鳥取県、1966
- 地学団体研究会山陰支部 「続山陰地学ハイキング」、1983
- 溝口町誌編さん委員会 「溝口町誌、溝口町、1973
- 江府町史編さん委員会 「江府町史、江府町、1975
- 角川日本地名大辞典編纂委員会 「鳥取県地名大辞典」角川書店、1982
- 新日本海新聞社鳥取県大百科事典編集委員会 「鳥取県大百科事典」新日本海新聞社、1984

(松本塚己)

写真2 佐川2号墳石室露出状況



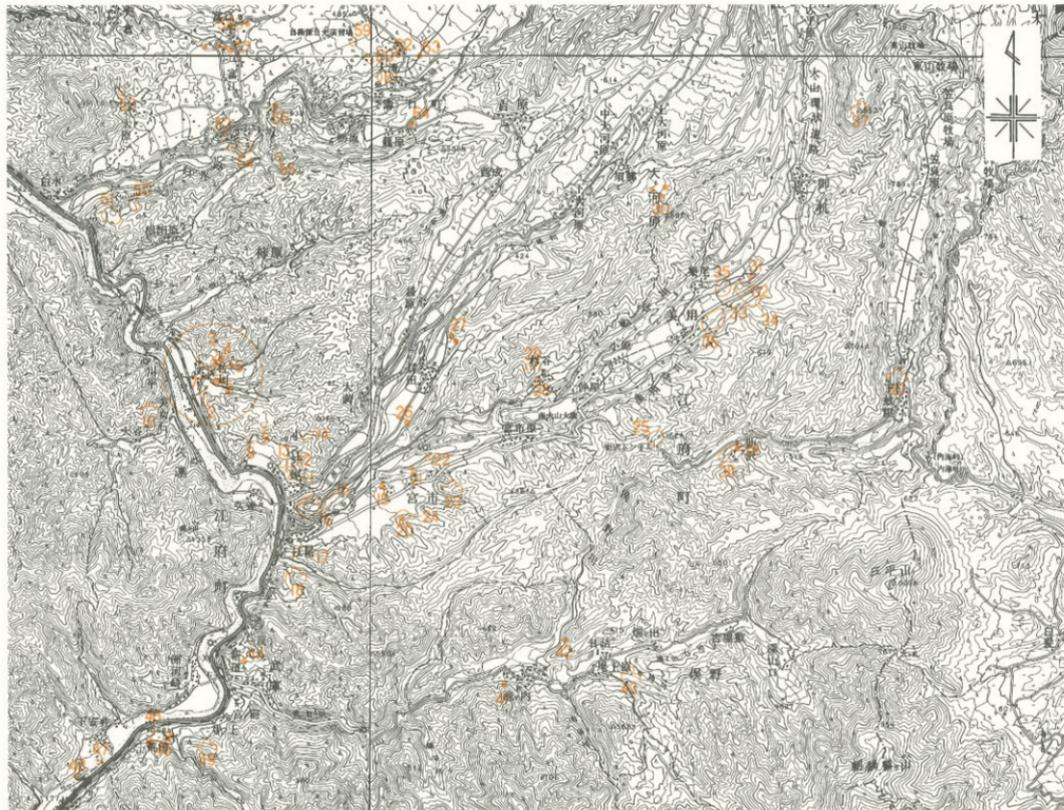
## 第2節 歴史的環境

旧石器時代 江府町域に限らず、鳥取県内では確実に旧石器時代とされる遺跡は発見されていない。遺物としては大山山麓一帯の各地で有舌尖頭器が出土しており、それより遡ると思われる柳葉状尖頭器や黒曜石製舟底形石核、握槌等も発見されている。最近、淀江町小波出土の黒曜石製ナイフ型石器、溝口町長山第1遺跡の細石刃（マイクロ・ブレイド）かと思われる製品が目され、小規模な試掘調査が行なわれているが旧石器時代遺跡の確認には至っていない。

縄文時代 大山山麓には豊かな山の幸を追う縄文時代人の足跡が数多く残されている。本地域において最古とされている縄文時代早期の押型文土器は、日野郡においても溝口町長山第1遺跡、井後草里遺跡（59）、口南町折渡遺跡等での出土が知られており、今年度調査した溝口町下山南通遺跡A区、江府町佐川第1遺跡（1）、岩屋ヶ成遺跡（3）でも山形・楕円の押型文土器が出土している。また、昭和59年度調査された米子市上福万遺跡では、早期後半の土壌、集石遺構が発見されており、当地における縄文時代黎明期の様相が明らかになりつつある。前期では助沢竜王遺跡（38）、江尾宿遺跡（15）で土器が採集されており、佐川第1遺跡でも条痕文系の土器が出土している。中期になると竜王遺跡で撚糸文土器がみられるくらいで、遺跡の数は減少しているが後・晩期には遺跡の数は再び増加し、竜王遺跡、美用第1遺跡（34）、美用第2遺跡（35）、佐川第1遺跡、岩屋ヶ成遺跡等が認められる。この他に『日野郡史』に石器製作所跡と記された宮市の苦培遺跡（25）では、石鏃と共に黒曜石、サヌカイト質安山岩、ジャスパー、水晶等の剣片が多量に出土している。また山神跡遺跡（24）では石鏃と共に有舌尖頭器が採集されている。

弥生時代 大陸から伝播した弥生文化は、水稲農耕をその生産基盤とするものであり、前期の段階の遺跡は沿岸部低湿地に多く立地し、山間部への波及は自然条件等によるものかかなり遅れるようである。中期も中葉になると、溝口町神原遺跡（61）、上中ノ原遺跡（60）、日野町岩田遺跡で竪穴住居跡、掘立柱建物等を伴う集落が調査されている。江府町域においては後期前半の荒田豆ヶ原遺跡（46）が知られており、今回後期後半～古墳時代初頭の集落を佐川第1遺跡、岩屋ヶ成遺跡で調査することができた。後期の土器を出土する遺跡としては江尾宿遺跡、小江尾第4遺跡（14）、根雨原第1遺跡（50）がある。この他に苦培遺跡（25）、宮ノ前遺跡（47）、溝口町ねずみ谷遺跡（52）等から石砲丁、磨製石斧等が出土しており、時期は不明であるが弥生時代の遺跡と考えられる。

古墳時代 江府町域には、現在まで古墳時代前・中期に遡る古墳の存在は確認されていない。後期になって初めて横穴式石室を主体部とする径10m前後の円墳が出現し、2～3基を単位として分布している。かつて美用上ノ原には15基からなる古墳群があったと伝えられるが、全体としての分布は疎密で古墳群のあり方は散在的である。横穴式石室の開口している古墳としては、佐川古墳群（4・5・6）、貝田1号墳（27）、下安井神



1. 佐川第1遺跡(縄文早～弥生後期)
2. 佐川第2遺跡(土師器出土)
3. 蝦野生坑遺跡(縄文早～弥生後期)
4. 佐川1号墳(円・横穴式石室)
5. 佐川2号墳(円・横穴式石室)
6. 佐川3号墳(円・横穴式石室)
7. 亀山遺跡
8. 佐川第3遺跡(土師器出土)
9. 谷山1号墳(土師器出土)
10. 栗安古墳
11. 小江尾第1遺跡(土師・須恵器出土)
12. 小江尾第2遺跡( )
13. 小江尾第3遺跡( )
14. 小江尾第4遺跡(弥生後期)
15. 江尾原遺跡(縄文前～古墳時代)
16. 江尾城跡(古段丸跡)
17. 江尾城本丸跡
18. 江尾城平佐本丸
19. 宮市城跡(丘・一字一石城)
20. 宮市1号墳(横穴式石室)
21. 宮市2号墳(横穴式石室)
22. 石野出土地
23. 宮市城跡
24. 山神尾遺跡(有舌尖頭器)
25. 宮市城跡(石碓・割片)
26. 古墳群
27. 貝田古墳群(2基・横穴式石室)
28. 杉谷古墳(墳頂)
29. 杉谷古墳群(2基)
30. 大河原古墳群(3基・横穴式石室)
31. 美用1号墳(円墳)
32. 美用2号墳(墳頂)
33. 美用3号墳(墳頂)
34. 美用第1遺跡(縄文・晩)
35. 美用第2遺跡(縄文・晩～弥生)
36. 美用第3遺跡(土師器出土)
37. 美用古墳
38. 老王遺跡(縄文・前～弥生・中期)
39. 助武五輪塚(正平十五年築)
40. 下段塚の塚山
41. 池内古墳群(横穴式石室)
42. 塚原古墳
43. 尾上原城跡(戦国期)
44. 武庫1号墳(円・横穴式石室)
45. 武庫2号墳(4基・横穴式石室)
46. 豆ヶ原遺跡(弥生後～古墳)
47. 宮ノ前遺跡(石室出土)
48. 下笠井神社古墳(横穴式石室)
49. 宮ノ前塚山
50. 根田原第1遺跡(弥生中期)
51. 根田原第2遺跡(弥生土器出土)
52. 上ノ宮遺跡(弥生・石塚丁)
53. 尾敷遺跡(須恵器出土)
54. 水尻遺跡(弥生・須恵器出土)
55. 桂台遺跡(須恵器出土)
56. 柳平古墳
57. 富江古墳群(5基)
58. 下川山遺跡(須恵器出土)
59. 井後草里遺跡(縄文早～晩期)
60. 上ノ宮遺跡(弥生・中期)
61. 神原遺跡(弥生中期)
62. 神原古墳(円墳)
63. 鬼の岩原古墳(横穴式石室)
64. 栗原古墳(円・横穴式石室)

挿図6 周辺遺跡分布図

0 S = 1:50000 3 km



社古墳(48)、溝口町鬼の岩屋古墳(63)等があるが、この中では穹窿状に天井部を持ち送る貝田1号墳の石室が特異な構造として注目されている。横穴墓は、石積み玄門を構築する杉谷横穴墓群(29)しか知られていないが、この構造は、広島県比婆郡、岡山県阿賀郡等中国山地奥部においてみられるもので最近、日南町内ノ倉山横穴墓群14墓が調査され、同様な構造が日野郡山間部において普遍的なものであることが明らかになっている。古墳時代以降の集落遺跡としては佐川第2・3遺跡(2・8)小江尾第1～3遺跡、美用第1・3遺跡等の散布地が知られているが、谷山日南遺跡(9)ではほぼ完形の古式土師器の壺形土器が出土している。

歴史時代 江府町域は律令体制下では伯耆国日野郡武庫郷に相当したと推定される。佐川一帯は武庫郷と野上郷(現溝口町)との境界付近にあたり、どちらに属したかは明らかでないが、一里を構成したものと考えられる。後には、平安時代中頃以降の律令体制の崩壊に伴い溝口町根原、江府町佐川、柿原を併せて佐川郷となっている。古代の江府を捜る手懸りは殆どないが、会見郡の紀(進)氏、日野郷の日野氏、あるいは大山寺といった周辺勢力の影響下にあったものと推定されている。中世に降って南北朝期には、南朝年号の「正平」銘を刻んだ助沢五輪塔(39)が知られている。戦国時代は各地に城砦が築かれたようであるが、山雲の尼子氏と安芸の毛利氏の争乱に度々まき込まれ、永祿八年(1565年)富田城に拠る尼子方についた江美城主峰塚右衛門尉は、毛利の武将尾高城主杉原盛重等に滅されている。江美城は本丸(17)に、銀杏ノ段丸(16)、すけ佐木丸(18)等を備えた中世城郭である。この他佐川龜山城(7)には馬田氏、美女石城(10)には大竺氏が在城したと伝えられているが、在地豪族の実態は殆ど不明であり、江美城落城後は長らく毛利氏の支配下にあったと考えられる。関ヶ原の戦いの後は伯耆17万石の領主中村一忠の領地となり、中村家取りつぶし後は、黒坂5万石の関一政の治世を経て、因伯32万石池田藩政時代を迎えている。

註 周辺遺跡分布の範囲は、江府町全域に溝口町南部を加えている。各遺跡については網羅的な把握に努めたが、全体を踏査、実見したわけではないことを断っておく。また、遺跡名が付けられていない場合、字名等により仮に呼称した。(中原 齊)

#### 参考文献

- 江府町町史編さん委員会『江府町史』江府町 1975
- 溝口町誌編さん委員会『溝口町誌』溝口町 1973
- 田中秀明・清水真一『大山西麓埋蔵文化財分布調査報告書』1977
- 田中秀明他『神原遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会 1979
- 田中秀明『岩出遺跡発掘調査報告書』日野町教育委員会 1980
- 佐々木謙他『江美城址調査概報』江府町教育委員会 1982
- 益田晃他『上中ノ原・井後草里遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会 1983

補註 美用上ノ原出土の須恵器が江府町歴史民俗資料館に保管されており、山陰須恵器編年1期に相当し、5世紀代に遡るものである。5世紀後半(中期)の古墳が存在した可能性は高い(附載参照)。

### 第3章 佐川第1遺跡

#### 第1節 試掘調査

佐川第1遺跡は、江戸町佐川字七代<sup>ひだか</sup>に所在しており、従来より、弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石等が表面採集されている。但し、遺物が採集されている地点は、調査地区の南側に外れており、遺跡の範囲の確認も含めて6本の試掘トレンチを設定した。試掘トレンチでは遺構は確認できなかったが、第2・4・6トレンチで遺物を検出した。出土状況は、第6トレンチにおいて比較的良好な包含層が認められたが、第2トレンチでは散在的で、第6トレンチ付近からの流入と考えられた。したがって、第4・6トレンチの周囲200mを拡張して調査を行なう一方、北側への広がりを確認するために第7トレンチ、さらに、第1トレンチと小さな谷部を挟んで東へ40mの位置の緩斜面にも第8トレンチを設定したが、共に遺物等は確認できなかった。この結果、佐川第1遺跡は、東光寺裏山斜面が、緩く傾斜変換する標高172m以下の調査地区外に広がっており、その北端部を調査

したことになる。

調査地内中央に設けたベルトの土層断面でみると、層序は①暗褐色腐食土、②黒褐色土(クロボク)、③暗褐色土、④淡褐色土以下疎層となっており、山側では①②層が薄く、③④層は認められない。遺物は①層下位に、弥生土器の分布があり、②③層は縄文土器の包含層と認められた。佐川第1遺跡は、包含層が40~90cmあり、弥生時代と縄文時代の2つの文化層を層位的に認めることができる。

- ① 暗褐色土(腐食土)しりがない。
- ② 黒褐色土(クロボク)サラサラ。
- ③ 暗褐色土(黄灰色粒を多く含む、しまっている)
- ④ 淡褐色土(大型礫群を含む)

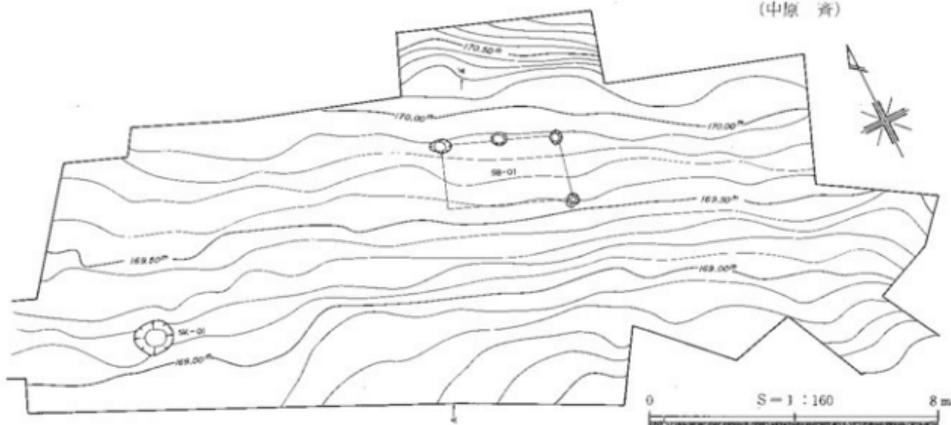
- ★ 銅片
- ▲ 土師器
- 縄文(銅貨)
- 無文
- △ 無文(ヘラ磨き)
- + 弥生その他
- 石製品



挿図7 佐川第1遺跡土層断面図

挿図7 佐川第1遺跡土層断面図

(中原 齊)

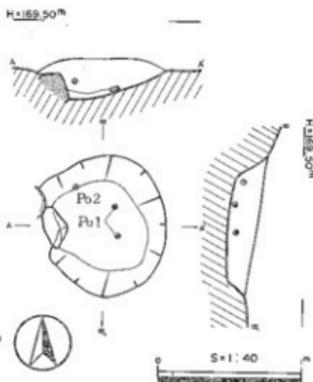


挿図8 佐川第1遺跡全体図

## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

### 1 遺構

**SK-01** 調査区南西部に位置し、南北100cm東西90cm深さ22cmを測る。断面形は皿状を呈し底面は平坦であるが水平でない。埋土は黒褐色土1層で、焼土・炭化物等はみられなかった。底面近くで縄文土器3片が出土している。Po 1・2とも無文土器で、Po 1は外面へラミガキ調整を施す。後～晩期の時期であるが土壌の性格は不明である。(太田正康)



挿図9 佐川第1遺跡SK01遺構・遺物実測図

### 2 遺物

#### 土器 (挿図10、図版6)

##### 早期の土器 (Po 3)

長径6mm程度の楕円を回転施文する。胎土中に少量繊維を含む。大きく黄島式併行のものである。

##### 前期の土器 (Po 4～6)

いずれも口縁端部を粘土の貼り付けによって肥厚させる。Po 4は、端部外面に2条の沈線を、口縁下に器面に対して斜め方向の刺突(細い棒状原体による)を施す。内面はナデ調整である。Po 5の口縁端部外面及び口縁下には、器面に対してほぼ垂直の刺突を施す。口縁端部内面には斜位の条痕が明瞭に残るが、これは装飾的なものと考えられる。端部内面15mmの幅を施文範囲としている。Po 6は、口縁端部外面・口縁下に貝殻腹縁圧痕文を施す。外面は条痕地で内面はナデ調整である。

##### 後期の土器 (Po 7)

10～13mm幅の縄文帯を有する磨削縄文土器である。内面は条痕調整及びナデ調整である。中津式併行の時期である。

##### 晩期の土器 (Po 8)

外面には削痕が明瞭に残る。(内面はナデ調整が行なわれ、不明瞭ながら削痕が認められる。)口縁及び口縁下の突帯上に刻みを施す。黒土B II 式の特徴を示す。

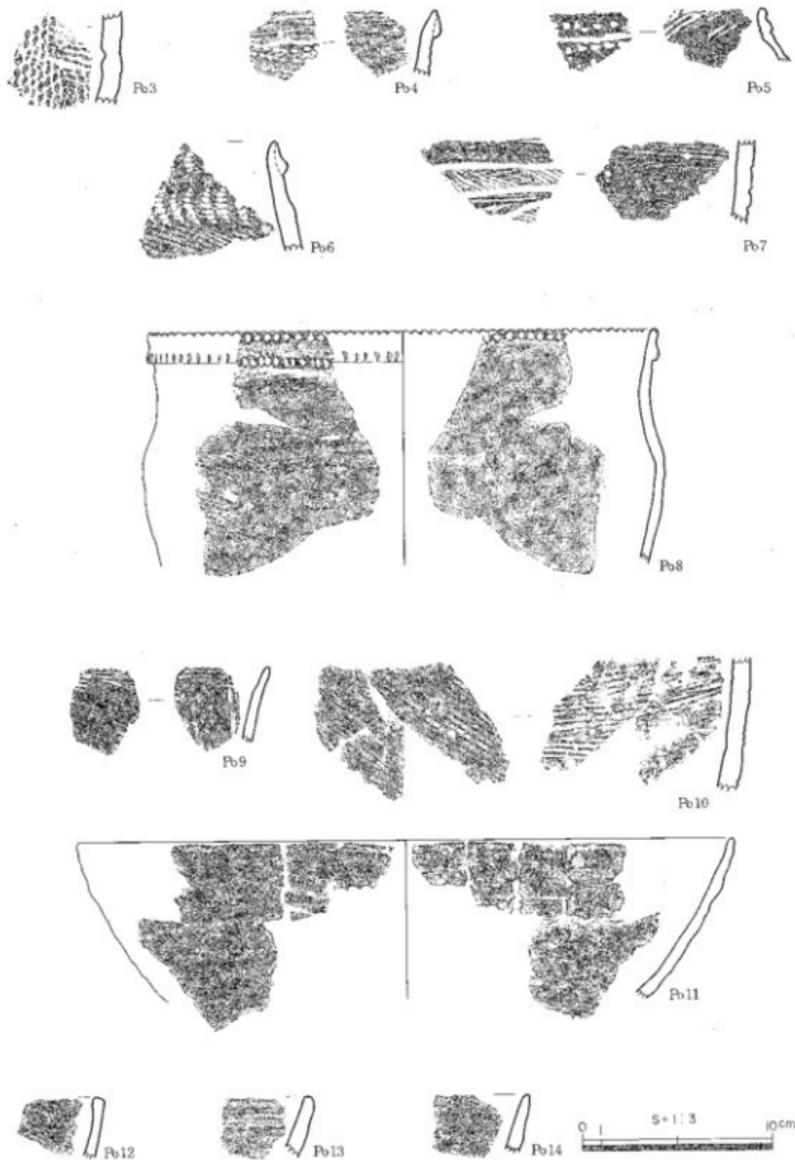
##### 条痕系土器 (Po 9・10)

内外面条痕調整を行なう。Po 9は口縁部片であり、端部を細く仕上げる。Po 10は胴部片で、器厚は8～9mmと厚手である。共に時期は不明である。

##### 無文精製土器 (Po 11・12)

内外面へラ磨き調整により丁寧に仕上げられる。共に薄手の浅鉢である。

##### 無文粗製土器 (Po 13・14)



挿圖10 佐川第1遺跡縄文土器実測図

外面削痕が残り、内面ナデ調整である。Po13・14とも端部は丸くおさめる。

註 近畿地方における高山寺式の時期に至る以前の段階という意味で「黄島式」を用いた。

(太田正康)

分類	押型文	刺突文	条痕系	無文	無文(精製)	無文(粗製)	計
第1遺跡	2	1	12	54	19	29	117
第5トレンチ			1			1	2
計	2	1	13	54	19	30	119

挿表1 佐川第1遺跡縄文土器組成表

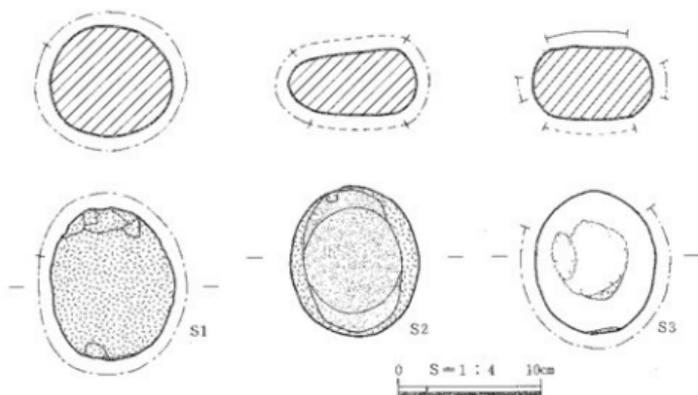
遺物番号	押型番号	図版番号	取上番号	口径 (mm)	手法・形態	胎土	色調	施成
Po1	10	6	SK01 SG第1 115, 116		外面 粗いヘラミガキ 内面 ナデ調整	砂粒、黒炭母を含む	内外面 淡褐色 暗褐色	良好
Po2	10	6	SK-01 SG第1 114		内外面ナデ調整。外面の磨損は やや軽い。裏面付近の破片。	1~2mmの長石を含む	内外面 淡赤褐色	良好
Po3	10	6	SG第1 3		外面縦位に横内(3×5mm)の 凹線施文。	1~3mm程の石英、 長石、黒炭を含む。	内外面赤褐色	良好
Po4	10	6	SG第1 57		口縁端部外面は粘土貼り付けに よって彫摩する。外面は細い棒状 磨石による刺突を施す。内面ナ デ調整。	2~3mm程の石英、 長石を含む。	内外面 暗赤褐色	良好
Po5	10	6	SG第1 33		口縁端部外面は粘土貼り付けに よって彫摩する。口縁及び胴部 外面に刺突文。口縁端部内面に 条痕。内面ナデ調整。口縁内磨 する。	1mm程の石英を少量 含む。	内外面暗褐色	良好
Po6	10	6	SG第1 3		口縁端部外面は粘土貼り付けに よって彫摩する。肥厚部及びその 下に貫通磨石による条痕施文。 外面条痕地、内面ナデ調整。	石英を少量、長石を 含む。	内外面 淡赤褐色	良好
Po7	10	6	SG第1 49		外面幅10~13mmの窪線の間に 横文施文。無文磨石は「家」に ナデられる。内面条痕磨石及び ナデ調整。	1mm程の長石を含む。	内外面褐色	良好
Po8	10	6	SG第1 12, 13	径口径 26.6	外面ヘラケズリ。口縁下の突起 上及び底部に刻み。内面ヘラケ ズリ後和いナデ。一部スス付着。	1~2mmの石英を多量 含む。砂粒、長石、黒 炭母、炭粒を含む。	内外面 褐色 暗褐色	良好
Po9	10	6	SG第1 189		内外面条痕。内面に指痕付着あり。	砂粒を多量、石英を 少量含む。	内外面赤褐色	良好
Po10	10	6	SG第1 6, 43, 51		内外面条痕調整。内面調整はや や軽い。	2mm程の石英、長石、 黒炭母、炭粒を少量 含む。	内面 淡褐色 暗褐色	良好
Po11	10	6	SG第1 12, 16, 17, 30, 85	径口径 35.6	内外面ヘラミガキ。	1mm程の石英を含む。	内面 褐色 暗褐色	良好
Po12	10	6	SG第1 112		内外面ヘラミガキ。口縁端部平 凸帯をもつ。	1mm程の長石、石英、 砂粒を含む。	内外面 褐色	良好
Po13	10	6	SG第1 3		外面ヘラケズリ。内面ナデ調整 端部丸くおさめる。	1~2mmの石英、長石、 黒炭母を含む。	内外面 褐色	良好
Po14	10	6	SG第1 76		外面ヘラケズリ。内面ナデ調整。 外面にスス付着。	0.1mm程の石英を多量 含む。黒炭母を含む。	内面 淡褐色 暗褐色	不良

挿表2 佐川第1遺跡縄文土器観察表

### 石器 (挿図17、挿表3、図版6)

本遺跡及び後述の第5章岩屋ヶ成遺跡の石器は、剥片石器と石核石器・礫石器とに分類したが、その使用時期については、両遺跡とも層位的に確認していないため、判断を遅けた。石核石器・礫石器は、次の様に分類した。(鈴木通之助「図録石器の基礎知識III」1981柏山房P22表1を参考にした。)

- ①磨石・敲石……磨痕・磨面、敲痕・敲面、凹みが1個体に併存する場合が多いため、その組みあわせにより次のI~VIの6タイプに細分した。I(磨痕のみ)、II(敲痕のみ)、III(磨痕+敲痕)、IV(磨痕+凹み)、V(敲痕+凹み)、VI(磨痕+敲痕+凹み)。



挿図11 佐川第1遺跡石器実測図

- ②石斧……打製石斧・局部磨製石斧・磨製石斧・環状石斧がある。  
 ③石錘……円礫（又は円石）を利用して、その長軸方向の両端を欠いた石錘。その両端に縄掛け用の切り込みを施した切目石錘。溝を巡した有溝石錘等がある。  
 ④石皿……中央部に磨耗による大きな凹みを有する石器。  
 ⑤砥石……使用面がほぼ平坦で、磨耗による小さな凹みが散在する石器。一部には線条痕が見られる。

本遺跡では、磨石・敲石を3点検出した。その他黒曜石剥片18片を検出した。

①磨石・敲石（S1～3）〔挿図11、図版6〕

磨石・敲石II（S1）

全面に敲痕が認められる。過度の敲打によって、上下端に剝離痕、左右端に平坦面がそれぞれ見られる。

磨石・敲石III（S2）

表裏面には磨痕又は磨面が、端部には敲痕が認められる。表面（図化した側）は、過度の磨耗により光沢を持つ。

磨石・敲石VI（S3）

裏面には磨痕（又は磨面）が認められ、過度の磨耗により光沢を持つ。（松本琢己）

遺物番号	挿図番号	図版番号	分類	取上番号	遺存状態	長さ	巾	厚さ	重さ	材質
S1	17	6	磨石、敲石II	SGW 45	完	10.8	8.6	7.9	1.010	石英閃緑ひん岩
2	〃	〃	〃 III	〃 60	〃	10.6	8.1	4.7	0.720	ひん岩
3	〃	〃	〃 VI	〃 102	〃	10.5	8.5	5.3	0.680	無斑晶安山岩

（単位：長さ、巾、厚さcm、重さkg）

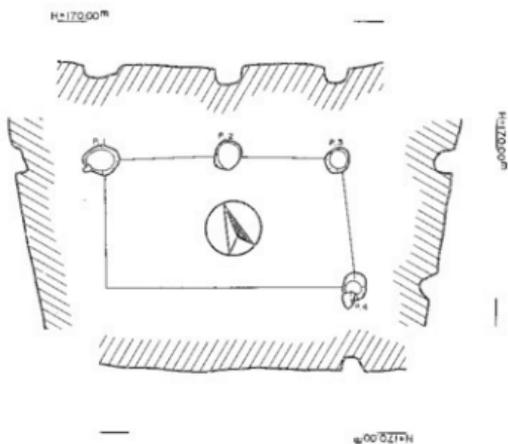
挿表3 佐川第1遺跡出土石器観察表

### 第3節 弥生時代以降の遺構と遺物

弥生時代の遺構面は調査段階では明確にできなかったが、①層下部において弥生土器の層的分布を確認している。この推定遺構面は約8°の傾きをもつ緩斜面となっており、遺構は②層を除去した雑層（SB01を検出した北側では③・④層は認められない）面で検出している。

#### 1. 遺構（挿図12、図版2）

SB-01 調査区中央のやや北寄りに位置しており、現状では主軸をN-67°-Wにとる梁行1間、桁行2間の掘立柱建物であるが、傾斜の低い南西側では柱穴を確認できなかった。P1～P4より復原すると妻通長1.82m、桁行長3.33m、推定床面積約6㎡前後と考えられる。柱穴間距離はP1から179、154、182cmで、各柱穴のプランはP1（53×42-19）、P2（46×36-26）、P3（40×33-27）、P4（40×34-22）cmである。図化できなかったが、P2から弥生土器の細片を検出しており、弥生時代の可能性が高い。周辺出土の遺物からみて後期後半に属するものであろう。



挿図12 佐川第1遺跡SB01遺構図

#### 2. 遺物（挿図13・図版6）

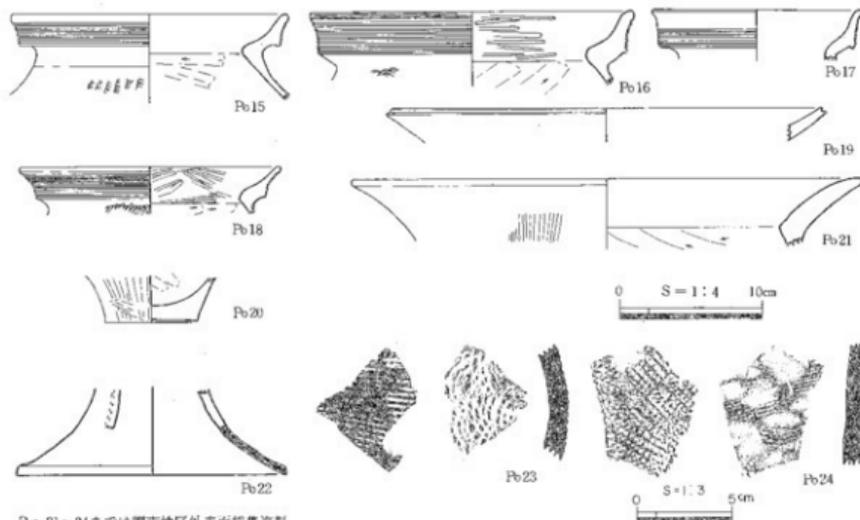
弥生土器 図化できたのは（Po15～20）

甕4、高坏1、底部1である。甕の口縁は外面に櫛描平行沈線を施す複合口縁である。後述する岩尾ヶ成遺跡土器分類によるとPo15・16はC-b類、Po17・18はD-a類に属す。口縁内面はヘラミガキする個体（Po16・18）とナデる個体（Po15・17）がある。高坏Po19は口唇端部に一条の凹線を巡らすのが、浅い皿状坏部を呈すC類に近いものである。底部Po20はA-b類の特徴を有している。これらは、青木遺跡の土器編年観では青木Ⅲ期に属するものと考えられる。

土師器  
須恵器  
（Po21～24）

地区外で表面採集された遺物であり、土師器甕1、須恵器高坏1、甕胴部片2を図化した。Po21は口縁部が大きく開く単純口縁である。Po24は、外面に格子タタキを施し、内面は当て具を用いず指圧痕が残っている。これらから調査地区外には、奈良～平安時代に降る遺構の存在が推定できる。

（中原 齊）



Po 21～24までは調査地区外表面採集資料  
(江戸町教育委員会保管)

図13 佐川第1遺跡出土弥生土器・土師器・須恵器観察図

遺物番号 採取番号 図版番号	取上番号	器種	法	量 (cm)	形	態	手	法	備	考
Po15 13 6	S G第1 2 トレン テ No 2	甕	復口径	19.2	やや外反気味に立ち上がる 複合口縁で6条の櫛形平行 線文を施す。頸部に貝殻 縁による刺突文。		口縁部内外面ナデ。内面頸 部以下ヘラケズリ。		胎土 焼成 色調	1～2mm程の石英、 長石を含む。 良好。 内外面淡明褐色。
Po16 13 6	S G第1 B区 No158	甕	復口径	22.4	やや外反気味に立ち上がる 複合口縁で多条の櫛形平行 線文。頸部に刺突文を施す。		外面口縁部ヘラミガキ他 ナデ内面頸部以下ヘラケズ リ他ヘラミガキ。		胎土 焼成 色調	胎土 1mm程の長石、石英 を含む。 良好。 内面淡褐色。外面淡 褐色。
Po17 13 6	S G第1 B区 No161	甕	復口径	14.6	ほぼ直立気味な複合口縁。 外面多条の櫛形平行線。口 縁下縁はト単している。		口縁内外面ココナデ。		胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内外面淡褐色。
Po18 13 6	S G第1 B区 No150	甕	復口径	18.0	やや外反する複合口縁。外 面には数条の櫛形平行線。 頸部には刺突文を施す。		外面ココナデ。内面口縁部 ヘラミガキ。頸部以下ヘ ラケズリ。		胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内外面淡褐色。
Po19 13 6	S G第1 B区 No132	高坏	復口径	30.0	浅く内湾する坏部。肩部に 凹縁。		内外面ココナデ。		胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内外面淡褐色。
Po20 13 6	S G第1 A区 No 7	底部	底径	6.5	平底。		外面口縁部ヘラミガキ。底面 ナデ。内面底部ヘラケズリ ナデ。		胎土 焼成 色調	砂粒を多く含む。 良好。 内面淡明褐色。外 面淡褐色～明褐 色。
Po21 13 6	S G 表面採集	甕 (土師器)	復口径	35.4	開曲する頸部から口縁が外 反する「く」の字状口縁。		口縁内外面ナデ。頸部以下 外面ヘラケミ。内面ヘラケ ズリ。		胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 淡明褐色。
Po22 13 6	S G 表面採集	高坏 (須恵器)	復口径	14.2	「ハ」の字状に広がる脚部 片。透し孔。		内外面ココナデ。		胎土 焼成 色調	密。 良好。 内面淡褐色。外面青 褐色。全面に自然 釉かかる。
Po23 13 6	S G 表面採集	甕 (土師器)	胴部片。				外面平行タタキ。内面同心 円文。		胎土 焼成 色調	密。砂粒を含む。 良好。 内外面青褐色。
Po24 13 6	S G 表面採集	甕 (須恵器)	胴部片。				外面格子状タタキ。内面コ コナデ。		胎土 焼成 色調	密。砂粒。2mm程の 長石、石英を含む。 良好。 内面淡褐色。外面 淡褐色。

図表4 佐川第1遺跡出土弥生土器・土師器・須恵器観察表

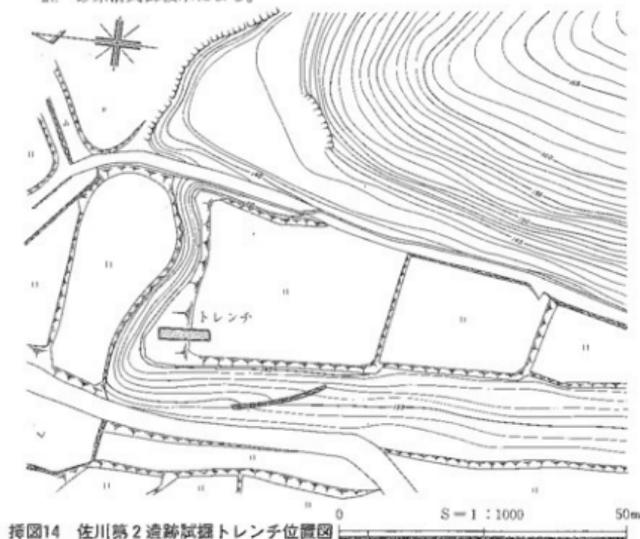
## 第4章 佐川第2遺跡

佐川第2遺跡は、佐川部落南端、佐川第1遺跡から南へ500mの江府町佐川字ユウメに所在している。下位の水田面との比高差約10mを測る河岸段丘面に立地しており、かつてはここに佐川尋常小学校が建てられていた。昭和初期の小学校移転後、校地を水田に戻すために掘り起こした際、完形の甕（甕？）形土器が6個体発見されたと伝えられている<sup>註</sup>。この土器は現在所在が不明で、時期等は確認できないが、完形の土器がまとまって出土したことは特筆に値する。

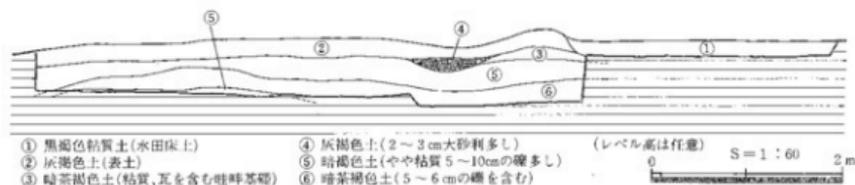
段丘の北側は畑地化され崖面となっているが、この先端部を削って自動車道建設の為に工事用道路が通ることになり、これにより削り取られる約130m<sup>2</sup>について遺跡の存在を確認する必要が生じた。調査は幅2m、長さ9mの試掘トレンチを設定し、最高で深さ75cmまで掘り下げた。約20cm掘り下げると水田の畦畔基礎等から、小学校の瓦片が多数出土したが、それより下層は堅くしまった疎層となり、遺物等は全く出土しなかった。したがって、調査対象地内に限って言えば、水田造成の為に著しい攪乱をうけたものと考えられ、遺構、遺物を確認することはできなかった。

註 砂原清氏御教示による。

(中原 齊)



挿図14 佐川第2遺跡試掘トレンチ位置図



- ① 黒褐色粘質土(水田床土)
- ② 灰褐色土(表土)
- ③ 暗茶褐色土(粘質、瓦を含む畦畔基礎)
- ④ 灰褐色土(2~3cm大砂利多し)
- ⑤ 暗褐色土(やや粘質5~10cmの礫多し)
- ⑥ 暗茶褐色土(5~6cmの礫を含む)

(レベル高は任意)

S=1:60 2m

挿図15 佐川第2遺跡試掘トレンチ土層断面図

## 第5章 岩屋ヶ成遺跡

佐川4～7号墳調査中に縄文・弥生土器片を検出した。しかし、古墳調査終了間際まで下層に存在した岩屋ヶ成遺跡(弥生時代)を確認できず、遺物は1部を除いて、その出土地点を記録しないまま取り上げている。遺構は竪穴住居跡2基、掘立柱建物跡4棟他を検出したが、古墳築造時にかなり削平を受けたものと考えられ、残存は良好とはいえない。遺構に伴う遺物は検出できなかった。

### 第1節 縄文時代の遺物

#### 1 土器 (挿図16、図版6)

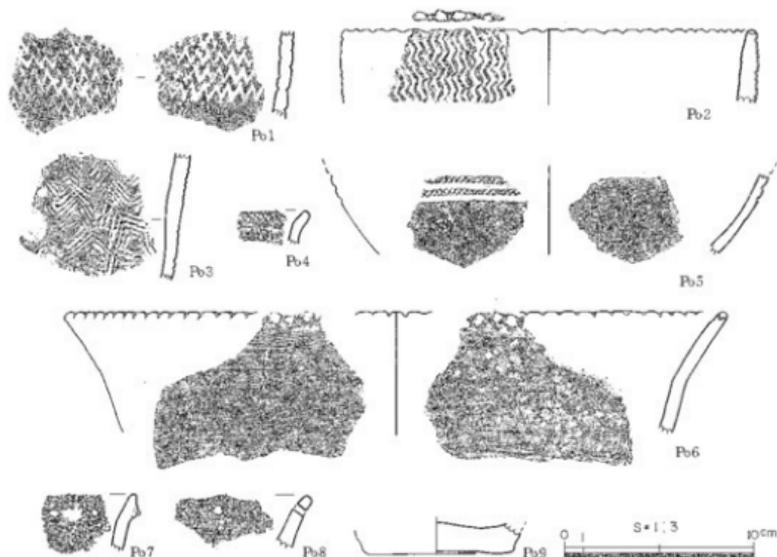
##### 早期の土器

##### 押型文土器 (Po1～3)

山形を内外面に横位施文するPo1と縦位に施文するPo2がある。Po3はやや不規則な横位施文が行なわれ、胴部から底部にかけての屈曲が明瞭である。Po1・2は黄島式、Po3は高山寺式よりやや新しい時期に含まれる。

##### 後期の土器 (Po4～6)

Po4は口縁端部が屈曲気味に外に張り出して、端部外面にRLの縄文施文が認められる彦崎KII式の特徴をもつ。Po5は胴部片である。3本以上の沈線によってLRの縄文が画される。外面刻離の為明瞭には観察できないが、沈線以下はヘラ磨きを行なう。後期



挿図16 岩屋ヶ成遺跡縄文土器実測図

前半の特徴をもつと考える。Po6の外面にはヘラ状工具による6mm幅の条痕がみられる  
口縁端部には深さ3~4mmの刺突を施し、端部を刻んでいる。

#### 晩期の土器 (Po7)

口縁端部をナデで丸く仕上げ、口縁下に刻目突帯をめぐらす。黒土BII式の特徴をもつ。

#### 時期不明の土器 (Po8・9)

Po8は高低差の小さい波状を呈し、口縁下に径4mmの円孔がある。Po9はおそらく無文  
積製土器の底部片である。底部外面中央部若干上げ底気味である。

註1 上福万遺跡(鳥取県米子市)出土の押型文土器の中にも、類似の遺物がみられた。上福万遺跡の  
報告(鳥取県教育文化財団調査報告書17)で、早期の土器I類A種①、I類D種としているもの  
がそれである。内面調整はヘラ調整及びナデ調整であるが、その違いは土器の部位によるものと  
考えられる。「広島県帝釈峡遺跡群発掘調査室年報VI」(広島大学帝釈峡遺跡群発掘調査室1983)  
中の豊松堂内洞窟遺跡出土の「変形山形押型文」とされる遺物も類似のものであろう。

註2 池葉須藤樹「岡山県児島郡瀬崎町彦崎貝塚調査報告」1971 (木田正康)

遺物番号	挿入番号	図版番号	取上番号	口径 (cm)	手法・形態	胎土	色調	焼成
Po1	16	6	SGW624		外面及び口縁部内面に押型文 (横位の山形)を施す。内面ナ デ調整。	0.5~1mm程の石英、 黒雲母を含む。	内面 赤褐色 外面 暗褐色	良好
Po2	16	6	SGW609		外面に押型文(縦位の山形)口 縁端部に刺突を施す。	金雲母少量、0.5mm程 の石英、緑泥を含む。	内面 淡褐色 外面 褐色	良好
Po3	16	6	SGW462		外面に押型文(特殊変形)を施 す。	黒雲母、0.5mm程の石 英少量、緑泥を含む。	内外面赤褐色	良好
Po4	16	6	SGW686		口縁端部外面に5mm程で縄文 (RL)を施す。	0.5~2mm程の砂粒を 少量含む。	内外面 淡赤褐色	良好
Po5	16	6	SGW235		3本以上比喩あり、沈線間に縄 文(LR)を施す。	1~2mm程の砂粒を 少量含む。	内面 淡褐色 外面 茶褐色	良好
Po6	16	6	SGW1	唐口径 34.2	外面条痕。内面ヘラケズリ後粗 いナデ。口縁端部に刺突。	0.5~2mm程の砂粒、 緑泥を少量含む。	内外面淡褐色	良好
Po7	16	6	SGW686		口縁下の突帯上に刻み、刺突が ひどい。	雲母、1mm程の石英 を含む。	内外面淡褐色	良好
Po8	16	6	SGW118		口縁波状を呈す。口縁部に円孔 あり。	0.5~1mm程の砂粒 を含む。	内外面淡褐色	良好
Po9	16	6	SGW350	底径 7.8	内外面粗いナデ。	0.5~2mm程の石英、 長石を少量含む。	内外面淡褐色	良好

挿表5 岩屋ヶ成遺跡縄文土器観察表

#### 2 石器 (挿図17・18、挿表5、図版6・7)

##### 剥片石器

石鏃(S1) サヌカイト製石鏃1点出土している。剥片(黒曜石4片、サヌカイト・ジャスパー・鉄石英・石英各1片)も検出した。

##### 石核石器・礫石器(S2~13)

分類についての詳細は、第3章第2節石器の項を参照された。

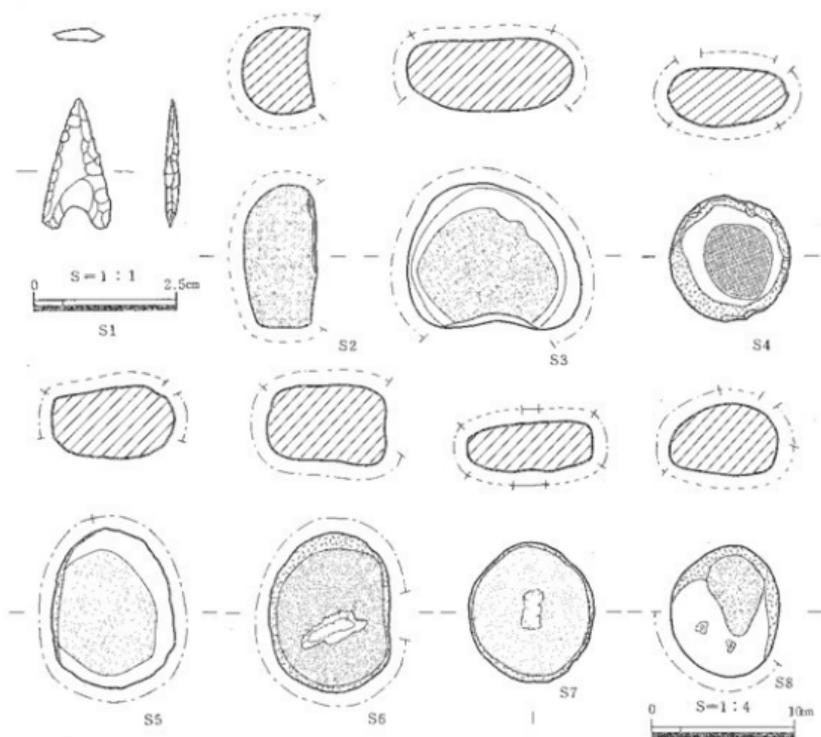
#### ①磨石・敲石(S2~8)

##### 磨石・敲石I(S2, 3)

S3は、磨面中央部が若干凹んでおり、石皿状を呈する。

##### 磨石・敲石III(S4, 5)

S5は、周縁部に敲痕が認められ、左縁は過度の敲により平坦面が見られる。また、磨面に若干凹みが認められ、石皿状を呈する。S4は、過度の敲により、剝離痕が見られる。



挿図17 岩層ヶ成遺跡石器実測図①

磨石・敲石V (S6)

周縁部に敲痕が認められ、左縁は過度の敲により平坦面が見られる。

磨石・敲石VI (S7、8)

S7は、過度の磨により平坦な磨面が見られる。S8は、周縁部に過度の敲打による平坦面が見られる。

②石斧 (S9、10)

磨製石斧 (S9)

敲痕と磨痕が認められ、敲による整形後、さらに磨によって整形された様子が観察できる。また刃部は両凸刃で鋸刃を呈し、刃部端は光沢を持つ。石斧主面と両側縁には、明瞭な稜が認められない。

打製石斧 (S10)

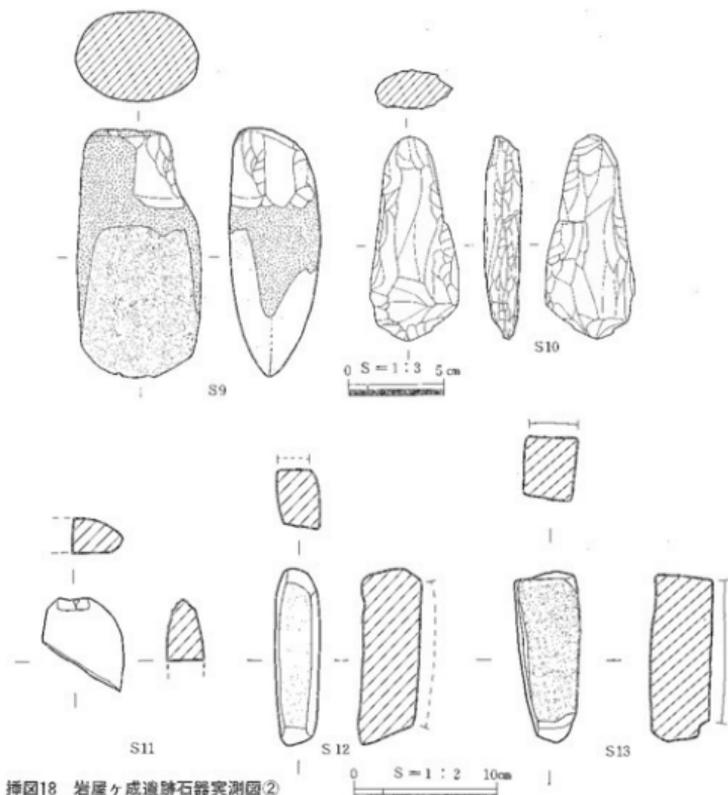
刃部は、両面に斜隆が見られ、両刃となっている。

③石錘 (S11)

⑤砥石 (S12、13)

S13の砥面には、長軸方向に伸びる凹みが数本認められる。

(松本琢己)



挿図18 岩屋ヶ成遺跡石器実測図②

遺物番号	挿図	国版	分類	取上番号	遺存状態	長さ	巾	厚さ	重さ	材質	備
S 1	17	8	石 鏃	S GW592	完	2.25	1.15	0.28	0.5	サヌカイト	
S 2	〃	7	礫石・敲石I	〃 14	欠	(10.1)	(5.0)	(6.15)	0.529	ひん岩	
S 3	〃	〃	〃	〃 162	完	10.45	12.2	5.1	1.910	中生代火山岩類	
			〃	〃 47	〃	10.7	5.2	4.1	0.350	無垢品安山岩	
			〃	〃 714	〃	10.4	4.8	4.0	0.520	角閃石安山岩	
S 4	17	7	礫石・敲石III	669	〃	8.9	8.4	4.1	0.430	花崗閃緑ひん岩	
S 5	〃	〃	〃	328	〃	12.0	8.5	5.3	0.740	石英閃緑岩	
			〃	572	〃	10.2	8.8	5.5	0.750	石英閃緑ひん岩	
			〃	342	〃	7.0	6.5	3.2	0.225	角閃石含有黒母岩花崗岩	
			〃	688	〃	10.2	6.3	3.7	0.540	花崗閃緑岩	
			〃	296	〃	13.1	11.2	7.1	1.850	閃緑ひん岩	
			〃	44	〃	11.9	7.1	4.2	0.575	角閃石含有花崗岩	
			〃	275	欠	10.9	8.2	5.2	0.570	角閃石含有黒雲母花崗岩	
			〃	643	完	11.3	9.0	6.3	0.990	花崗閃緑ひん岩	
S 6	17	7	礫石・敲石V	320	〃	11.4	8.4	5.9	1.550	角閃石黒雲母花崗閃緑岩	
S 7	〃	〃	礫石・敲石VI	621	〃	9.25	7.6	5.0	0.440	安山岩質凝灰岩	
S 8	〃	〃	〃	185	〃	9.9	8.7	3.6	0.400	黒雲母角閃石安山岩	
			〃	569	欠	13.6	10.8	5.7	1.050	中生代火山岩類	
S 9	18	8	磨製石器	599	完	13.1	6.5	4.8	0.600	花崗閃緑ひん岩	
S10	〃	〃	打製石器	597	〃	10.7	4.7	1.9	0.140	緑色片岩	
S11	〃	〃	石 鏃	614	欠	(6.7)	(5.6)	2.5	0.110	閃緑ひん岩	
S12	〃	〃	砥 石	566	完	12.6	3.1	4.2	0.355	点紋片岩	
S13	〃	〃	〃	566	〃	12.1	4.4	4.2	0.360	角閃石安山岩	
			〃	434	不明	5.4	1.4	5.4	0.070	粘板岩	
			〃	450	〃	4.1	0.6	4.0	0.020	〃	
			〃	585	〃	5.3	1.6	4.6	0.075	〃	
			〃	709	〃	5.3	1.0	5.5	0.045	〃	

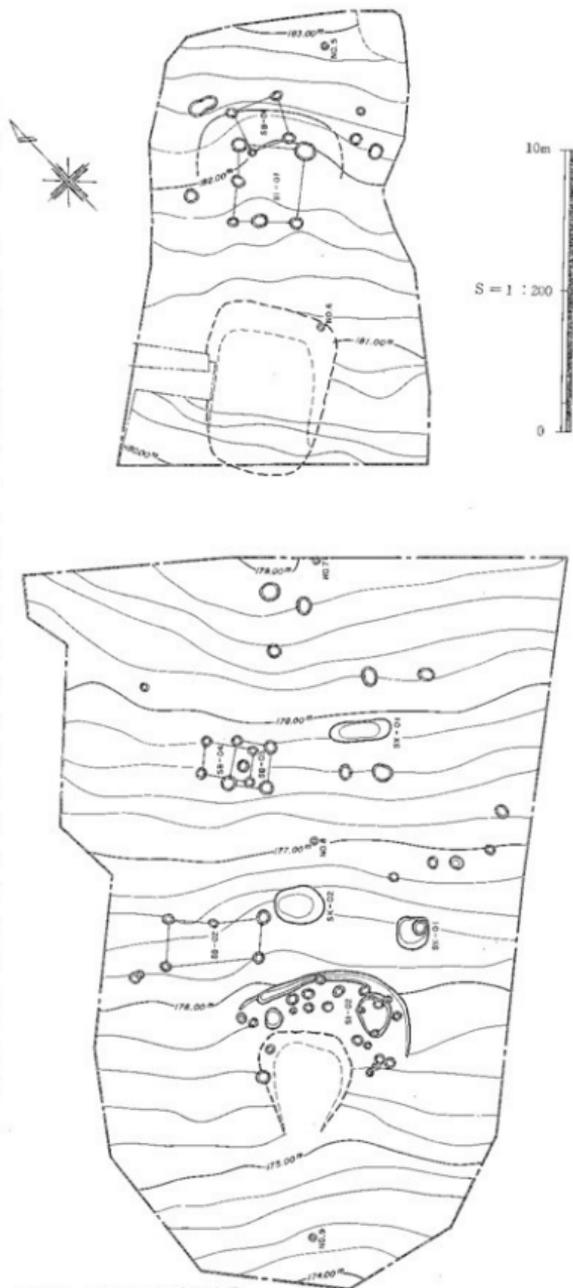
(単位: 長さ・巾・厚さcm、重さg) ( )は残存数を示す。

挿表6 岩屋ヶ成遺跡出土石器観察表

## 第2節 弥生時代

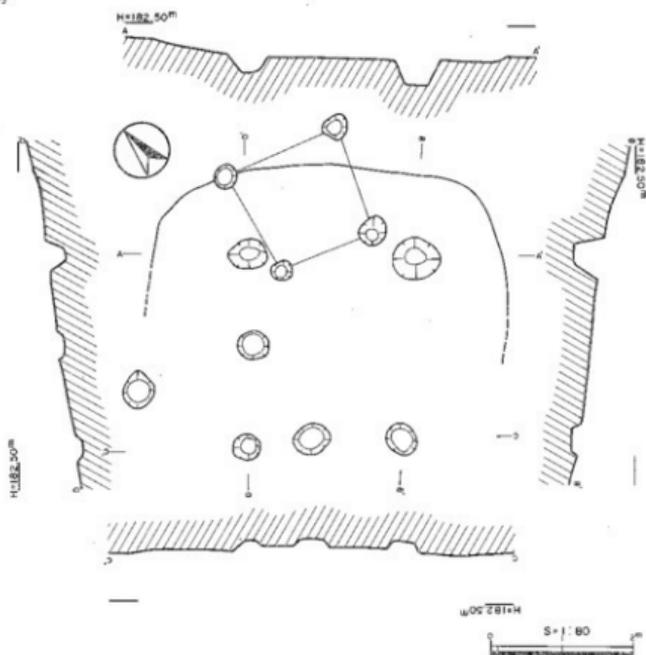
### 以降の遺構と遺物

岩屋ヶ成遺跡における弥生時代以降の遺構としては最終的に竪穴住居跡2基、掘立柱建物跡4棟、土壇墓1基、土壇2基を検出しているが、遺構面、埋土が共に黒褐色粘質土(クロボク)であったことと、古墳の調査を優先し遺跡の認定が遅れたことにより、各遺構の遺存状況は必ずしも良好とはいえない。出土遺物としては遺構の時期を示すものとして、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器を多数検出しているが、遺構に直接伴う土器で実測できたものは1点もない。また多くは破片となっており、口縁・底部等を図化し得たのみである。これら断片的な資料からみて、岩屋ヶ成遺跡の立地する佐川西尾根には、古墳築造以前に、弥生時代末～古墳時代初頭の短期間、集落が営まれたことが明らかになった。上記のような状況であるので、以下に検出した遺構と遺物について簡単に記述することとする。(中原 斉)



挿図19 岩屋ヶ成遺跡全体図

# 1. 遺構



挿図20 岩屋ヶ成遺跡S101遺構図

## S1-01 (挿図20、図版3)

位置 調査区北端中央寄り、SB-01と切り合い、標高182m前後である。

形態 平面形は、柱穴の並び、残存する輪郭から類推すると、隅丸方形と考えられる。主柱穴はP1～P4で、その距離は、P1より2.34m、2.64m、2.19m、2.75mである。その他補助柱穴としてP5・P6を検出した。各柱穴の規模はP1(55×43-30)P2(65×62-45)P3(43×39-14)P4(38×34-8)P5(49×41-12)P6(42×39-7)cmである。床面は残存する側の辺で約5.0mで、他辺も同程度であったと考えられる。側壁高・側溝・床面積は不明である。本住居跡には中央ピットは存在しない。

土層 住居跡の掘り方、柱穴とも黒色粘質土である。

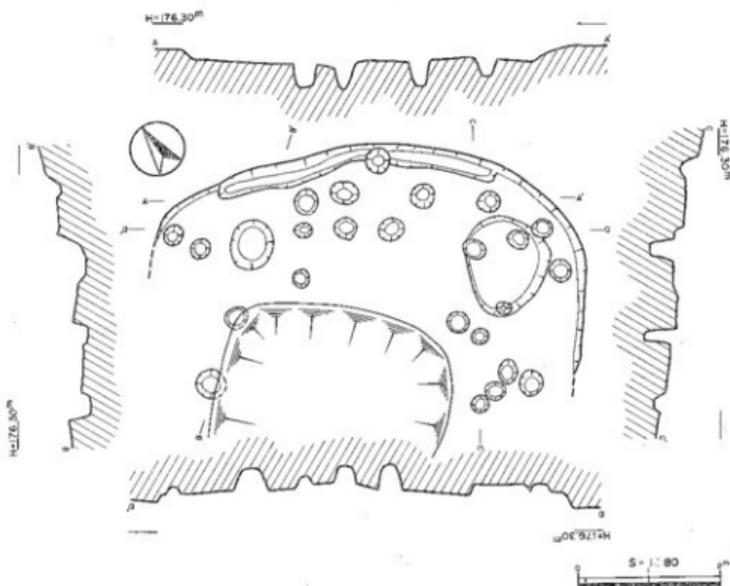
遺物 検出しなかった。

時期 周辺出土遺物より弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属すと考える。

## S1-02 (挿図21、図版3)

位置 調査区南部中央寄り、SB-02の南側に位置し、標高176m前後である。

形態 削平の為残存は不良であり、北側で床面・側溝が確認できる程度である。柱穴の可能性をもつものにP1～P9があり、その他P10～P25がある。各ピットの残存規模は



挿図21 岩屋ヶ成遺跡S102遺構図

挿表7のとおりである。床面積・側壁高は不明であるが、側溝は北側で確認でき、床面からの深さ3～5cmを測る。床面中央部消失の為、本住居跡における中央ピットの有無は確認できなかった。

土 層 住居跡の掘り方・柱穴とも黒色粘質土である。

遺 物 検出しなかった。

時 期 周辺出土遺物より弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属すと考える。

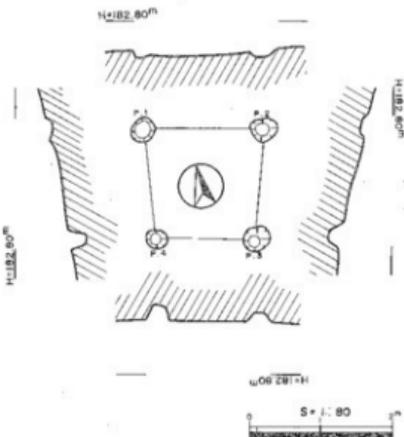
特筆事項 各ピットの性格を把握することはできなかった。

Pit	長径×短径-深さ (cm)	Pit	長径×短径-深さ (cm)	Pit	長径×短径-深さ (cm)
1	70×61-43	10	28×27-16	19	31×30-25
2	24×21-17	11	28×25-7	20	24×19-5
3	31×30-20	12	36×32-34	21	31×29-17
4	34×32-34	13	38×31-37	22	33×24-15
5	31×26-30	14	34×32-38	23	36×31-17
6	24×20-41	15	30×29-27	24	29×24-14
7	25×25-10	16	35×34-37	25	24×22-44
8	39×不明-26	17	27×26-11		
9	32×不明-17	18	30×29-12		

挿表7 岩屋ヶ成遺跡S102ピット一覧表

S B-01 (挿図22、図版4)

- 位置 調査区北端、S I-01と切り合い、  
標高182m前後である。  
S I-01と切り合うが新旧関係は不明である。他の孤立柱建物跡と異なり、主軸が地傾斜に沿わない。
- 形態 主軸はN-15°-Eで、梁間1間(1.68m)桁行1間(1.60m)の建物である。柱穴間距離はP1から1.68・1.60・1.39・1.55mである。各柱穴の規模はP1(37×32-10)P2(38×33-11)P3(40×35-19)P4(31×28-24)cmである。



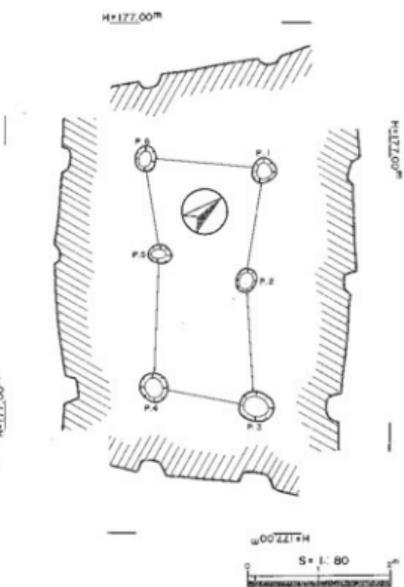
- 土層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。
- 遺物 検出しなかった。

挿図22 岩屋ヶ成遺跡SB01遺構図

時期 周辺出土遺物より弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属すと考える。

S B-02 (挿図23、図版4)

- 位置 調査区南部、S I-02の北側に位置し、標高176m前後である。  
主軸が地傾斜にほぼ直交して建てられる。
- 形態 主軸はN-50°-Wで、梁間1間(1.70m)桁行2間(3.40m)の建物である。柱穴間距離はP1から1.58・1.78・1.48・1.90・1.36・1.70mである。各柱穴の規模はP1(37×35-12)P2(35×28-16)P3(50×42-20)P4(42×40-21)P5(34×26-9)P6(37×28-12)cmである。



- 土層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。
- 遺物 検出しなかった。
- 時期 周辺出土遺物より弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属すと考える。

挿図23 岩屋ヶ成遺跡SB02遺構図

S B-03 (挿図24、図版4)

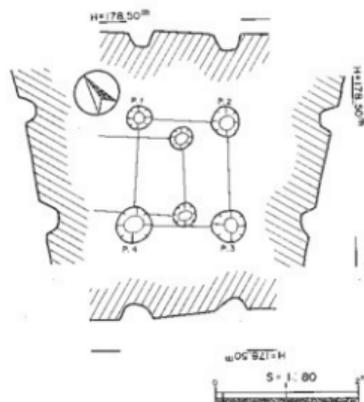
位置 調査区中央部やや南寄り、S B-04と切り合い、標高177m前後である。主軸はほぼ地傾斜に沿っている。

形態 主軸はN-53°-Eで梁間1間(1.36m)桁行1間(1.51m)の建物である。柱穴間距離はP1から1.22・1.45・1.36・1.51mである。各柱穴の規模はP1(36×34-23)P2(44×40-24)P3(49×46-17)P4(53×49-24)cmである。

土層 各柱穴とも埋土は黒色粘質土一層である。

遺物 検出しなかった。

時期 周辺出土遺物より弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属すると考える。



挿図24 岩屋ヶ成遺跡SB03遺構図

S B-04 (挿図25、図版4)

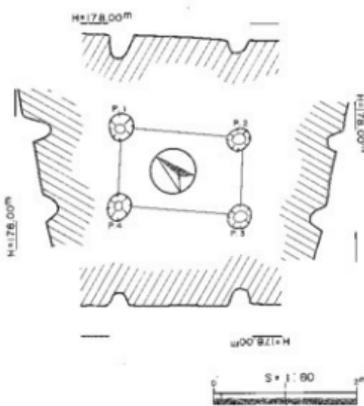
位置 S B-03とはほぼ同位置である。主軸が地傾斜に対して、ほぼ直交して建てられる。

形態 主軸はN-36°-Wで、梁間1間(1.09m)桁行1間(1.72m)の建物である。柱穴間距離はP1から1.67・1.10・1.72・1.09mである。各柱穴の規模はP1(40×34-35)P2(34×30-19)P3(37×32-22)P4(39×32-20)cmである。

土層 各柱穴とも黒色粘質土一層である。

遺物 検出しなかった。

時期 周辺出土遺物より弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属すると考える。



挿図25 岩屋ヶ成遺跡SB04遺構図

S X-01 (挿図26、図版5)

位置 調査区中央部やや南寄り、S B-03・04の東側に位置し、標高177m前後である。

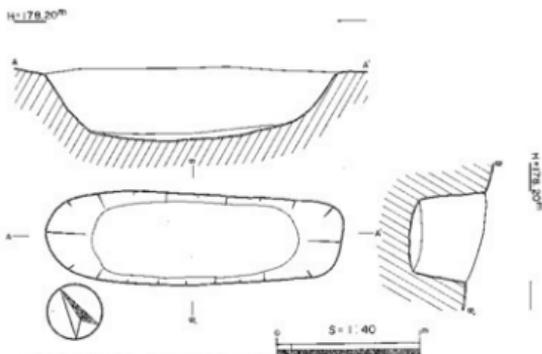
形態 主軸はN-55°-Wで、平面は楕円形である。規模は(2.07×0.64-0.55)mである。床面は中央部でやや凹むが平坦に近い。

土層 埋土は黒色粘質土一層である。

遺物 上層で土器小片を検出したのみである。

性格 平面形・規模・床面の状況より土墳墓と考える。

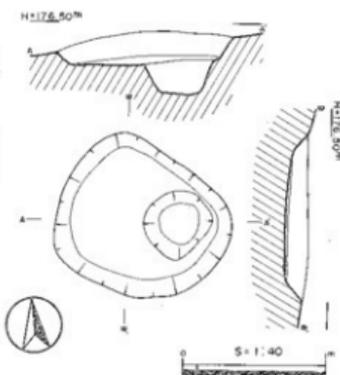
時期 出土遺物より弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属すると考える。



挿図26 岩屋ヶ成遺跡SK01遺構図

SK-01 (挿図27、図版5)

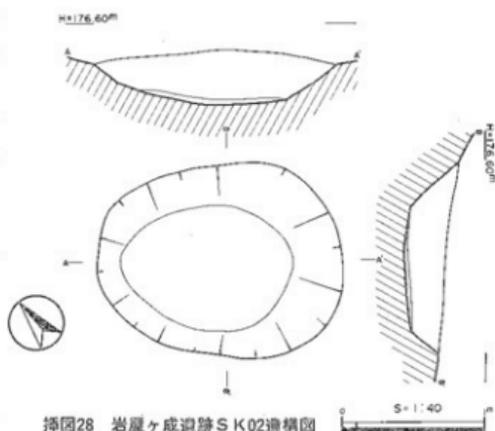
- 位置 調査区南部やや東寄り、SI-02の北東に位置し、標高176m前後である。
- 形態 主軸はN-61°-Wで、平面は楕円形で二段に掘り込まれる。規模は(1.20×1.05-0.26) 2段目(0.47×0.43-0.23) mである。
- 土層 埋土は黒色粘質土一層である。
- 遺物 検出しなかった。
- 性格 不明である。
- 時期 周辺出土遺物より弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属すると考える。



挿図27 岩屋ヶ成遺跡SK01遺構図

SK-02 (挿図28、図版5)

- 位置 調査区南部中央、SI-02の北に位置し、標高176m前後である。
- 形態 主軸はN-47°-Wで、平面は楕円形である。規模は(1.70×1.40-0.38) mである。
- 土層 埋土は黒色粘質土一層である。
- 遺物 検出しなかった。
- 性格 不明である。
- 時期 周辺出土遺物より弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属すると考える。



挿図28 岩屋ヶ成遺跡SK02遺構図

## 2. 遺物(挿図29~32・図版7・8)

岩屋ヶ成遺跡から出土した弥生時代以降の土器には、壺、甕、高坏、器台、鉢、手握土器、蓋がある。これらの土器はすべて遺構外より出土したものであり、また層位的にもその帰属を確認できていない。したがって土器の新旧、或いはセット関係に言及するには必ずしも良好な資料でない事をここで断っておきたい。以下土器を器種別にその形態、施文、調整によって分類を試みた結果について述べることにする。

### 壺 (Po10~23)

口縁形態でA類、B類、C類の3つに大別できる。

A類 口縁端部を上下に拡張するくりあげ口縁で凹線を施すもの (Po11~13) と施さないもの (Po10、11、13~15) のがある (Po10)。なだらかにすぼまる肩部 (Po14、15) は、類例からA類の口縁片に続くと考えられ、Po14は山陽の「上東式土器」に類似している。

B類 長い頸部を持ち、ゆるやかに外反する複合口縁で多条の櫛描平行線を施す。頸部外面 (Po12) はハケメを施し、内面は頸部以下をヘラケズリで調整している。

C類 単純口縁の壺。口頸部の長さとかき具合で細分が可能である。

- a (Po16) 口縁は外傾して開き端部は下方に拡張し面を持つ。内外面ともミガキを施している。
- b (Po17、18) 所謂、短頸の直口壺である。口縁端部上面に平坦面を持つ個体 (Po17) と口縁端部が尖り気味で肩部に環状の把手を持つ個体 (Po18) がある。口縁内外面を前者ヨコナデ、後者はヘラミガキを施し、頸部以下はヘラケズりする。
- c (Po19、20) 胴部は肩が張り口縁が長くゆるやかに外反する長頸壺である。貝殻腹縁、櫛状工具による施文で飾られ口縁部内面ヘラミガキ、頸部以下ヘラケズリを施す (Po19)。扁球状の胴部に数条の櫛描平行線、波状文を施すPo20は胴部形態がPo19に類似しており、内面をヘラミガキ、外面を赤色塗彩する丁寧なつくりである。
- d (Po21) 肩部に爪形の刺突文を施す小形壺で胴部は丸く内湾する。

この他に壺に付属すると考えられる大小の環状把手 (Po22、23) が出土しているが形状は不明である。以上、壺について分類したが、これらは形態が多様であり、時期的には青木Ⅲ期が中心となると考えられるが明確ではない。

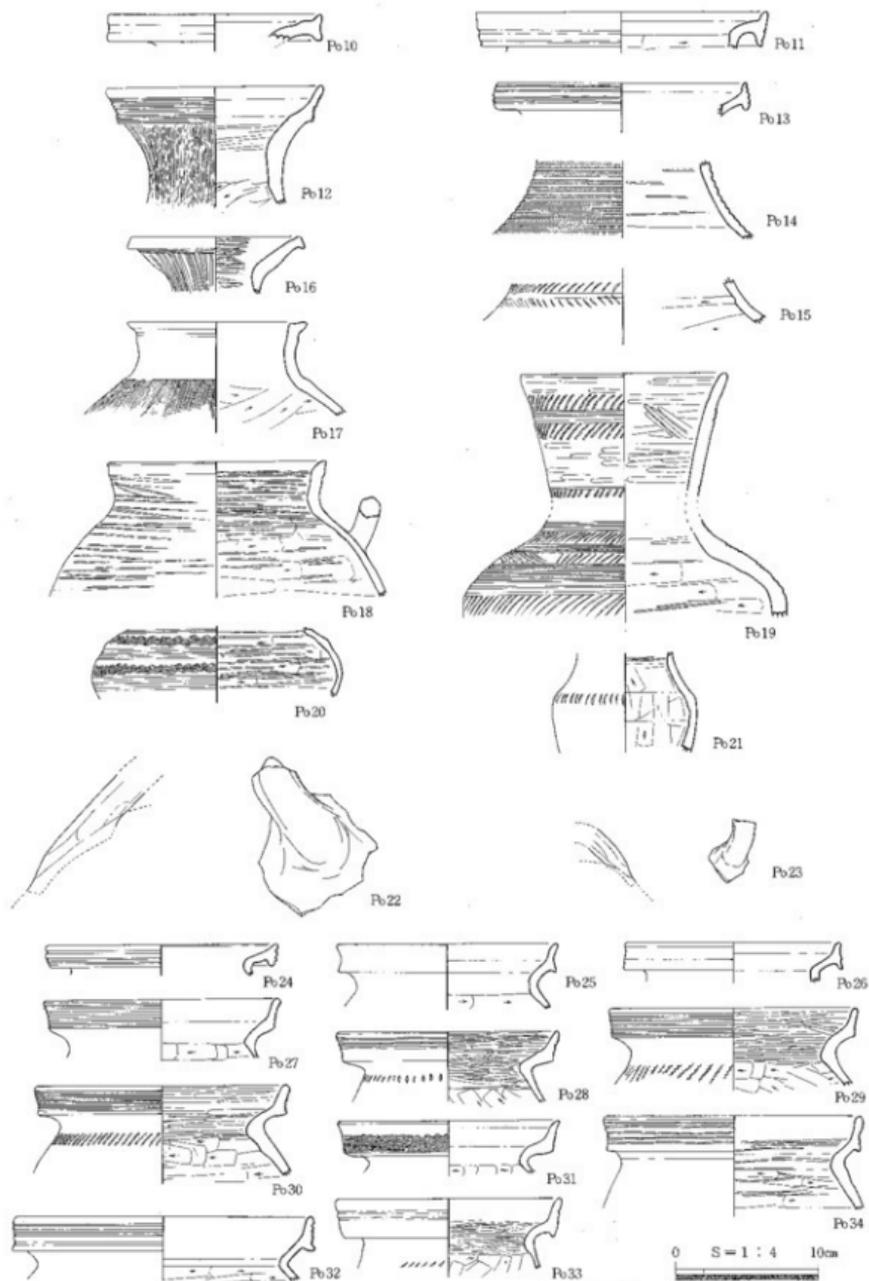
### 甕 (Po24~66)

甕は、単純口縁と複合口縁の2つに大別できる。

単純口縁 「く」の字状に外反する単純口縁で端部を丸くおさめるもの (Po64~66) と端部に面 (Po63~66) を持つもの (Po63) とがあり、内外面ヨコナデ、頸部以下をヘラケズリで調整している。

複合口縁 複合口縁は、口縁形態によって6類に分類した。さらに文様、手法の差異により細分 (Po24~62) を試みている。

A類 口縁端部を上下に拡張するくりあげ口縁状を呈し、口唇部を丸くおさめ、下端部は下 (Po24~26) 垂する。口縁部外面に3条の凹線を施し、内面をヨコナデで調整するもの (Po24) と内外面をヨコナデするもの (Po25、26) とがある。Po25は新相を示す。



挿圖29 岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器実測圖①

B類 ほぼ直立する短かめの複合口縁で口縁下端は下垂せず口唇部は丸くおさめるもの。

- a (Po28~30) 口縁口唇部は肥厚せず外面に櫛描平行線を施し、頭部を貝殻腹縁、櫛状工具による刺突文で飾る。内面をヘラミガキ、頭部以下をヘラケズリで調整する。
- b (Po27, 31) 口縁部外面を櫛描平行線 (Po27)、櫛描波状文 (Po31) で飾り、内面はヨコナデ、頭部以下はヘラケズリを施す。

C類 外反気味で口縁帯のやや短い複合口縁と長めの外反する複合口縁で、口唇部は肥厚して丸く終わるものである。下端部が下垂する。

- a (Po32~35) 口縁部外面に数条の櫛描平行線を施し内面をヨコナデ、頭部以下をヘラケズリで調整する。頭部内面に一部ミガキを施すもの (Po33, 34, 35) や頭部外面にヘラ・櫛状工具により施文するもの (Po33, 35) がある。
- b (Po37~40、口縁部外面に多条の櫛描平行線、波状文を施し内面ヨコナデ、頭部以下をヘラケズリで調整するものである (Po37~40、43)。頭部内面に一部ヘラミガキを施すものや (Po39, 43)、外面に櫛状工具により施文するものもある (Po37, 39)。
- c (Po36, 42) 口縁部内外面をヨコナデによって調整するものである。

D類 外傾して開く先細り気味の複合口縁で下端部は水平に突出して稜をなすもの。

- a (Po41, 44 ~47) 口縁部外面に櫛描平行線を施し、内面ヨコナデ、頭部以下はヘラケズリで調整する。
- b (Po48, 49) 口縁部外面に櫛描平行線と波状文を施すものである。内面はヨコナデ、頭部以下はヘラケズリで調整する。

E類 外反する複合口縁で端部はつまみ出した形で丸くおさめ下端部は水平に突出する。口 (Po50~57) 頭部は文様を施さず内外面をヨコナデで調整し (Po50~57)、外面肩部に櫛描平行線、波状文を、また胸部をハケメ (Po56, 57)、内面頭部以下をヘラケズリで調整する。

F類 口縁形態はバラエティーに富み、ヘラミガキを多用するものを一括した。

- (Po58~62) その中でも口縁外面の櫛描平行線をヘラミガキによって消すもの (Po59, 61) や赤色塗彩するものがある (Po58, 61)。

### 高坏 (Po67~81)

高坏は坏部と脚部が接合する個体はみられず、坏部と脚部を別々に細分した。

坏部A類 内湾する坏部で口縁部は直立気味に立ちあがり、内外面をヘラミガキする (Po71)。

B類 複合口縁状の坏部で口縁は強く外反し内外面をヘラミガキする (Po68~70)。

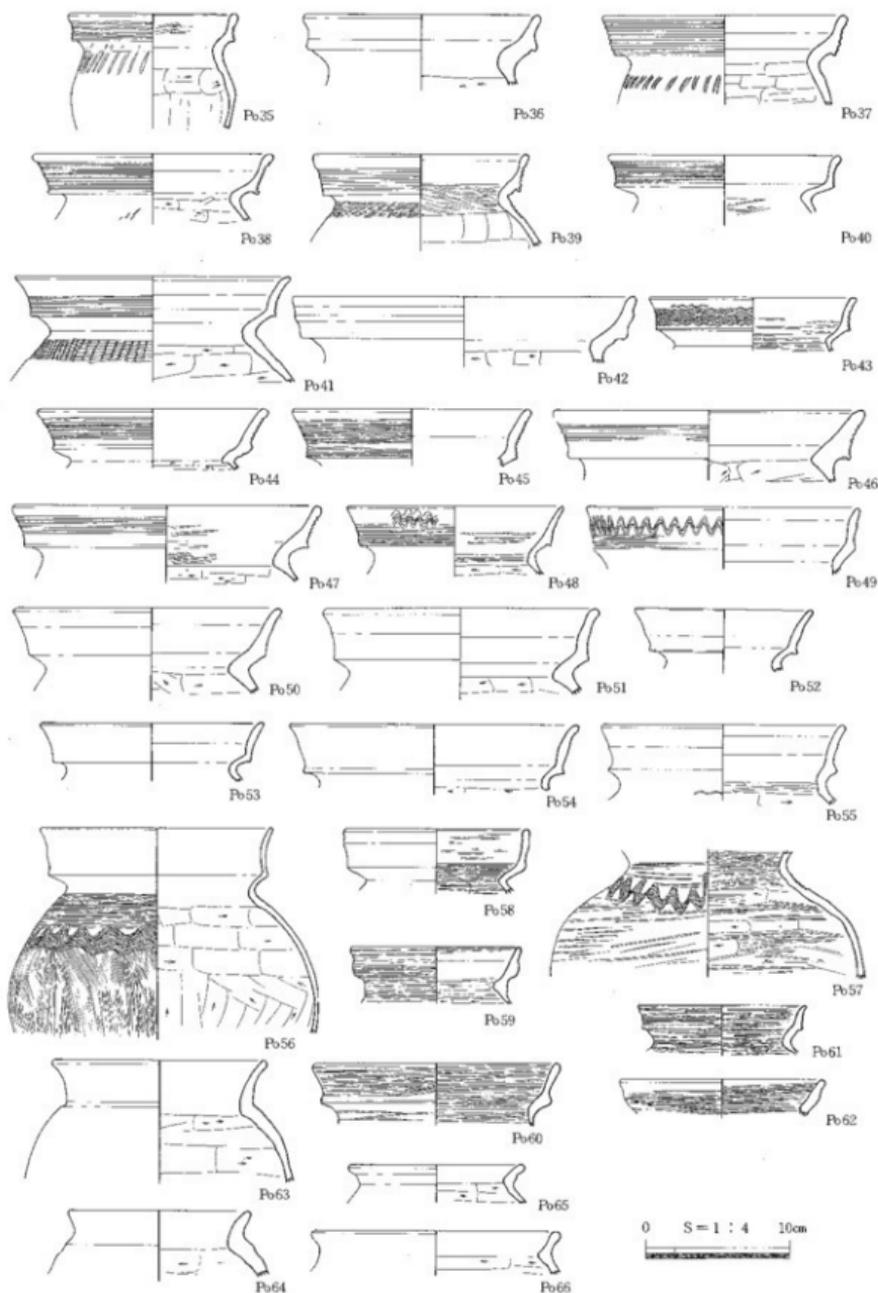
C類 浅い皿状坏部で内外面をヘラミガキする (Po67)。

脚部a類 「ハ」の字状に開く脚部で、脚端部に広い面を持ち2条の凹線を施す (Po72, 73)。

b類 ならかな「ハ」の字状に開く脚部で脚端部に平坦面を持つものと段を持つものがある (Po74~78)。

c類 ならかな「ハ」の字状に開く脚部で脚端部は丸くおさめている (Po79~81)。

これらの高坏は青木III~IV期に併行するものと考えられ a、b、c の中でも b、c の方がより新しい要素を持つものである。



採図30 岩層ヶ成遺跡弥生土器・土師器実測図②

## 器台 (Po80~85)

器台は、所謂「鼓形器台」で受部は大きく外反し外面に櫛揃平行線、波状文を施し内面はヘラミガキにより調整する。脚台部はあまり外反せず「ハ」の字状に開き、外面櫛揃平行線、内面にヘラケズリを施す。

器台の年代幅は青木編年というIII期の枠の中に入れることができる。

## 鉢 (Po86~94)

形態によりA類、B類の2つに大別した。

A類 体部が丸く、口縁部で外方向に屈曲するもの。その中には平底を呈するもの (Po87)

(Po86~89、93) 丸底を呈するもの (Po88) とがある。また調整においては、内外面をみがくものが大勢を示めるが、Po88、93の様に外面ナデ、内面ミガキ、ケズリ調整するものもある。

B類 内湾気味に開く体部で端部が丸くおさめるもの (Po90~92)。Po94は体部が球形を呈し、外面に2条の鈍い凹線を施すもので他の3片とは様相を異にしている。調整はPo91が内面ヘラケズリという事を除けばすべて内外面ヘラミガキを施している。

## 底部 (Po98~117)

底部はその突出具合によって2形式に分類した。分類にあたって甕、甕の底部という視点から扱えられていない事を断っておきたい。

A類 突出しない底部。

a (Po109、110、112~117) 内湾気味に立ちあがる底部で外面をナデ、ハケメ、ヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。

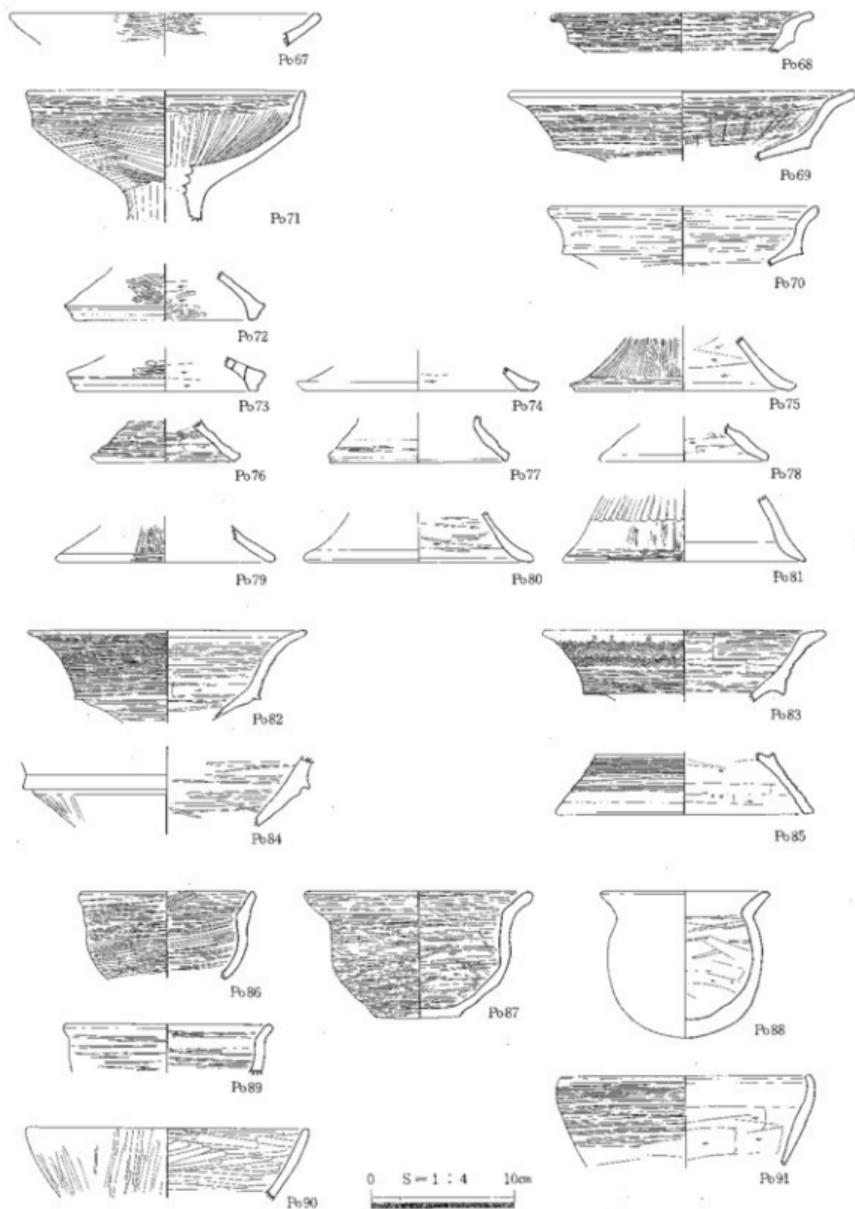
b (Po98~100、105) 直線的に外傾する底部で外面をヘラミガキ、タテハケメ、内面をヘラケズリ、ナデで調整する。

B類 突出する底部

(Po103~108、111) 器壁が厚く比較的突出度が少ないPo103、104と、突出度が大きいPo111がある。それに対して器壁も薄く球形体部への意識が強いと思われるPo106、107、108がある。後者は時期的に新しいものと考えられる。外面をヘラミガキ、ナデで内面をヘラケズリで調整する。

この他に脚台をもち外面をナデ、内面ミガキで調整するPo101と高台状を呈するもので内外面をヘラミガキで調整するPo102がある。後者は鉢の底部の可能性が強い。底部において甕、甕の区別は明確にしているが、比較的器壁が厚く煮沸形態としては不十分と思われるPo109などは甕の底部だと考えてさしつかえないであろう。今後甕の丸底化の機能性を念頭に置いての底部の時期的変遷など多くの課題が残されている。

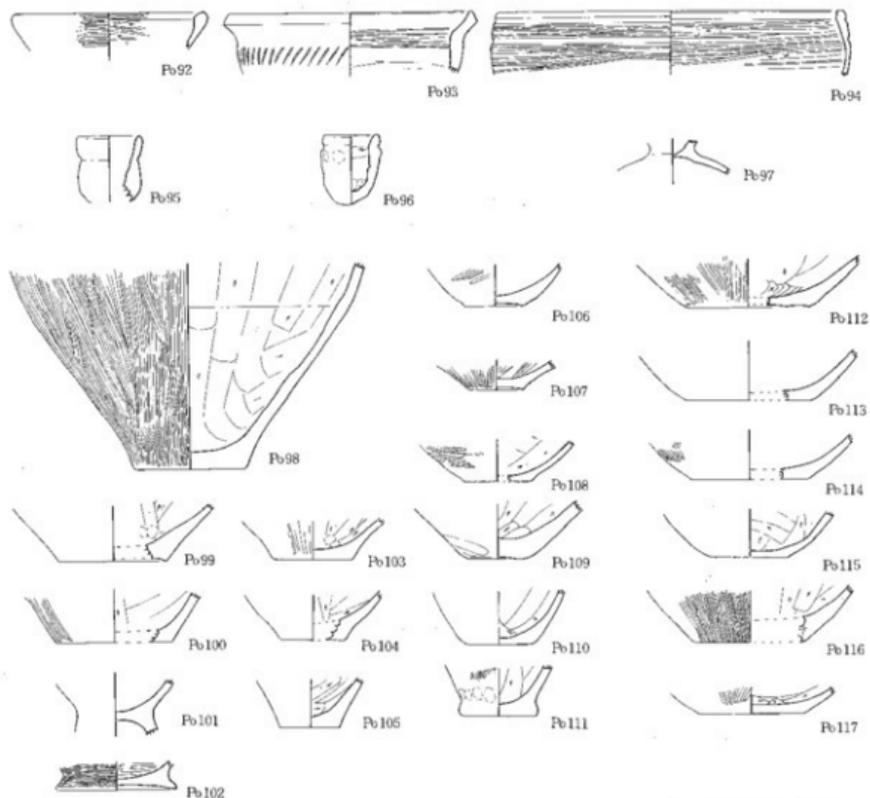
以上土器を器種別に分類し検討してきた。他に手捏土器、蓋があるが詳細は観察表に委ねる事とする。



挿図31 岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器実測図③

今回の調査において出土した土器は弥生時代後期後半～古墳時代初頭の時期にあてはまる。前述の如く、これらは遺構に伴う土器ではないため、セット関係の把握は不可能である。また、完形となる個体が殆ど無いことから分類は口縁形態の差異に頼らざるを得なかった。以下に煮沸形態の日常容器であるがゆえに最も時期的変遷を反映すると考えられている甕の変遷を口縁形態、文様、調整について検討する。

岩屋ヶ成遺跡出土の甕は複合口縁形態をとるものが殆どであり、形状の差異によってA～F類に大別した訳であるが、今日までの編年観によれば凡そA→B・C・D→E類という変遷が認められる。A類から順にみていくとPo24は口縁が直立するくりあげ口縁状を呈し、外面に擬凹線文を施すことから最も古相を示すものである。但しPo25・26は内外面ヨコナデ調整しており、時間的には後出するものである。B・C・D類はA類よりも、口縁端部が上方に拡張され所謂複合口縁となり、外面に凹線文に替って柵描平行沈線文を施すようになる。B類は口縁端部がやや上方



挿図32 岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土器実測図④

に拡張され、直立気味の複合口縁となる。口縁下端は下垂しない。B-a類にみられるように口縁外面の櫛形平行沈線の出現は内面ヘラミガキの多用と対応している。C類になると口縁は長く、より外反するが口唇部は肥厚して丸くおさめ、下端が垂れ下がる。櫛形平行沈線はより多変化し、B-a類にみられた口唇部内面のヘラミガキは頸部に一部を残してヨコナデで消してしまふ(C-a・b類)。一方口縁内外面ヨコナデする個体も若干みられる(C-c類)。D類は複合口縁がより長く外反し、口唇部はつまみあげらる。口縁内面のヘラミガキはヨコナデにより消れ、外面の平行沈線の1部をナデ消す個体がみられる(D-a類)。口縁部外面の波状文は多くはないがB~Dの各類に存在し、各分類中やや新相を示す要素と考えられる。B~D類は重複しながら型的にB→C→D類という流れをもっている。F類は口縁形態がバラエティに富んでいるが、内外面にヘラミガキを多用し、外面の沈線をミガキ消す手法が特徴的であり、それぞれB~D類に属するものと推定される。E類は口縁下端が水平に突出してシャープなラインを描く。口縁部内外面はヨコナデ調整し、ヘラミガキの痕跡はみられない。A~D、F類と比較するとより土師器的な土器である。

以上、岩屋ケ成遺跡の甕の口縁による変遷を辿ったが、A~C類までは複合口縁形態が成立、定形化する段階で、ほぼ青木Ⅲ期に併行する。また、E類は所謂「布留式」の影響を受けていない青木V・Ⅵ期以降。青木遺跡及び他地域の土器編年との比較は第7章第2節に譲る。

(浅川美佐子・中原 齊)

調査番号 調査区	取土番号	器 種	口径 (cm)	形 態	備 考	備 考	
P010 27	S G 4号 No365	甕	復元口径 14.4	口縁部を上下に拡張するくり あけ1縁である。	口縁部外面ヨコナデ。内面ヘラ ミガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色 内面 赤褐色 胎色 赤褐色	1-2mm程度の石葉を多量 含む。 胎色赤褐色。 内面赤褐色。 胎色赤褐色。 胎色赤褐色。
P011 29	S G 5号 No18	甕	復元口径 20.4	口縁部を上下に拡張し、腹部 の膨らみを消す。下端部は大きく 下垂する。	外面ヨコナデ。内面ヨコナデ。 胎部ヘラミガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色 胎色 赤褐色
P012 29 7	I W No681	甕	復元口径 15.0	長い頸部を持つ。ゆるやかに膨 らむ腹の膨らみ1縁。7条の櫛形平 行沈線を持つ。	外面の高つまみヘラミガキ。内面口唇 部ヨコナデ。中央ヘラミガキ。 頸部以下ヘラミガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P013 29	I W No572	甕	復元口径 17.3	口縁部を上下に拡張する。口縁 外面に4条の櫛形沈線を描く。	内面ヨコナデ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P014 29 7	I W No678, 565	甕		胎部から突き出たおぼろげな胎 部片。外面に口縁を消す。	外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ ヘラミガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P015 29	I W No578	甕		胎部から突き出た胎部片。櫛 形文を描く。	内面ヘラミガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P016 29 7	S G 3号 No612	甕	復元口径 12.6	口縁は外反し、頸部は消えられ 下方に拡張する。	口縁部ヨコナデ。内面ヘラミ ガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P017 29 7	I W No681	甕	復元口径 12.4	胎部から突き出た胎部片に立上 り半円を描く。胎部やや外反し上面 に半円を描く。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外 面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P018 29 7	I W No487, 688, 689, 680	胎子行器	復元口径 11.4	胎部が膨らむ。ほぼ水平な縁部 で胎部は胎部片に突き出た。胎 部に胎子を持つ。	外面ヨコナデ接ヘラミガキ。胎 部ヨコナデ。内面胎部ヨコナ デヘラミガキ。胎部ヘラミ ガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P019 29 7	I W No671, 672, 682 No574, 575, 580	真直器	復元口径 14.4	球状の胎部を持つ真直器である。 胎部は丸く内凹する。胎 部からゆるやかな「U」の字状 に内凹する。	外面ヘラミガキ。内面ヘラミガ キ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P020 29	I W No675	甕	復元口径 17.8	胎部が膨らむ。胎部は胎部片に 突き出た胎部片を描く。	内面ヘラミガキ接ヘラミガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P021 29 7	S G 5号 No181, 375, 459	甕		胎部が膨らむ。胎部は胎部片に 突き出た胎部片を描く。	外面ヘラミガキ。内面胎部ヘラミ ガキ。胎部ヘラミガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P022 29 7	I W No541	胎子		胎部が膨らむ。胎部は胎部片に 突き出た胎部片を描く。	胎部ヨコナデ。胎下部ヘラミ ガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P023 29 7	I W No676	胎子		胎部が膨らむ。胎部は胎部片に 突き出た胎部片を描く。	胎部ヨコナデ。胎下部ヘラミ ガキ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P024 29 7	I W No673	甕	復元口径 16.2	口縁部を上下に拡張する。胎 部は胎部片に突き出た胎部片 は胎部片でない。	内面ヨコナデ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色
P025 29 7	No692	甕	復元口径 15.2	胎部が膨らむ。胎部は胎部片に 突き出た胎部片を描く。	外面ヨコナデ。内面胎部ヘラミ ガキ。胎部ヨコナデ。	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色	胎土 赤褐色 胎色 赤褐色

挿表8 岩屋ケ成遺跡弥生土器・土師器観察表①

博物館の 地区番号	取上番号	器 種	法 定 寸 法 (cm)	形 態	手 法	簡 考
Po26 29 7	No576	甕	腹口径 15.0	横置にたちあがる筒筒口縁で、 下腹部を拡張する。	内外面ココナテ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1mm程度の石炭、長石、砂 粒を多量に含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面口縁部 褐色。
Po27 29	No568	甕	腹口径 16.2	ほぼ直立的にたちあがる筒筒口縁 で、5条の縦溝平行線を施す。	内面口縁部ココナテ。腹部ヘラ ケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1mm程度の石炭、長石、砂 粒を多量に含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面口縁部 褐色。
Po28 29	No672	甕	腹口径 15.4	ほぼ直立的な筒筒口縁。口縁上 部に3条の縦溝平行線。腹部に 1枚の摺り出しによる朝英文を施す。 口縁内面の段は無い。	外面ココナテ。口縁部・腹部内 面ヘラミガキ。頸部ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 0.5-1mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po29 29 7	No680、 689、692	甕	腹口径 17.0	ほぼ直立的な筒筒口縁。口縁上 部に3条の縦溝平行線。腹部に 1枚の摺り出しによる朝英文を施す。 口縁内面の段は無い。	外面ココナテ。口縁部内面ヘラ ミガキ。頸部ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 0.5-1mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po30 29 7	No684、 150	甕	腹口径 17.4	ほぼ直立的な筒筒口縁。口縁上 部に3条の縦溝平行線。腹部に 1枚の摺り出しによる朝英文を施す。 口縁内面の段は無い。	外面ココナテ。口縁部・腹部内 面ヘラミガキ。頸部ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-2mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po31 29 7	No680、 682、590	甕	腹口径 15.4	ほぼ直立的な筒筒口縁。口縁上 部に3条の縦溝平行線。腹部に 1枚の摺り出しによる朝英文を施す。 口縁内面の段は無い。	内外面ココナテ。頸部ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-2mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po32 29 7	No405、 407、651	甕	腹口径 20.5	横置する筒筒口縁で底部は丸く 下腹部はやや外側に下がるす べりに4条の縦溝平行線を施す。	外面頸部ココナテ。内面口縁部コ コナテ。頸部ヘラミガキ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-2mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po33 29	No686	甕	腹口径 15.6	ほぼ直立的な筒筒口縁で横置平 行線を施す。底部は丸く、下腹 部を下げる。	外面頸部ココナテ。内面口縁部 ココナテ。頸部ヘラミガキ。頸 部以下ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-2mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po34 29	No305	甕	腹口径 17.7	横置する筒筒口縁で、底部は丸 く下腹部は下がるすべりに4条 の縦溝平行線を施す。	外面ココナテ。内面口縁部ココ ナテ。頸部ヘラケズリ。腹 部以下ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 0.5-1mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po35 30 7	No692、 709	甕	腹口径 11.6	ほぼ直立的な筒筒口縁。上部は 肥厚して丸く下腹部はやや下 がるすべりに4条の縦溝平行線 を施す。口縁は丸い。腹面に 1枚の摺り出しによる朝英文、 口縁外面にヘラミガキを施す。	外面頸部ココナテ。内面口縁部 ココナテ。頸部ヘラミガキ。 腹部以下ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 0.5-1mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po36 30	No583	甕	腹口径 16.4	やや外傾する筒筒口縁。底部は 丸い。腹部は厚い。	内外面ヘラケズリ。内面頸部 ココナテ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 0.5-2mm程度の砂粒を多 量含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po37 30	No168	甕	腹口径 17.0	やや外傾する筒筒口縁。口縁上 部に3条の縦溝平行線。腹部に 1枚の摺り出しによる朝英文を施す。 口縁内面の段は無い。	外面ココナテ。内面口縁部ココ ナテ。頸部・腹部にラクスリ後 ヘラミガキ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-2mm程度の石炭、長石 粒を多量に含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po38 30 7	No364	甕	腹口径 16.5	外傾してたちあがる筒筒口縁。 下腹部は下がるすべりに4条 の縦溝平行線を施す。口縁部 には9条の縦溝平行線。腹部に 1枚の摺り出しによる朝英文を施す。	外面頸部ココナテ。内面口縁部コ コナテ。頸部ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 0.5-1mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po39 30 7	No687	甕	腹口径 15.6	ほぼ直立的な筒筒口縁で5条の 縦溝平行線を施す。口縁部は肥 厚して丸く下腹部は下がるすべ りに4条の縦溝平行線を施す。 腹部に摺り出しによる朝英文を 施す。	外面ココナテ。内面口縁部ココ ナテ。頸部ヘラミガキ。頸部 以下ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-2mm程度の石炭、長石 粒を多量に含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po40 30 7	No710	甕	腹口径 16.4	外傾する筒筒口縁で、底部は丸 く下腹部は下がるすべりに4条 の縦溝平行線を施す。	内面頸部ヘラケズリ後ヘラミガ キ。他ココナテ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-2mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po41 30 7	No687	甕	腹口径 19.1	外傾する筒筒口縁で底部は丸い。 外側に縦溝平行線。腹部に1枚 の摺り出しによる朝英文を施す。	口縁部内外面ココナテ。一部、 縦溝平行線をこれより滑す。 頸部外傾ナテ。内面ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-2mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po42 30	No607、 586	甕	腹口径 25.4	やや外傾する筒筒口縁。底部は 丸く下腹部は丸く下がるすべ りに4条の縦溝平行線を施す。	外面ココナテ。内面口縁部ココ ナテ。頸部ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 0.5mm程度の石炭を含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po43 30	No299	甕	腹口径 14.2	外傾してたちあがる筒筒口縁。 縦溝平行線を施す。底部は丸く 下腹部は下がるすべりに4条 の縦溝平行線を施す。	外面頸部ココナテ。内面口縁部ヘ ラミガキ。頸部ヘラケズリ後 ヘラミガキ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-3mm程度の石炭、長石 粒を多量に含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po44 30	No416	甕	腹口径 15.8	外傾してたちあがる筒筒口縁で 底部は丸く下腹部は下がるすべ りに4条の縦溝平行線を施す。 口縁部は肥厚して丸く下腹部は 下がるすべりに4条の縦溝平行 線を施す。頸部は水平に突出する。	外面頸部ココナテ。内面口縁部 ココナテ。頸部ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-2mm程度の石炭を多量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po45 30	No236	甕	腹口径 16.7	外傾してたちあがる筒筒口縁。 底部は丸く下腹部は下がるすべ りに4条の縦溝平行線を施す。 口縁部は肥厚して丸く下腹部は 下がるすべりに4条の縦溝平行 線を施す。	外面ココナテ。内面ヘラミガキ 後ココナテ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 1-2mm程度の石炭を少量 含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po46 30	No676	甕	腹口径 21.6	外傾してたちあがる筒筒口縁で 底部は丸く下腹部は下がるすべ りに4条の縦溝平行線を施す。 口縁部は肥厚して丸く下腹部は 下がるすべりに4条の縦溝平行 線を施す。	外面ココナテ。内面口縁部ココ ナテ。頸部ヘラケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 赤い砂粒を含む。1mm大 の石炭、長石を多量含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po47 30	No596	甕	腹口径 21.8	やや外傾する筒筒口縁。底部は 丸く下腹部は下がるすべりに4 条の縦溝平行線を施す。	外面ココナテ。内面口縁部ココ ナテ。頸部ヘラミガキ。ヘラ ケズリ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 0.5-1.5mm程度の石炭を少 量含む。 成色 良好 内外面黄褐色。外面一 部褐色。
Po48 30 7	No574	甕	腹口径 15.0	外傾する筒筒口縁。内面は丸 い。下腹部はやや下がるすべ りに4条の縦溝平行線を施す。一 部に朝英文。	外面頸部ココナテ。内面口縁部 ココナテ。一部ヘラミガキ。腹 部ヘラケズリ後ヘラミガキ。	胎土 赤土 成色 良好 内外面明褐色。 胎土 石炭、長石、砂粒を含む。 成色 良好 内外面黄褐色。

挿表9 若屋ヶ成遺跡弥生土器・土器器観表②



産物番号 採出地番号 図説番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po72 31 8	No711	高杯	復脚作 12.6	「ハ」の字状に開く脚部。脚端部に面をもち、2条の凹線を施す。	内面ヨコナデ。外面ケズリ後ミガキ。	粘土 焼成 色調 2mm程の石英を含む。 内外面淡黄褐色。
Po73 31 8	No662	高杯	復口作 12.6	「ハ」の字状に開く脚部で、円孔を穿つ。端部は面をもち、2条の凹線を施す。	外面脚部ヘタミガキ。脚端部ナデ。内面ヘラケズリ。	粘土 焼成 色調 1mm程の石英を含む。 良好。 内外面淡黄褐色。
Po74 31	No673	高杯	復口作 16.0	「ハ」の字状に大きく開く脚部。脚端部が平拓。	脚部外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	粘土 焼成 色調 1mm程の石英、細砂粒を含む。 良好。 内外面淡黄褐色。
Po75 31 8	No575	高杯	復脚作 15.2	外反気味な「ハ」の字状に開く脚部。脚端部に凹入した面をもつ。	脚部外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。脚端部ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 1～3mm程の石英を含む。 良好。 内外面淡黄褐色。
Po76 31 8	No108	高杯	復脚作 10.2	「ハ」の字状に開く脚部。端部にやや凹んだ面をもつ。	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 0.5～2mm程の石英を多量含む。 良好。 内外面赤褐色。
Po77 31 8	No383	高杯	復脚作 12.4	「ハ」の字状に開く脚部。端部は凹入した面をもつ。	外面ヘラミガキ。内面ナデ。	粘土 焼成 色調 1～2mm程の石英を多量含む。 良好。 内外面赤褐色。
Po78 31 8	No608	高杯	復脚作 11.8	直線的な「ハ」の字状に開く脚部。端部に平坦な面をもつ。蓋の可能性有り。	外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	粘土 焼成 色調 1～2mm程の石英を含む。 良好。 内外面赤褐色。
Po79 31 8	No635	高杯	復脚作 14.4	直線的な「ハ」の字状に開く脚部。端部は丸くおさめる。	外面ヘラミガキ。内面ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 1～2mm程の石英を含む。 良好。 内面淡赤褐色外面黒褐色。
Po80 21 8	No610	高杯	復脚作 15.5	外反して「ハ」の字状に開く脚部。端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。内面脚部ナデ。脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 0.5～2mm程の石英を多量含む。 良好。 内外面淡褐色。
Po81 31 8	No612	高杯	復脚作 16.8	直線的な「ハ」の字状に開く脚部。端部はすばり気味で丸くおさめる。	外面ヘラミガキ。タテハケ後ナデ。端部ヘタミガキ。内面ヘラケズリ後ヨコナデ。脚部ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 僅少粒を含む。 良好。 外面黒褐色。内面黄褐色。
Po82 31 8	No529, 519,645, 676,682	器台	復口作 19.4	外反して複合口縁状の受部。外面に多量の櫛歯平行線を施す。	外面ヘラミガキ。内面口縁部ヘラミガキ。端部ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 0.5～2mm程の石英、長石を多量含む。 良好。 内外面赤褐色。
Po83 31 8	No375, 475	器台	復口作 19.1	外反して端部で水平な面をもつ受部。外面に櫛歯平行線と波状文を施す。	外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 1～3mm程の石英を多量含む。 良好。 内外面赤褐色。
Po84 31	No367	器台	復口作 19.1	文どみに外傾する受部。受部端部はやや角気りながら下垂する。	外面口縁部ヨコナデ。他ヘラミガキ後ナデ。内面ヨコナデ後ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 1～2mm程の石英を多量含む。 良好。 内外面淡褐色。
Po85 31 8	No16	器台	復口作 17.6	「ハ」の字状に開く筒合部。上端は上方に突出し、下端は面をもち、外面に櫛歯平行線を施す。	内面ヘラケズリ。外面ナデ。	粘土 焼成 色調 1～3mm程の石英を多量含む。 良好。 内外面褐色～明褐色。
Po86 31 8	No551, 689	鉢	復口作 12.0	丸味をもつ体部。口縁部に面をもち、端部は丸くおさめる。	外面ヘラミガキ。内面口縁部ナデ後ヘラミガキ。他ケズリ後ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 0.5～2mm程の石英を含む。 良好。 内外面淡灰茶褐色。
Po87 31 8	No615	鉢	口径15.5 器高 9.1	やや不安定な平面。脚部は丸く口縁部で外上方に屈曲する。端部は丸くおさめる。	外面ヘラミガキ。内面口縁部ナデ後ヘラミガキ。他ヘラケズリ後ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 1～4mm程の石英を多量含む。 良好。 内外面赤褐色。
Po88 31 8	No663	鉢	復口作 13.1	丸底で球形の体部。1線は「く」の字状に開く。端部は丸くおさめる。	外面エボシサエ後ナデ。内面口縁部ヨコナデ。脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ。底部ヘラケズリ後ナデ。	粘土 焼成 色調 砂粒を含む。 不良。 内外面淡褐色。 黒斑あり。
Po89 31	No42	鉢	復口作 14.4	丸味をもつ体部。口縁部は面をもち、端部は丸くおさめる。	外面ナデ後ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 0.3mm程の石英を少量含む。 内外面淡黄褐色。
Po90 31 8	No653	鉢	復口作 19.7	やや内傾気味に開く体部。端部は丸くおさめる。	内外面ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 細砂粒を含む。 良好。 内面淡黄褐色外面淡黄褐色。
Po91 31 8	No308	鉢	復口作 17.2	体部から1線にかけてなだらかに内筒する。端部は丸くおさめる。	外面口縁ヘラミガキ。体部ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面口縁ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	粘土 焼成 色調 0.5～1mm程の石英を含む。 良好。 内面淡褐色。外面黒褐色。
Po92 32	No649	鉢	復口作 13.8	内筒する1線で、端部は肥厚し丸くおさめる。	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 1～2mm程の石英を含む。 内外面淡褐色。
Po93 32 8	No709	鉢	復口作 17.0	碗状の体部に「く」の字状1線がつく。口縁端部はつまみあげ状。体部に倒突文を施す。	外面ナデ。内面1線加部ヨコナデ。体部上位ナデ後ヘラミガキケズリ後ナデ。	粘土 焼成 色調 0.5～2mm程の石英を含む。 良好。 内外面黄褐色。
Po94 32	No688	鉢	復口作 24.0	口縁の内筒する大型鉢。端部は肥厚する。外面に2条の強い凹線を施す。	口縁部外面ヘラミガキ。端部ナデ。内面ヘラケズリ後ヘラミガキ。	粘土 焼成 色調 1mm程の石英を含む。 良好。 内外面淡褐色。黒斑あり。

補表11 岩屋ヶ成遺跡弥生土器・土師器観察表(4)

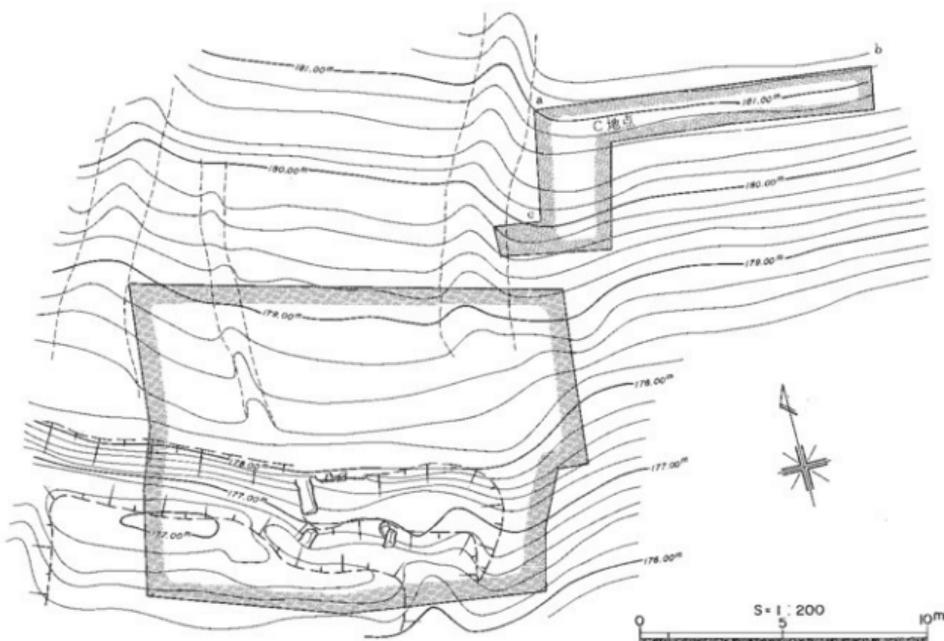
産物番号 採回番号 (図取番号)	取上番号	岩層	法量 (cm)	形	部	手	法	備	考
Po95 32 8	No575	千層土部	開口径 4.3	卵部が僅かに屈曲する口縁で、 縁部は丸い。底部欠損。	内外面ナデ。	胎土	0.5mm程の石英を多量、黒 雲母を少量含む。 良好。 内面赤褐色、外面暗褐色		
Po96 32 8	No715	千層土部	開口径 3.5	丸形で胴長の体部。唇部は厚く 頸部に凹線が入る。口縁部は 丸い。口縁部に貼り付けの痕跡 が認められ裂口の可能性がある。	外面ナデ。内面上位ヘラケズリ 底部エビオサス。	胎土	0.1~2mm程の石英を少 量含む。 やや小良 内外面暗褐色。		
Po97 32	No372	蓋		天井部は丸く、深く凹むつまみ をもつ。	内外面ナデ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内外面淡褐色。		
Po98 32 8	No638	底部	底径 7.3	平底から急縁的にたちあがり丸 い胴部へ続く。	外面胴部タテハケ。内面ヘラケ ズリ。部ヘラケズリ後ナデ。	胎土	1~3mm程の石英を含 む。 良好。 内面暗褐色、外面赤褐色		
Po99 32	No604	底部	底径 7.8	直線的に外傾する底部。	外面ヘラミガキ後ナデ。内面底 部ヘラケズリ。底面ヘラケズリ 後エビオサス。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面淡黄褐色、外面暗赤 褐色。		
Po100 32	No678	底部	底径 8.2	平底。直線的に外傾する底部。	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズ リ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面淡黄褐色、外面暗黄 褐色。		
Po101 32 8	No587	底部		内湾気味の体部。胴部をもつ。	内面ミガキ。底面ケズリ後ナデ 後ナデ。	胎土	1~3mm程の石英を多量 含む。 良好。 内外面淡褐色。		
Po102 32 8	No411	底部	底径 8.4	上縁で、端部は「ハ」の字状に 突出し、高台状を呈す。	内外面ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面淡褐色、外面赤褐色		
Po103 32 8	No689	底部	底径 5.5	平底。外反気味の体部やつづく。 やや突出する底部。	外面底部ヘラミガキ後ナデ。底 面ヘラミガキ。内面底部ヘラケ ズリ。底面ヘラケズリ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面黒灰褐色、外面淡赤 褐色。		
Po104 32 8	No403、 407	底部	底径 4.5	平底。内湾気味の体形がつづく やや突出する底部。	外面ヘラミガキ後ナデ。内面 ヘラケズリ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面暗灰褐色、外面暗黄 褐色。		
Po105 32	No677	底部	底径 4.2	平底。直線状の体部がつづく。	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズ リ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面黒灰褐色外面暗褐色		
Po106 32	No523	底部	底径 4.2	やや突出する底部で内湾する体 部がつづく。	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズ リ後ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内外面赤褐色。		
Po107 32 8	No678	底部	底径 3.3	やや突出する底部で外反する体 部がつづく。	外面ヘラミガキ。内面ヘラミガ キ一部ナデ。底面ナデ。	胎土 焼成 色調	石英を含む。 良好。 内面淡赤褐色。		
Po108 32	No607	底部	底径 4.6	平底。内湾気味の体部がつつき やや突出する底部。	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズ リ。	胎土 焼成 色調	砂粒を少量含む。 良好。 内面淡褐色、外面暗褐色		
Po109 32 8	No685、 686	底部	底径 4.1	不明瞭な平底で、内湾気味の体 部がつづく。	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズ リ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面暗灰褐色外面赤褐色		
Po110 32	No686	底部	底径 4.2	やや甘い平底。直立気味に内湾 する体部。	内面ナデ。内面ヘラケズリ。	胎土 焼成 色調	砂粒を少量含む。 良好。 内面淡褐色外面淡黄褐色		
Po111 32 8	No589	底部	底径 5.3	厚手の平底で直立気味にたちあ がる。突出する底部。	外面底部ハケメ後ナデ。底部下 縁エビオサス後ナデ。内面ヘラ ケズリ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面淡褐色、外面暗灰色		
Po112 32 8	No48	底部	底径 8.6	やや上底気味の底部。内湾気味 の体部がつづく。	外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内外面淡灰褐色。		
Po113 32	No672	底部	底径 8.9	平底。内湾気味の体部がつづく。	内外面ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内外面淡褐色。		
Po114 32 8	No518	底部	底径 8.4	平底。内湾気味の体部がつづく。	外面ヘラミガキ一部ハケメ。内 面ヘラミガキ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面暗黄褐色。外面淡赤 褐色。		
Po115 32	No594	底部	底径 5.6	平底。内湾する体部がつづく。	外面ナデ。内面ヘラケズリ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面淡褐色、外面暗褐色		
Po116 32	No712	底部		平底。内湾気味の体部がつづく。	外面タテハケメ。内面ヘラケズ リ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内面淡褐色外面淡赤褐色		
Po117 32	No499	底部	底径 7.2	平底。大きく内湾する体部がつ づく。	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズ リ後ナデ。	胎土 焼成 色調	細砂粒を含む。 良好。 内外面赤褐色。		

挿表12 岩層ケ成遺跡弥生土器・土師器観察表⑤

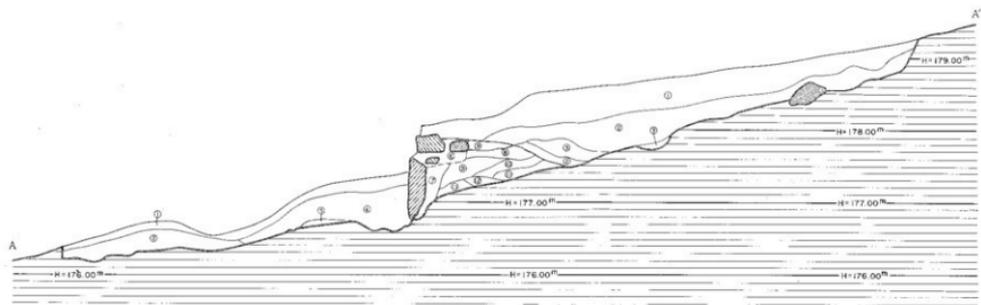
## 第6章 佐川古墳群

### 第1節 佐川3号墳 (挿図33~42、図版9~13)

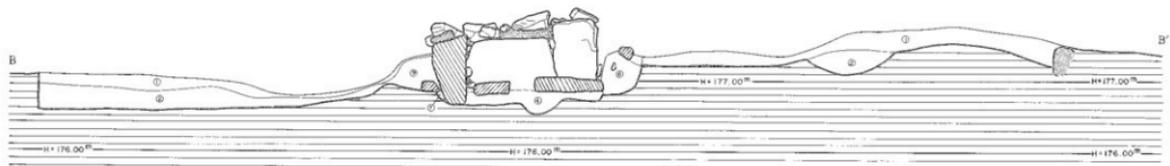
- 位置** 佐川3号墳は東光寺裏山東斜面にあたる林道佐川ハセン線の脇に位置しており、標高178m前後の緩斜面に立地する所謂「山寄せの古墳」である。墳丘はかつて畑地化された際南半部が削平され、高さ1.5mの段差がついており、残存する北半部も土砂の流入及び上部の削平により地表観察では墳丘を認めることができなかった(挿図33)。段差の部分には横穴式石室が腰石のみ残存して露出しており、畑地化に際しても鉄刀が出土したと伝えられている。調査は畑地化による段を東西の土層断面ベルトとし、それに直交して石室主軸線を通るベルトを南北に設定して掘り下げた。その結果、北半部には幅1.9~2.5m、深さ0.4mの弧状に巡る周溝が遺存しており、盛土による墳丘築成も確認された(挿図34、図版10)。周溝が斜面谷側まで巡っていたかどうか不明であるが、残存部によって墳丘を復原すると直径約9m、周溝を含めると径13mの円墳であったと推定される。墳丘築成は地山を掘り込んで石室の掘り方と周溝が掘削され、石室構築に伴って裏込めと墳丘盛土が行なわれたと考えられる。残存する盛土は厚さ1.0mを測り、横穴式石室の規模から考えて、かつては2m以上の厚さがあったと推定



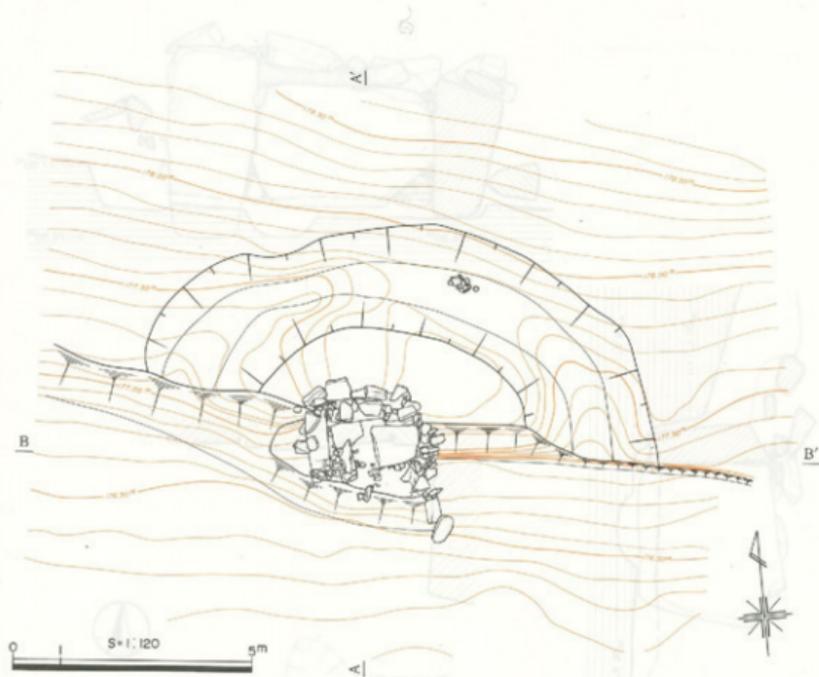
挿図33 3号墳調査前地形測量図



- ① 暗褐色土(黄土)
- ② 黒褐色土(ややしまりが無い、流入土)
- ③ 暗褐色粘質土(ややしまる、層状埋土)
- ④ 黒褐色砂質土(ボソボソしまりが無い、硬粘土)
- ⑤ 暗茶褐色粘質土(ややしまりが無い、床面残存土?)
- ⑥ 黒褐色土(しまりが無い、高台の土)
- ⑦ 暗茶褐色土(しまりがなくボソボソ、黄褐色土を含む、掘り方埋土)
- ⑧ 明褐色土(ややしまっている)
- ⑨ 暗褐色土
- ⑩ 粘質土
- ⑪ 淡褐色土(よくしまっている)
- ⑫ 明褐色土( \* )



挿図34 3号墳埴丘土層断面図

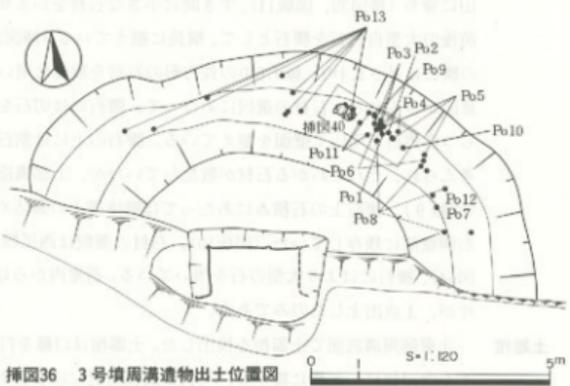


挿図35 3号墳墳丘実測図

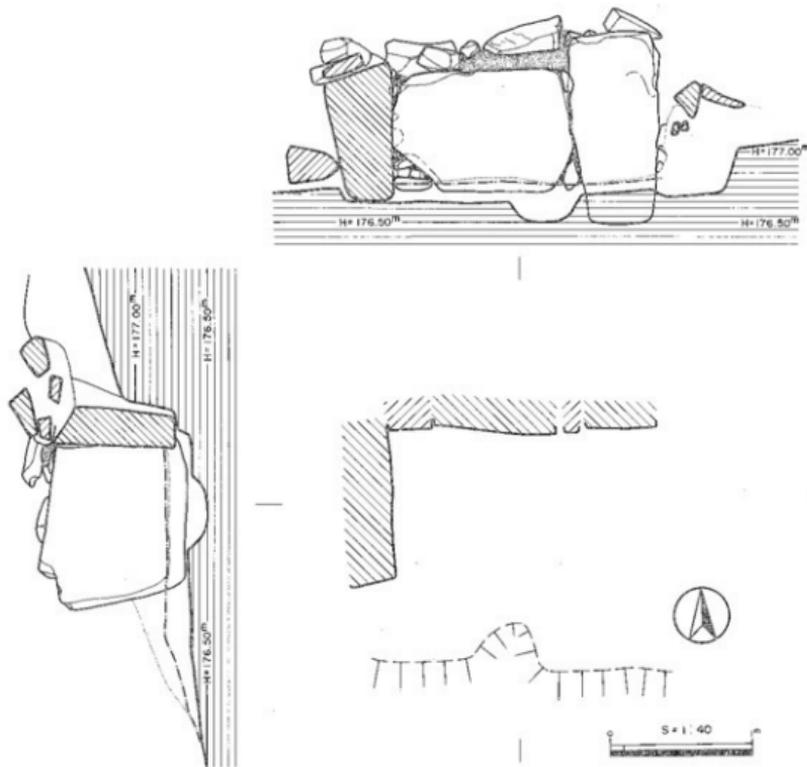
される。

**石室** 中心主体である横穴式石室は攪乱により徹底的に破壊されており、奥壁腰石2枚と左側壁腰石1枚が原位置を保つのみで、玄室前半及び上部構造（天井部）は全く失われている。玄室床面も木が植えられるなど旧状を全く留めず、掘り方底面に至るまで床面を確認することはできな

かった。石室の規模は右側壁の腰石が玄室内に倒れ込んでしまっている（挿図38）為、正確な数値とはいえないが奥壁幅1.9m前後と推定される。



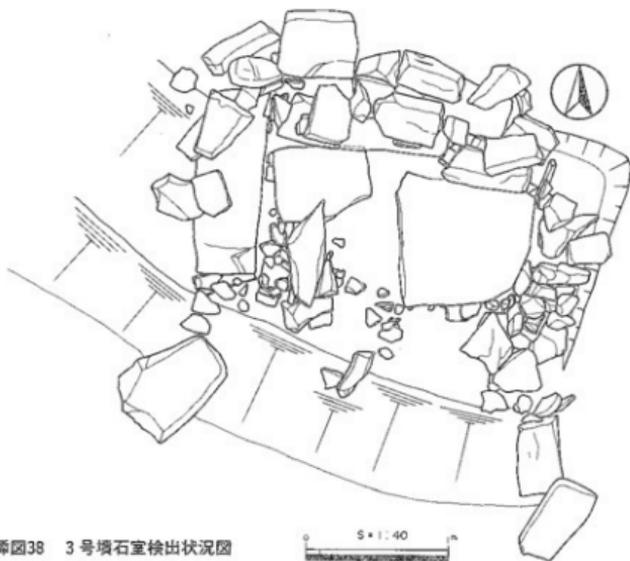
挿図36 3号墳周溝遺物出土位置図



挿図37 3号墳石室実測図

とほぼ同規模である。石室の構築は幅2.9m、残存長1.9mの「コ」の字形掘り方を地山に穿ち（挿図39、図版11）、すき間に小さな石材をかませながら長さ1.2m、幅0.9m前後の大型自然石を腰石として、横長に据えている（挿図37、図版11）。但し奥壁右側の腰石は長さ1.4m、幅0.6mの長方形の石材を縦長に用いており、玄室幅を限定する意図がみられる。石材の選択にあたって、腰石には切石を思わせるような平滑な面をもつ自然石を用いて壁面を整えている。腰石の上には割石、自然石を小口積みしたと考えられ、それとわかる石材が散乱していたが、上部構造については全く不明である（図版9）。腰石上の石積みにあたっては壁体控えの裏込めを行っており、奥壁及び右側壁部に残存していた（図版10）。石材の選択は西尾根6号墳に類似しているが（挿図64）、腰石にはより大型の石を用いている。石室内からは流入土に混じって須恵器壺片が、1点出土したのみである。

**土器棺** 北東側周溝底面で土器棺を検出した。土器棺は口縁を打ち欠いた土師器甕Po14と15とを合口状にして横に寝かせ、Po14の底部付近には小石をかますことで安定させてい



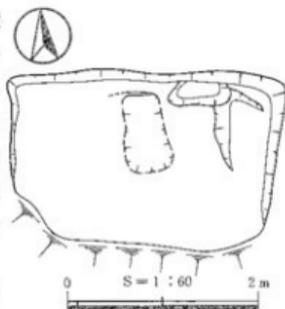
挿図38 3号墳石室検出状況図

る。さらにPo15が完形でなかったことによるものか、Po14の口縁からPo15にかけて須恵器甕Po13の破片を2重に覆いかぶせていた(挿図40・42、図版12)。Po15は土圧でつぶれて、Po14内には褐色土が半分くらい流入しており、内部には何も遺存していなかった。Po13の破片は周溝北側～西側にかけて点々と検出され(挿図36)、接合すると、底部を穿孔した甕胴下半が復原でき、この甕(下半)が墳丘周辺で壊されたことが推定される。土器棺の東側には須恵器蓋環が破片も含めて坏蓋5、坏身7の計12個体分検出された。出土状況は蓋も身も内面を上にして乱雑に置かれており、意図的に並べたり、打ち割ったりした様子はみられなかった(挿図40、図版11)。この蓋坏群は土器棺の埋葬に伴うものと思われるが、出土状況からは食物を供献したとは考えにくく、

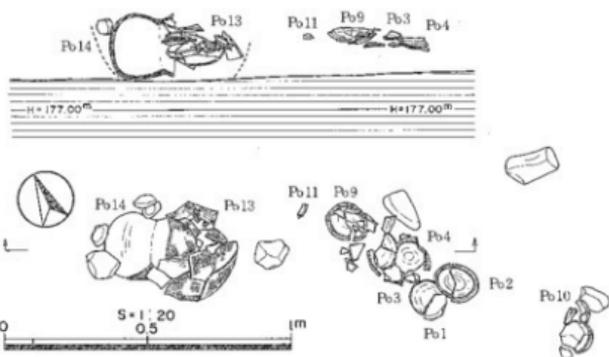
須恵器  
出土状況

埋葬に際して何らかの儀礼に用いた後、ここに放置したものではなかろうか。注目されるのはこれらの土器類が周溝底面より約10cm浮いていることであり、土器棺も掘り方の中に納められたと考えるならば、この土器棺及び蓋坏類は古墳築造以後に周溝内に埋土が堆積した段階で置かれたことになり、2次的な埋葬といえる。したがって古墳築造時期はこの須恵器の示す年代より若干遅ることが推定される。

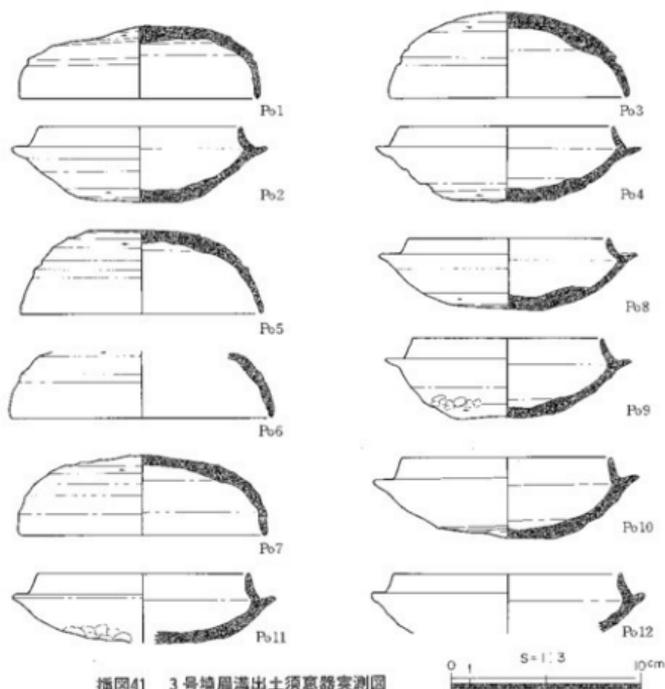
遺物 出土遺物は、北東周溝内より土器棺に用いた土師器甕2、須恵器甕1(挿図42、図版13)と、それに伴



挿図39 3号墳石室掘り方案測図



挿図40 3号墳周溝遺物出土状況図



挿図41 3号墳周溝出土須恵器突測図

うと考えられる須恵器蓋坏12個体(挿図41、図版13)が出土している。遺物各個の記述は観察表に譲って、時期判定の目安となる須恵器蓋坏について検討する。

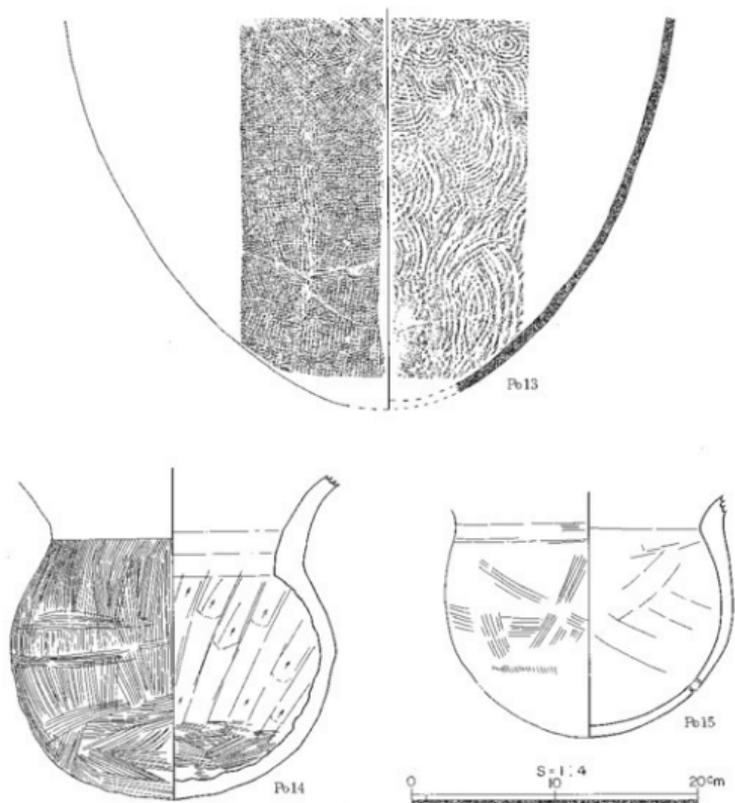
坏 蓋 Pb6を除き口径12.4~12.8cmで小型化している。口縁端部内面の段は消失してお

り、外面には一条の凹線で鈍い稜をなし、口縁部と天井部を区別している。器形は口縁部が直立気味のPo1と、外へ開くPo3・5・6、直立気味で端部がやや外反するPo7がある。外面調整は口径の $\frac{2}{3}$ ～ $\frac{3}{4}$ にヘラケズリを施す。

坏身 口径10.0～11.8cmでやはり小型化している。たちあがりはやや短く、端部は丸くおさめている。受部は扁平で、やや長く突出している。外面調整は口径の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{3}{4}$ をヘラケズリしているが、底面周辺部のみを1～2周ヘラケズリし、中央部にヘラ切り未調整の部分が残る個体がみられる。 (中原 齊)

これらの蓋環の特徴は山陰須恵器編年のⅢ期に相当するものと考えられる。

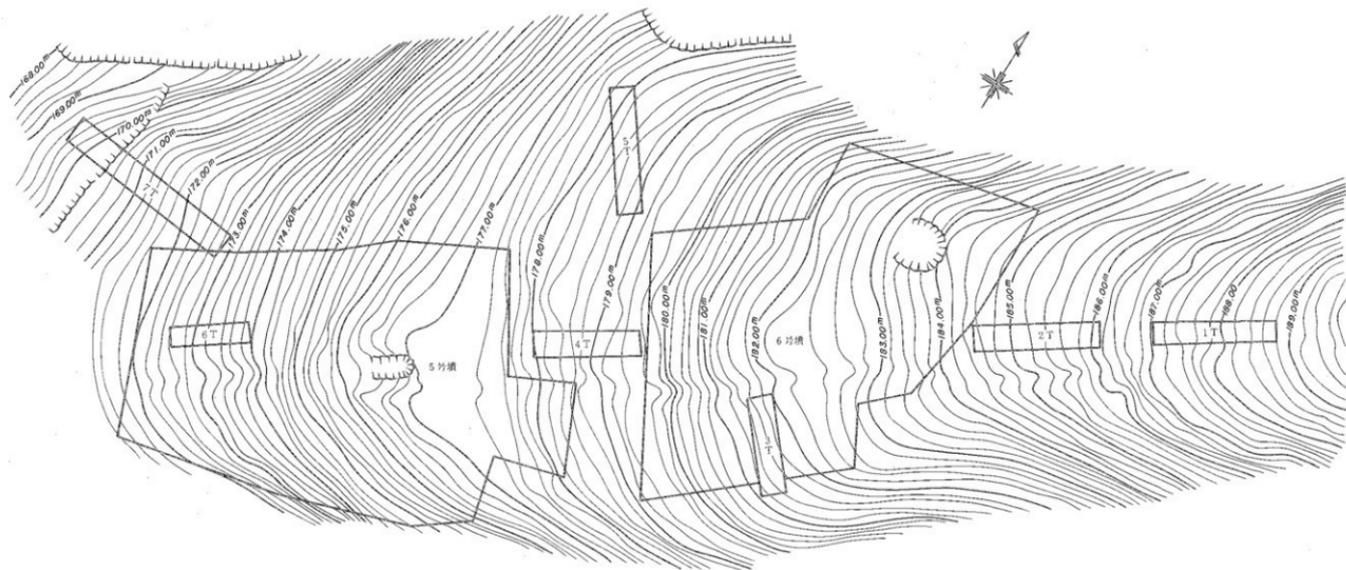
註 山本 清「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論集』1960年 以下同じ



挿図42 3号墳土器館遺物実測図

遺物番号 甲図番号	取上番号	部 類	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po 1 44 13	S G 3号 No42	坏蓋	口径12.4 高さ 3.8	口縁部は直立気味で、肩部は丸い。1本の凹線により鈍い稜をつくる。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 0.5~2mm大の石英を含む。 良好。 焼成色調 内外面青灰色。
Po 2 44 13	S G 3号 No41	坏身	口径11.3 高さ 4.0	たちあがりはやや短く、内傾する肩部は丸い。肩部は水平に伸びる。体部外面のヘラケズリ境界部、強いナデによる凹線がめぐる。底部は平坦。	底部外面へラケズリ後ナデ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 0.1~2mm程度の石英を少量含む。 良好。 焼成色調 内外面灰褐色。
Po 3 44 13	S G 3号 No25, 44, 46, 51	坏蓋	口径12.8 高さ 4.5	1縁部は外へ開き、肩部は丸い。1本の凹線により鈍い稜をつくる。天井部は丸い。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 1~4mm大の石英を少量含む。 良好。 焼成色調 内外面灰褐色。
Po 4 44 13	S G 3号 No54	坏身	口径10.5 高さ 4.0	たちあがりはやや短く、内傾する肩部は丸い。肩部はやや上向きに伸びる。底部は平坦。	底部外面へラケズリ。他ヨコナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 少量。 良好。 焼成色調 内外面暗青灰色。
Po 5 44 13	S G 3号 No24, 25, 29, 39, 44	坏蓋	復口径 12.6 復高さ 4.4	1縁部は外へ開き、肩部は丸い。天井部との境界に浅い凹線状の凹みがある。天井部は丸い。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 2mm大の石英を少量含む。 良好。 焼成色調 内外面灰褐色。
Po 6 44 13	S G 3号 No28	坏蓋	復口径 14.0	口縁部は外へ開く。肩部は丸い。稜はわずかに残る。浅い凹線状の凹みがあるが天井部との境界は不明瞭。	天井部外面へラケズリ。天井部中央部欠損。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 1mm大の石英を少量含む。 良好。 焼成色調 内外面青灰色。
Po 7 44 13	S G 3号 No36	坏蓋	復口径 12.6 復高さ 4.2	口縁部は直立気味で、肩部がわずかに残る。浅い凹線状の凹みがある。天井部との境界は不明瞭。天井部は丸い。	天井部外面へラケズリ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 0.5~1mm大の石英を含む。 良好。 焼成色調 内外面青灰色。
Po 8 44 13	S G 3号 No39	坏身	復口径 10.4 高さ 3.9	たちあがりはやや短く内傾する。肩部は丸い。肩部は端部が肥厚して、水平に伸びる。底部はほぼ平坦。	底部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 0.5mm大の石英を少量含む。 良好。 焼成色調 内外面灰褐色。 体部外面とところどころに自然釉。
Po 9 44 12	S G 3号 No43, 33	坏身	口径10.0	たちあがりは内傾し肩部は丸い。肩部は水平に伸びる。底部は平坦。	底部外面中央へラ切り未調整。肩下部のみヘラケズリ。底部は平坦な欠き痕あり。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 少量を含む。 良好。 焼成色調 内外面青灰色。
Po10 44 13	S G 3号 No40	坏身	口径11.0 高さ 4.3	たちあがりはやや短く、やや直立気味で、肩部は丸い。肩部は斜め上向きに伸びる。底部は丸い。	底部外面中央へラ切り後、肩下部のみヘラケズリ後ナデ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 少量を含む。 良好。 焼成色調 内外面青灰色。
Po11 44 13	S G 3号 No23, 27, 47, 52, 60	坏身	口径11.2 高さ 3.7	たちあがりはやや短く、内傾する。肩部は丸い。肩部は短く斜め上向きに伸びる。底部は平坦。底部中央欠損。	底部外面打ち欠きのため調整不明。内面不整ナデ。他ヨコナデ。	胎土 0.5mm大の石英を含む。 良好。 焼成色調 内外面灰褐色。 口縁部から肩部外面にかけて自然釉。
Po12 44 13	S G 3号 No66	坏身	復口径 11.8	たちあがりはやや短く、内傾する。肩部は丸い。肩部は短く、外方に伸びる。肩部は肥厚して丸い。底部欠損。	内面ヨコナデ。	胎土 少量を含む。 良好。 焼成色調 内外面灰褐色。
Po13 44 13	S G 3号 No 8, 9, 10, 12, 20, 21, 22, 30, 31, 48, 56, 57, 58, 59	罎	残存高 26.5	直線気味につぼまる胴部。底部欠損。	外面格子状タタキ。内面同心円文。	胎土 1mm程度の石英を含む。 良好。 焼成色調 内外面青灰色。
Po14 44 13	S G 3号 No67	罎 (土師器)	最大胴径 22.8	胴部は屈曲し外方へ大きく開く「く」の字状口縁。胴部は球形で底部は丸凸。脚壁は厚い。	胴部下内外面不整ハケメ。胴部外面上半タテハケ。内面上半へラケズリ。口縁部ヨコナデ。黒炭あり。	胎土 1~10mm大の石英を少量含む。 やや不真。 焼成色調 内外面淡褐色。外面淡黄褐色。外側底部にスス付着。
Po15 44 13	S G 3号 No61, 62, 63, 64, 67	罎 (土師器)	最大胴径 20.0	胴部が屈曲し外反しながら開く「く」の字状口縁。口縁部の脚壁は厚い。胴部は球形で最大径は中位にある。	外面格子ハケ。内面口縁ヨコナデ。胴部不整ヘラケズリ。	胎土 少量を含む。 良好。 焼成色調 内外面淡褐色。外面明褐色。

拝表13 佐川3号墳出土須恵器・土師器観察表

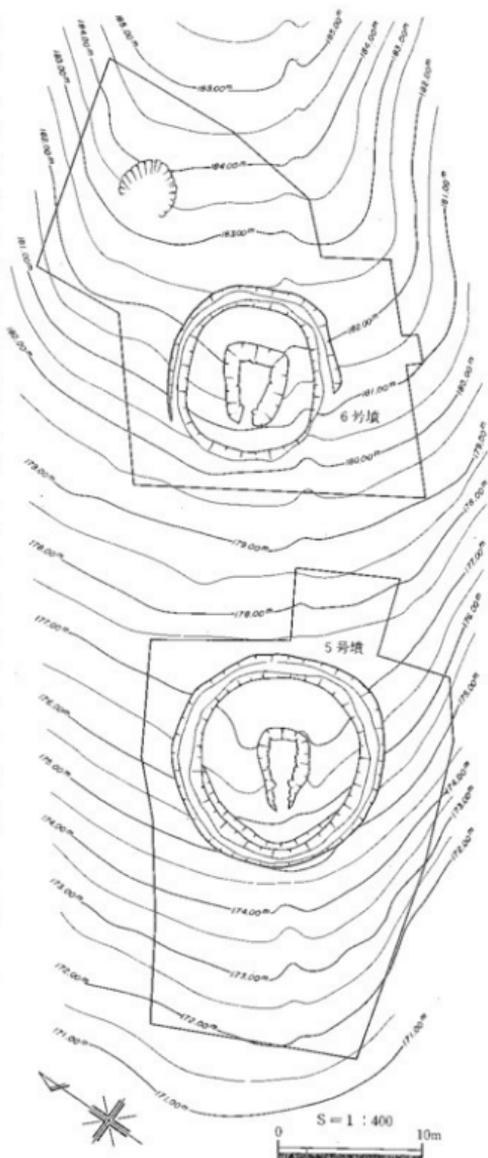


挿図43 佐川西尾根地形測量及びトレンチ配置図

## 第2節 佐川5号墳

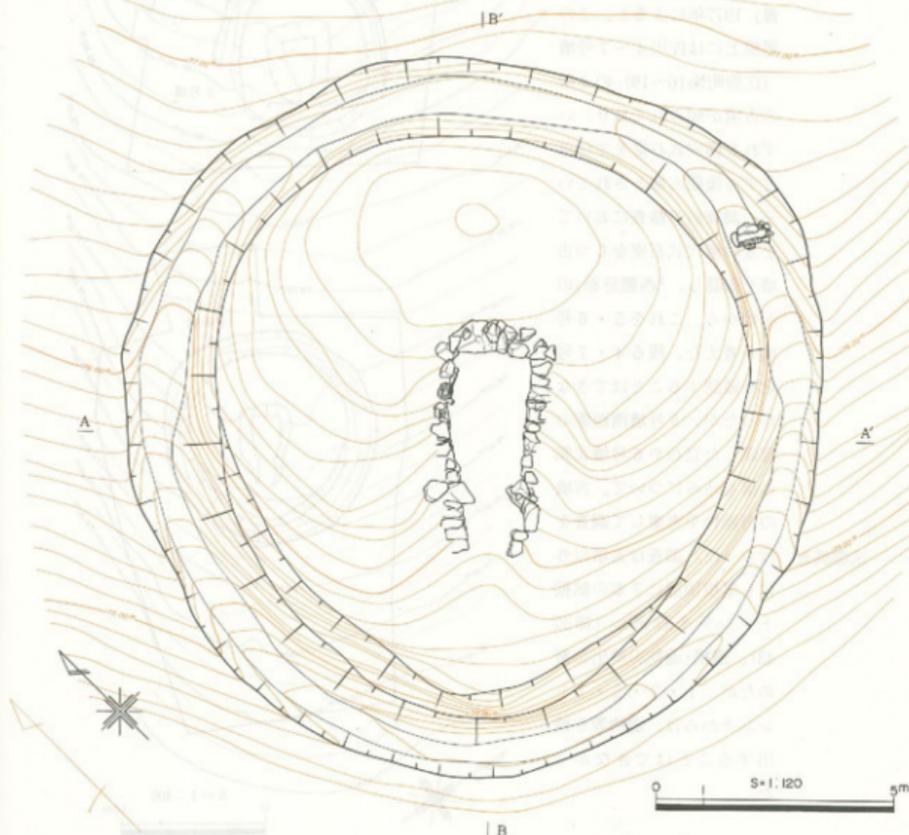
佐川西尾根 佐川5・6号墳は、東光寺裏山の西側尾根（佐川字上ミ岩屋ヶ成ル）に所在している。両側を開析された小谷に挟まれた尾根頂部は幅約20mを測り、約10°の傾斜をもって北東から南西の方向に降っている。『大山西麓埋蔵文化財分布調査報告書』1977年によると、この尾根上には佐川4～7号墳（江府町№16～19）の4基の古墳が知られており、いずれも横穴式石室を主体部とする後期古墳とされている。調査前の踏査において2基の横穴式石室をもつ古墳を確認し、『西麓分布』の記載から、これを5・6号墳と考えた。残る4・7号墳を確認することはできなかったが、5号墳南西側の露頭した立石や6号墳北側の落ち込みについて、古墳の可能性を考慮して調査を行なった。調査は古墳以外にも尾根頂部に7本の試掘トレンチを設定し（挿図43）、遺構・遺物の検出に努めたが、1・2・5・7トレンチからは、遺物等を検出することはできなかった。

試掘調査

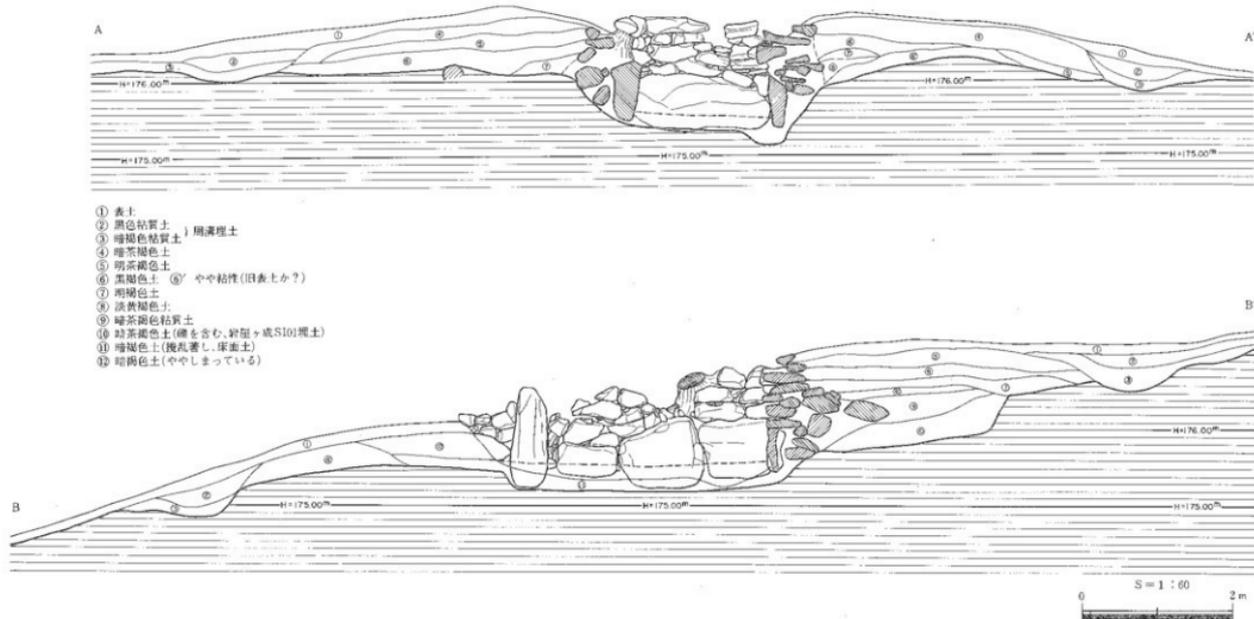


挿図44 佐川西尾根古墳位置図

- 位置** 佐川5号墳は西尾根稜線上の標高175～177.5mに位置しており、約10'の緩傾斜面に立地している。北東14mには佐川6号墳があり、5号墳墳丘北東側下層からは弥生時代後期後半～古墳時代初頭と思われる竪穴住居跡岩屋ケ成SI-01が検出されている。
- 墳丘** 発掘調査前の観察では墳丘の高まりを認めることができたが、周溝は埋没し、墳裾線を確認できなかった。墳丘中央には上部構造を失った横穴式石室の玄室が崩壊した石材と流入土で半ば埋没した状態で露出しており、奥壁と左側壁の一部が確認できた。調査は石室主軸を通る土層断面観察用ベルトと、墳丘中央部でこれと直交するベルトを設定して掘り下げを行なった。尾根上の土層が黒褐色土（クロボク）であったために周溝の検出は困難をきわめたが、幅1.5～2.0m、深さは北東側で0.4mの断面U字状の周溝がほぼ円形に巡ることを確認することができた。これによると墳丘は南北13.0



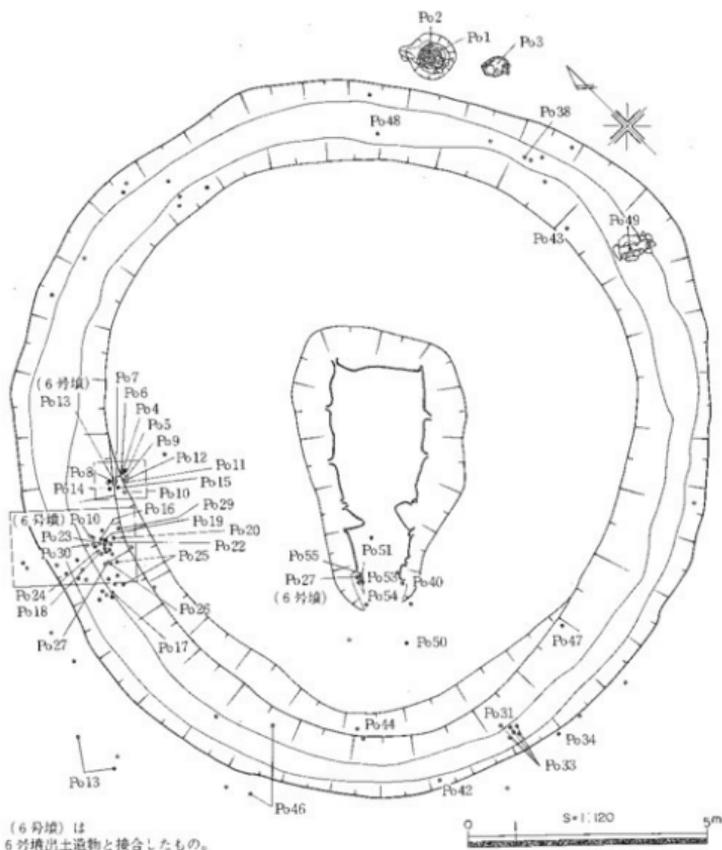
佐川5号墳古墳調査報告書 挿図45 5号墳墳丘実測図



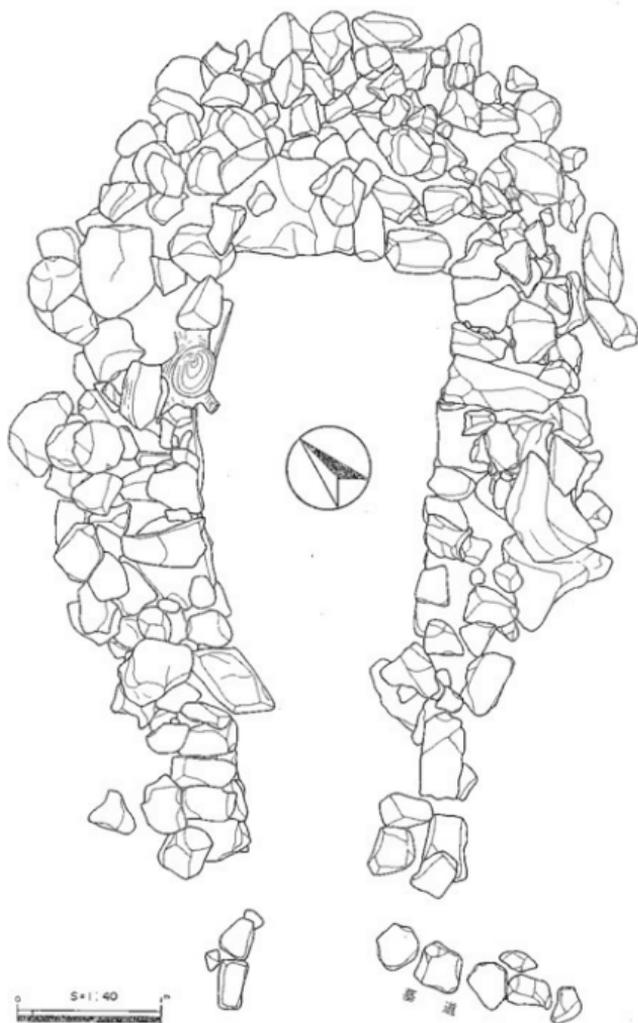
挿図46 5号墳墳丘土層断面図

m、東西12.5mの円形であり、周溝を含めると径約15mの円墳となる(挿図45)。墳丘の高さは上部が削平されているため不明であるが、石室の存在からみて2m前後の高さは有したものと推定できる。墳丘築成は地山に石室掘り方と周溝を掘削した後、石室の構築と併行して盛土を行なっている。盛土の厚さは現状で最高70cmを測るのみであり、暗〜黒褐色土系の土を積み上げているが、堅くたたきしめた様子はみられなかった(挿図46)。

**石室** 中心主体の横穴式石室は尾根主軸線に沿ってS-45°-Wに開口している。平面プランは両袖式で、玄室奥側幅が最も広く玄門部さらに羨道にむかって幅が狭くなっている。袖部形態は左袖石が高さ1.3mの柱石、右袖石は石積みによるもので差異はあるが、両方とも壁体に組み込まれている(図版16)。平面プランの側壁のラインは、袖石を挟



挿図47 5号墳墳丘遺物出土位置図



挿図48 5号墳石室検出状況図

んで玄室側壁と羨道側壁が一線に並び、入口が狭くなる無袖型石室に袖石を置いたような形状を呈している(挿図49)。石室全長は4.5mで、玄室長3.0m、奥壁側幅1.85m、玄門側幅1.55m、玄門部幅0.7m、羨道長1.05m、玄門側幅1.25m、羨門側幅0.9mを測る。玄室の高さは上部構造が失われているため、明らかにできないが、現状で最

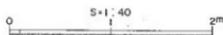
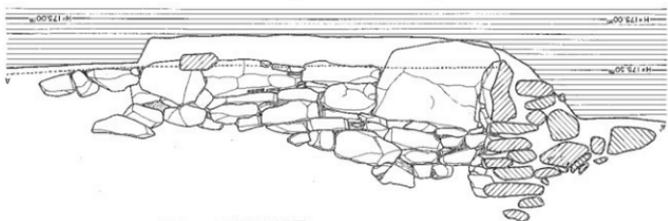
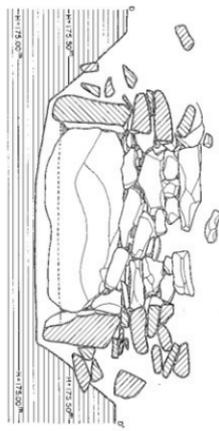
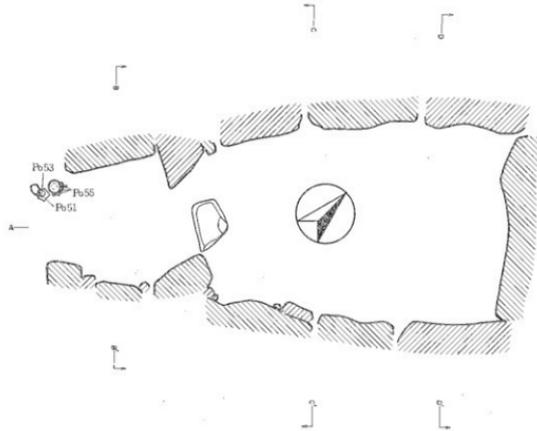
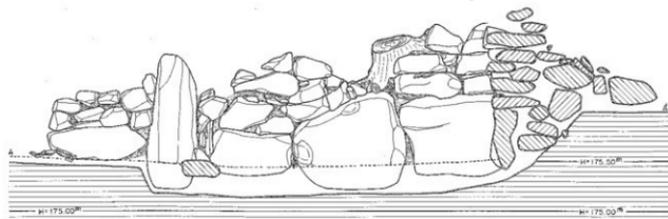
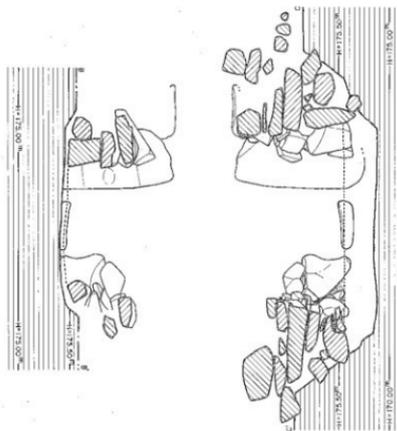
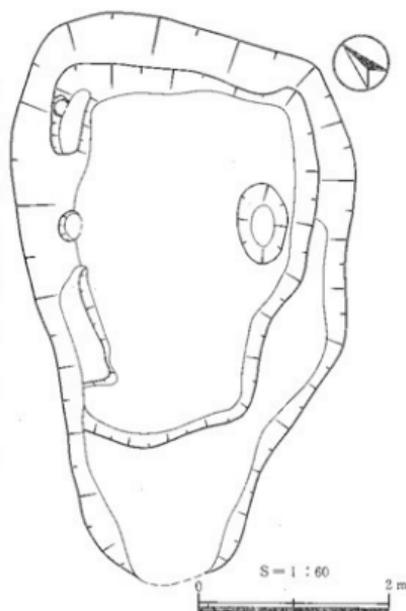


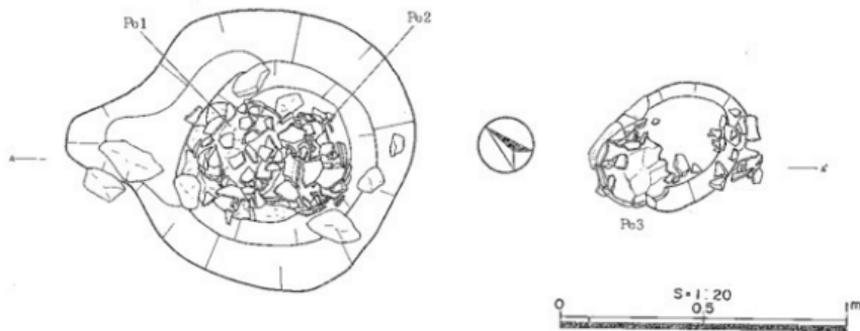
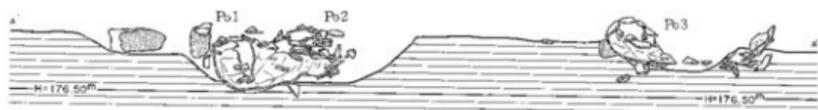
插图49 5号堆石室平面图

高1.4mを測る。

構築 石室の構築は墳丘中央部に長さ6m、幅3.6~1.7m、深さ0.85mの不整形形の掘り方を穿ち、その底面に腰石を据えている。腰石は奥壁に幅1.8m、高さ0.8mの板状の石を横長に据え、これを挟み込むように両側壁の腰石が置かれている。腰石の裏側には掘り方壁との隙間に裏込め石を詰めて安定をはかっているが、左側壁・奥壁・右側壁の奥側1枚は、石材を立てているのに対して、右側壁2枚目より前側は横に寝かせており、腰石裏込めはみられない。壁体の石積みは腰石上に割石、自然石を小口積みしており、壁裏面に控えをとって、壁面から測り最高1.7mの控え積みを行なっている。積石の手法は2~3石を単位として縦方向の目

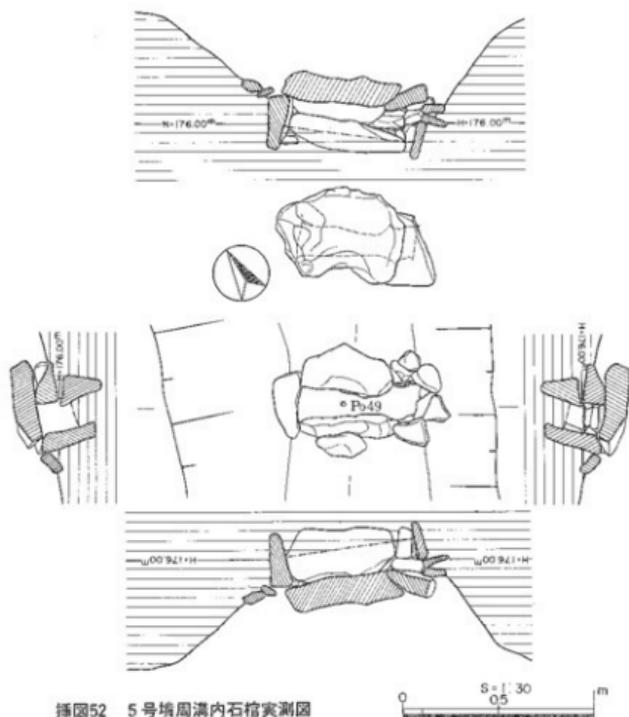


挿図50 5号墳石室掘り方実測図



挿図51 5号墳周溝外土器検出状況図

地が通り重箱積みの手法がみられるが2～3石の単位を超えて縦目地が通ることはなく、部分的に目地が斜めに通る箇所もある。石積みの画期は奥壁及び右側壁の場合腰石上端のレベルで横方向の目地が通るが、左側壁においては不明瞭である。奥壁と両側壁の接点は下部において明瞭な隅角をつくるが、右隅部では推定床面から約80cm前後の高さで両壁にまたがる力石的存在の石がみられる(図版16)。左隅部には明瞭な力石はみられないが、両壁の石を、互い違いに組み合わせている(図版16)。石積みは力石が存在するにもかかわらず、ほぼ垂直であり、持ち送りは殆どみられない。羨道側壁の左壁は腰石上に小口積みしており、右壁は攪乱により石積みが不明瞭である。石積みがみられるのは羨道部までであり、羨道前面に前庭ないし基道が存在したと思われるが、黒褐色土層と攪乱の為に明らかにしえなかった。但し、羨道右側壁前面からS-30°-Eの方向に、扁平な石が4～5個並んでおり、あるいは基道の一部かもしれない(挿図48)。この石列の西側から、土師質須恵器環蓋Po46が完形で出土している。これが基道であれば、石室主軸線から約80°折れ曲った基道が接続していたことになる。玄室床面は著しく攪乱されており、掘り方底面まで床面を認めることができなかった



が、玄門部近くに扁平な自然石が置かれており、保存が良好であった羨道床面の高さ  
と一致することから、6号墳と同様に玄室内に石が敷かれていた可能性がある。遺物  
は玄室において、徹底した擾乱によるものか流れ込み以外の遺物を見出すことはで  
きなかったが、羨道部においてやや左側壁に寄って土師須恵器蓋坯5個体が重なっ  
て検出された(図版18)。形態的に5号墳出土土器中で最も新相を示すものであり、追  
葬段階の土器と考えられる。

#### 箱式石棺

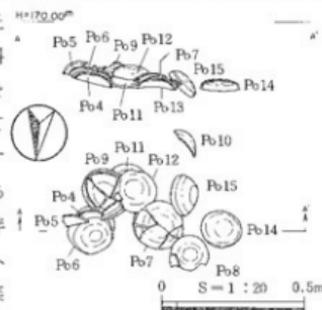
5号墳では東側周溝底面にて組合せ箱式石棺を検出した(挿図52、図版17)。石棺は周  
溝の走向方向と直交して、主軸をN-57°-Eにとっており、内法で長さ60cm、北側幅  
20cm、南側16cmを測る非常に小型の石棺である。側石及び小口石は大小の石材を用い  
て構築しており、部分的に石を積んでいる。蓋石は2枚であった。周溝完掘後の発見  
のため掘り方等は検出してないが、明らかに周溝を意識しているところから、古墳  
より後の構築であろう。注目されるのは石棺構築プランが水平でないことで、当初は  
土圧による歪みかと思われたが、図化してみると長軸南北方向で約9°、短軸の東西方向  
で約14°の傾斜をもっており、ほぼ地傾斜に閉じて構築されているようにも思われる。

#### 土器棺

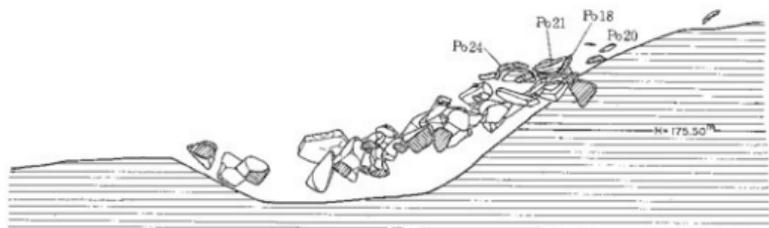
出土遺物としては、石棺内より須恵器環蓋片(Po49)が出土してはいるが、石棺の構  
築に伴うものと断定はできない。この他に墳丘東側周溝外に土師器甕を伴う土壌を2  
基検出した(挿図51、図版18)。北側の土壌は径約100cmの円形を呈し深さ17cmを測る。  
土師器甕Po1とPo2を合せ口状にして納めた土器棺と考えられる。出土状況からやや  
小型のPo2の口縁をPo1の口縁に挿入したものと推定され、土器の周囲は小石をかま  
せて安定をはかっている。約60cm離れた南側の土壌は長径50cm、短径40cmの楕円形で、  
深さ10cmを測る。削平等により遺存状態は良くないが、西端に寄せて土師器甕Po3が  
納めてあった。北側土壌のように明瞭ではないが、この甕を伴う土壌も埋葬施設であ  
った可能性がある。これら石棺、土器棺はその位置関係等から考えて、5号墳に伴う  
副次的な埋葬施設と考えられる。

#### 遺物

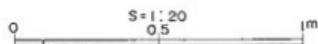
前述の如く石室及び石棺からの出土遺物はその殆どが流入したものであり、築造時  
期等を推定する資料とはなり得ない。周溝及び墳丘からの遺物の出土はいくつかのま  
とまりがみられる。墳丘北西端部近くでは墳丘断面割り中に盛土中から須恵器蓋坯の一括資料  
12個体を検出した(挿図53、図版18)。1個体を  
除いて蓋坯も坯身も内面を下にして伏せられて  
おり、2~3個が重なっていた。乳白色を呈す  
る焼きの悪い個体が多かったことが特徴的であ  
る。これは盛土中であることから墳丘築造に伴  
う時期の遺物と考えられる。この地点より西へ  
1mの周溝内墳丘側で10~20cmの角礫による集  
石がみられ、その上面に須恵器類が置かれてい



挿図53 5号墳墳丘内遺物出土状況図



挿図54 5号墳周溝遺物出土状況図



た(挿図54、図版18)。かなり原位置を動かされているようで、散乱した出土状況ではあるが、集石上に積み重ねるように置かれたようである。蓋坏類がほとんどで、若干高坏を含んでいる。この他に周溝内では、北東端部で甕(Po48)、北側では須恵器粟片を検出しており、南西付近では、高坏Po44・蓋坏・台付壺Po46が出土している。

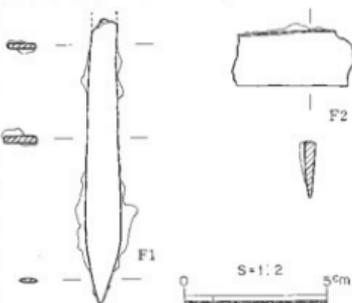
鉄器

5号墳墳丘出土の鉄器(挿図55、図版21)

F1は、先端部近くが最大幅1.3cm、厚さ0.3cmになる板状鉄製品で、先端は鋭く尖り断面レンズ状を呈する。F2は幅2.0cm、背幅0.4cmを測るやや大型の刀子の刀身部である。

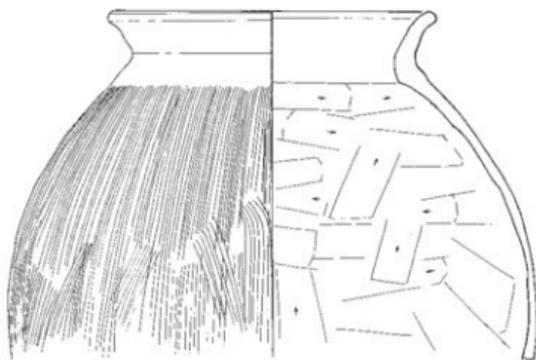
須恵器

須恵器は、石室羨道、墳丘内、周溝内からかなりまとまって出土している。遺物の詳細は、観察表に譲り、古墳築造時期を

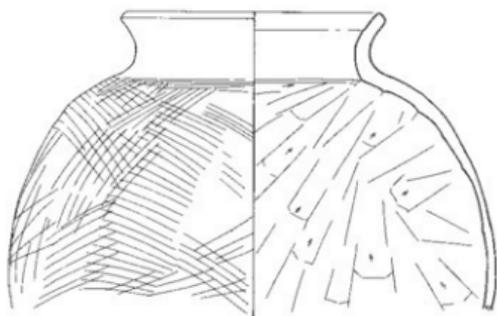


挿図55 5号墳出土鉄器実測図

坏蓋 判定する目安となる蓋坏類を検討する。坏蓋は12.5～13.5cm前後の小型品に加えて、  
 径14.5cm前後の大型品がみられる。天井部と口縁部の境界に稜をもつPo31、32を除け  
 ば、両者の境界は不明瞭で、口縁端部内面に段をもつのはPo33、34のみである。これら  
 の古相を示す土器は、口縁が外反するもので、他の坏蓋類とは形態が異っている。坏  
 坏身 身にも小型品と大型品が存在し、たちあがりは短く内傾し端部は丸くおさめている。  
 羨道出土の一群は特に、口径が小さく、たちあがりも矮小である。蓋坏の外表面調整を



Po1



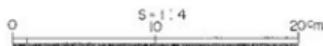
Po2



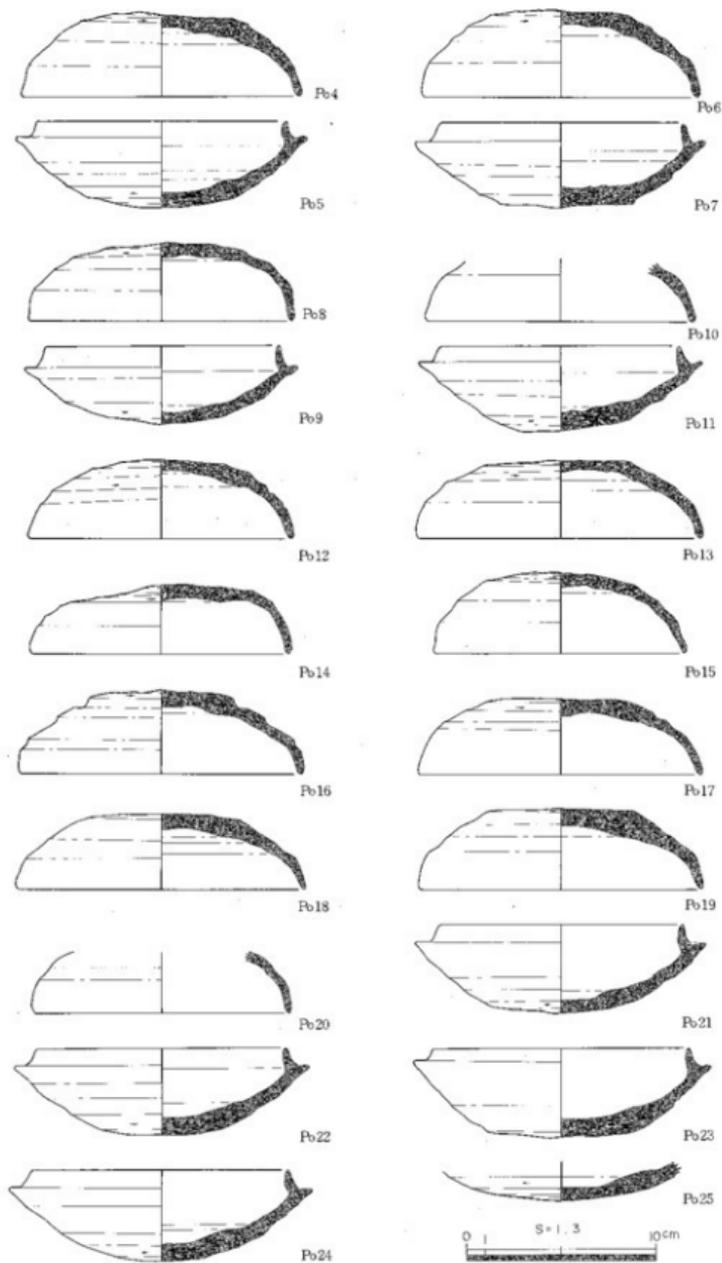
Po3

みると天井部ある  
 いは底部を $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{3}{4}$   
 ヘラケズリするも  
 のと、中央部を残  
 し、周辺部のみ1  
 ～2回ヘラケズリ  
 するもの、ヘラ切  
 り木調整で天井  
 部、底部が平坦に  
 なる傾向がみられ  
 る。これらは山陰  
 須志器編年III～IV  
 期に属するもので  
 ある。

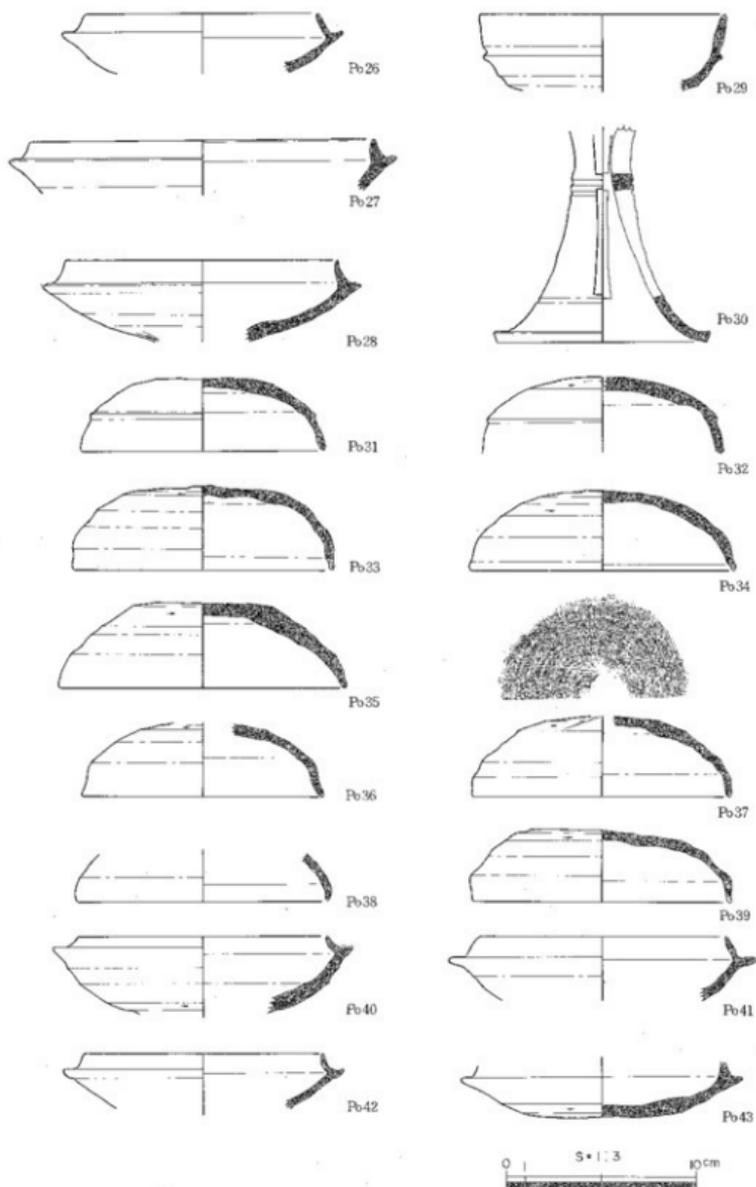
(中原 齊)



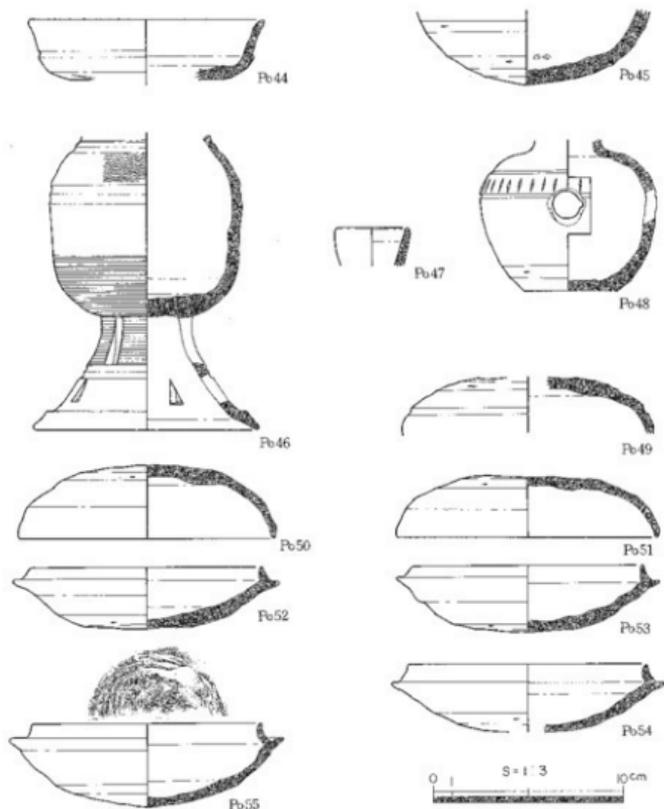
挿図56 5号墳周溝外出土土器実測図



挿図57 佐川5号墳須恵器実測図①



挿圖58 佐川5号墳須惠器実測図②



挿図59 佐川5号墳須恵器実測図③

遺物番号 発掘調査 図版番号	取上番号	部 種	法 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po 1 57 19	SG 5号 No85, 86, 87, 89	甕	口径22.0	縁部に面を持つ「く」の字状口縁で体部は球形を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。外面体部タテハケ、内面ケズリ。	胎土：1～3mm程度の石英・炭石を含む。 地色：良好 色調：内外面淡黄灰色
Po 2 37 19	SG 5号 No84, 85, 87	甕	口径 17.8	縁部に面を持つ「く」の字状口縁で体部は球形を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。外面体部不整ナデ、内面ケズリ。	胎土：1～5mm程度の石英を含む。 地色：良好 色調：内外面褐色
Po 3 57 19	SG 5号 No93	甕		「く」の字状口縁に続く諸部片。	外面ナデ、内面ケズリ。	胎土：粗い砂粒を多量に含む。
Po 4 57 19	SG 5号 No707	坏蓋	口径14.6 器高 4.5	口縁部は外へ開く。端部は肥厚して丸い。天开部との境界はやや不明瞭で、天开部は平直。	天开部外面はヘラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。口縁部乱峙斜回り。	胎土：1～3mm程度の石英を多量に含む。 地色：不良 色調：内外面灰白色。

挿表14 5号墳出土須恵器・土師器観察表①

遺物番号 図版番号	取し番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po 5 52 19	S G 5号 №683、 695	坏身	復口径 13.1 履高 4.6	たちあがりは短く、内縁しながらわずかに外反する。肩部は丸い。受部は短く、肥厚して自力にのびる。底部は丸い。	底部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 0.5~1mm程の長石を含む。 不頁 内外面乳白色 焼成色調
Po 6 57 19	S G 5号 №696	坏蓋	口径14.4 履高 4.6	口縁部は外へ開きながらやや直立気味となる。肩部は肥厚して丸い。天井部との境界はやや不明瞭で、天井部は平坦。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 1mm大の石英を多量含む。 やや粗 内外面乳白色 焼成色調
Po 7 57 19	S G 5号 №703	坏身	口径12.8 履高 4.5	たちあがりは短く、内縁する。肩部は肥厚して丸い。受部は肥厚して斜上方へ伸びる。底部は平坦。	底部外面へ切り未調整。内面不整ナデ。他ヨコナデ。	粘土 1mm大の石英を多量含む。 不頁 内外面淡灰褐色。 焼成色調
Po 8 57 19	S G 5号 №704	坏蓋	口径13.8 履高 4.2	口縁部は直立し、肩部はわずかに肥厚して丸い。天井部は丸い。	天井部外面中央へ切り未調整。周辺部へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 0.5~1mm程の石英、長石を含む。 良好 内外面淡褐色。 焼成色調
Po 9 57 19	S G 5号 №697 698	坏身	口径12.3 履高 4.2	たちあがりはやや短く、直立気味に内縁する。肩部は丸い。受部は水平に伸びる。底部は丸い。	底部外面へラケズリ後ヨコナデ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 1~2mm程の石英を多量含む。 良好 内外面灰褐色。 焼成色調
Po10 52 19	S G 5号 №704	坏蓋	復口径 14.0	口縁部は外へ開き、肩部は肥厚して丸い。天井部欠損。	内外面ヨコナデ。	粘土 3mm程の石英を含む。 良好 内外面淡灰色。 焼成色調
Po11 57 19	S G 5号 №705	坏身	口径12.5 履高 4.5	たちあがりは短く、内縁する。肩部は丸い。受部は斜上方へ伸びる。底部は丸い。	底部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 1~3mm程の石英を多量含む。 良好 内外面明灰白色。 焼成色調
Po12 57 19	S G 5号 №699	坏蓋	口径13.7 履高 4.2	口縁部は外へ開き、肩部は丸い。天井部との境に強いナデによる凹線がめぐる。天井部は丸い。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 1~3mm程の石英を多量含む。 良好 内外面淡灰褐色。 焼成色調
Po13 57 19	S G 5号 №706	坏蓋	口径14.9 履高 4.1	口縁部は外へ開き、肩部は肥厚して丸い。天井部との境界は不明瞭で、天井部は平坦。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 0.5~1mm程の石英、長石を含む。 良好 内外面淡灰色。 焼成色調
Po14 57 19	S G 5号 №700	坏蓋	復口径 13.7 履高 3.7	口縁部はやや直立気味に外へ開く。肩部は丸い。天井部は平坦。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 1~4mm程の石英を多量含む。 良好 内外面青灰色。 焼成色調
Po15 57 19	S G 5号 №701	坏蓋	口径13.1 履高 4.3	口縁部は外へ開く。肩部は肥厚して丸い。天井部との境界は不明瞭で、天井部は丸い。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 0.5~1mm程の長石を含む。 良好 内外面淡褐色。 焼成色調
Po16 57 20	S G 5号 №125、 248	坏蓋	復口径 14.7 履高 4.5	口縁部は直立気味で、肩部は丸い。天井部は強いナデによる深い凹線がめぐるが境界は不明瞭。天井部は平坦。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。	粘土 1~2mm程の石英を多量含む。 不頁 内外面乳白色。 焼成色調
Po17 57 20	S G 5号 №125	坏蓋	復口径 14.7 履高 4.0	口縁部は外へ開き、肩部は丸い。天井部との境に不明瞭な凹線がめぐる。天井部は平坦。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 1~2mm程の石英を多量含む。 良好 内外面淡灰褐色。 焼成色調
Po18 57 20	S G 5号 №287、 283	坏蓋	復口径 15.0 履高 4.0	口縁部は外へ開き、肩部は丸い。天井部との境界は不明瞭。天井部は平坦。	天井部外面へ切り後ナデ。他ヨコナデ。	粘土 0.5~1mm程の砂粒を少量含む。 不頁 内外面乳白色。 焼成色調
Po19 57 20	S G 5号 №287 292	坏蓋	復口径 14.8 履高 4.3	口縁部は外へ開き、肩部は丸い。天井部との境界は不明瞭。天井部は平坦。	天井部外面へラケズリ後ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 やや粗。 内外面乳白色。 焼成色調
Po20 57	S G 5号 №282	坏蓋	復口径 13.3	口縁部は外へ開き、肩部は丸い。天井部との境界は不明瞭。	内外面ヨコナデ。	粘土 砂粒、0.5mm程の長石を含む。 良好 内外面淡灰褐色。 焼成色調
Po21 57 20	S G 5号 №290	坏身	口径12.7 履高 4.7	たちあがりは短く、やや直立気味の肩部は丸い。受部は丸く、底部に伸びる。底部は丸い。	底部外面へラケズリ。内面ヨコナデ後不整ナデ。ロクロ回転計回り。	粘土 0.5~1mm程の石英、長石を多量含む。 不頁 内外面乳白色。 焼成色調

標表15 佐川5号埴出土須恵器観察表②

遺物番号 採出層号 図号	取上番号	群 属	径 寸 (cm)	形 態	手 法	備 考
Pa22 57 20	S G 5号 No287	坏身	復口径 13.0 器高 4.6	たちあがりは短く、内傾する。端部は丸い。受部は短く、斜上方に伸びる。底部は丸い。	底部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 0.5~2mm程の砂粒を少量含む。 不良 内外面乳白色
Pa23 57 20	S G 5号 No292	坏身	復口径 13.4 器高 4.7	たちあがりは短く、やや直立気味で傾する。端部は丸い。受部は短く、肥厚して丸い。底部は平坦。	底部外面へラケ切り未調整。内面不整ナデ。他ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 粗 不良 内外面乳白色。
Pa24 57 20	S G 5号 No287、 288	坏身	口径13.4 器高 4.8	たちあがりは短く、内傾する。端部は丸い。受部は肥厚し、斜上方に伸びる。底部は丸い。	底部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 0.5mm程の石英を含む。 不良 内外面乳白色
Pa25 57	S G 5号 No232、 285	坏身		坏部欠損。底部は丸い。器壁は厚い。	底部外面へラケズリ。内面不整ナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 0.5~1mm程の砂粒を少量含む。 良好 内面淡灰色。外面暗灰色
Pa26 58	S G 5号 No122	坏身	復口径 12.2	たちあがりはやや長く、内傾し端部は丸い。受部は外上方に伸びる。	内外面ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 砂粒を含む 良好 内外面青灰色
Pa27 58	S G 5号 No286	高坏	復口径 18.9	たちあがりは短く、やや内傾し端部は丸い。受部は肥厚し斜上方にのび、丸くおさめる。坏底部、脚部欠損。	内外面ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 粗 不良 灰白色
Pa28 58 20	S G 5号 No56、127	高坏	復口径 14.2	坏部。たちあがりは短く、内傾し、端部は丸い。受部は短いが鋭く、水平にのびる。	坏底部外面へラケズリ後ヨコナデ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 寄 良好 内面暗灰色 外面暗灰褐色
Pa29 58	S G 5号 No121	高坏	復口径 12.8	坏部。施土の坏部から直立気味にたちあがる口縁部。端部は丸い。腹は短く鋭い。	内外面ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 粗粒を含む 良好 内外面灰褐色
Pa30 58 20	S G 5号 No148	高坏	口径11.0	脚部。長い脚部から、「ハ」の字状に開く端部。脚端部はわずかに凹み面をもつ。長方形の2段2方向の透孔。	内外面ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 寄 良好 内外面淡灰色
Pa31 58 20	S G 5号 No169	坏蓋	復口径 12.6 器高 3.9	口縁部は外へ開き、端部は肥厚して丸い。腹は鋭い。天井部は丸い。	天井部外面へラケズリ後ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 寄 良好 内外面青灰色
Pa32 58	S G 5号 No35	坏蓋		口縁部欠損。腹は鈍い。天井部は丸い。	天井部外面へラケズリ後ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 0.5mm程の石英を含む 良好 内外面暗青灰色
Pa33 58 20	S G 5号 No195、 196、197、 198、199	坏蓋	口径13.5 器高 4.5	口縁部は直立し、端部は丸い。天井部内面は強いナデにより凹凸天井部との境界はやや不明瞭で天井部は丸い。	天井部外面中央へラケ切り未調整。周辺部へラケズリ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 1~5mm程の石英を少量含む 良好 内外面黄灰色
Pa34 38 29	S G 5号 No36、74、 113、114、 139、161、 540、663	坏蓋	復口径 13.8 器高 4.2	口縁部はわずかに外に開く。端部は丸く、内面には、段がみられる。天井部は丸い。	天井部外面へラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 0.5~2mm程の砂粒を少量含む。 良好(土質良) 内面赤褐色 外面乳褐色
Pa35 58 20	S G 5号 No66	坏蓋	復口径 15.0 器高 4.5	口縁部は外へ開き、端部は丸い。天井部との境界は不明瞭で、天井部は平坦。器壁は厚い。	天井部外面へラケズリ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 0.5~2mm程の砂粒を少量含む。 良好 淡灰白色
Pa36 58 20	S G 5号 No583	坏蓋	復口径 12.6	口縁部は外反し、端部は丸い。天井部は丸い。	口縁内外面ヨコナデ。天井部外面へラケズリ。内面ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 寄 良好 内外面淡白色
Pa37 58 20	S G 5号 No683、 686	坏蓋	復口径 13.4 器高 4.3	口縁部はやや外反気味に直立し、端部は丸い。外面へラケ記号あり。	天井部との境界は不明瞭で天井部外面へラケズリ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 1.5~1mm程の石英、灰石を含む。 良好 内外面灰褐色
Pa38 58	S G 5号 No5、220	坏蓋	復口径 13.1	口縁部は内傾し、端部は丸い。天井部との境界は不明瞭。	内外面ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 0.5~1mm程の石英を少量含む。 良好 内外面青灰色。
Pa39 58 20	S G 5号 No666、 685	坏蓋	復口径 13.3 器高 3.9	口縁部はやや外反気味に直立し、端部は丸い。天井部との境界は不明瞭。天井部は平坦。	天井部中央へラケ切り未調整。周辺部へラケズリ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	粘土 焼成 色調 寄 良好 内面灰褐色 外面暗青灰色

挿表16 佐川5号填出土須石器観察表③

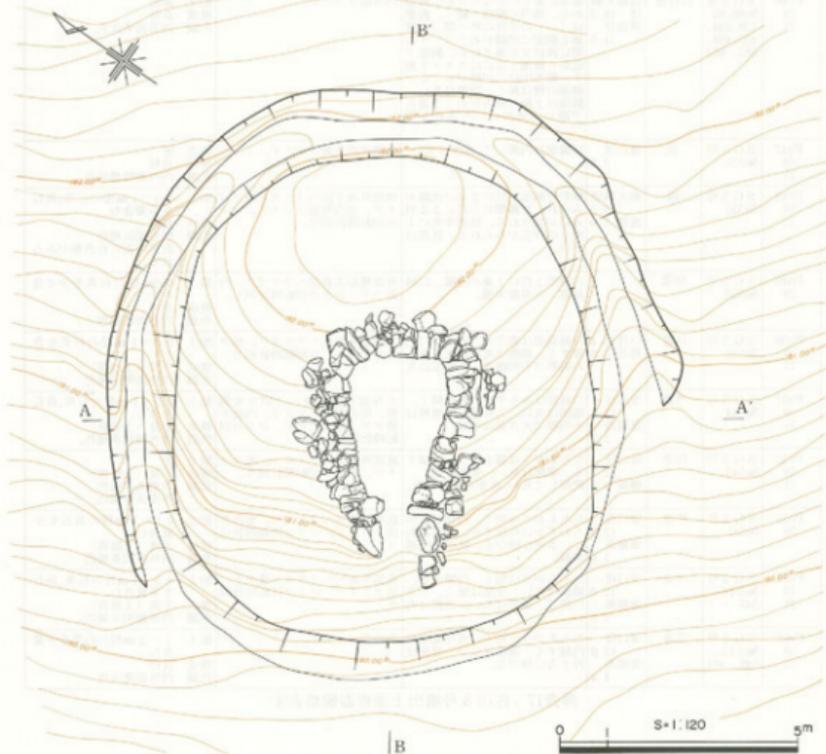
遺物番号 標記番号 図版番号	取上番号	器種	法 尺 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po40 58 21	SG 5号 No463	坏蓋	覆口径 13.0	たちあがりは短く、内縁する。 肩部はやや鋭い。受部は短く、 外上方へ伸びる。	底部外面中央へラ切り、両辺部 ヘラケズリ後ナデ。他ヨコナデ。 ロクロ回転時計回り。	胎土 灰褐色 色調 良好 内外面灰白色
Po41 57	SG 5号 No457	坏身	覆口径 13.0	たちあがりは短く、内縁し、肩 部はやや鋭い。受部は肥厚し、 水平に伸びる。	内外面ヨコナデ。	胎土 1mm大の石英を少量含む 良好 内外面灰褐色
Po42 58	SG 5号 No191	坏身	覆口径 12.5	たちあがりはやや短く、直立気 味で肩部は丸い。受部は短く、 斜上方に伸びる。器壁は薄い。 底部欠損。	内外面ヨコナデ。	胎土 薄 良好 色調 内面淡灰白色 外面暗茶褐色
Po43 59 21	SG 5号 No203	坏身	受部径 14.8	たちあがり肩部欠損。受部は短 く、水平に伸びる。肩部は丸い。 底部はやや平直。	底部外面弱ヘラケズリ。内面不 整ナデ。他内外面ヨコナデ。ロ クロ回転時計回り。	胎土 薄 良好 色調 内面暗茶褐色 外面暗灰褐色
Po44 59 21	SG 5号 No 69, 275, 460	高坏	覆口径 12.3	坏部、やや平直な坏底部から、 外へ開く口縁部がつづく。肩部 は丸い。壁は鈍い。	口縁部ヨコナデ。坏底部外面 ヘラケズリ後ナデ。肩部穿孔によ る切り込みあり。内面ヨコナデ。	胎土 0.5~1mm程の石英を含む 良好 色調 内外面青灰色
Po45 59 21	1W No685	蓋		丸い体部。	体部下位外面ヘラケズリ。他内 面ヨコナデ。体部内面下位ヨコ ナデ後不整ナデ。うつの切欠痕 あり。ロクロ回転時計回り。	胎土 薄 良好 色調 密 砂粒を含む 良好 内外面青灰色
Po46 59 21	SG 5号 No66, 95, 139, 294, 455, 488, 587, 663	内付蓋	復最大径 10.2 復底径 11.9	底みが著しいがなだらかな肩部 から、横円の胴部へ続く。肩部 は「ハ」の字状に外へ開く。胴 部と胴部に内縁がめぐり、その 間に波状文が施される。胴部下 位から肩部上位にはカケスを通 す。胴部中心に内縁がめぐると、 肩部の壁は鈍く、肩部は丸い。 肩部は上段に長方形の三方透孔 下段に三角形の三方透孔を穿 つ。	内外面ヨコナデ。	胎土 灰赤 良好 色調 内外面黄灰色。
Po47 59 21	SG 5号 No216	蓋	覆口径 2.6	口縁部は内湾して、肩部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土 薄 良好 色調 内外面暗茶褐色
Po48 59 21	SG 5号 No335	鉢	最大口径 9.3 底径 5.0	球形の胴部上位に2条の沈線が みられ、沈線間に工具による刻 み痕が施される。体部中央に上 向きの穿孔がみられる。底部は 平直。	体部外面下位ヘラケズリ後ヨコ ナデ。他内外面ヨコナデ。ロク ロ回転時計回り。	胎土 薄 良好 色調 内外面灰褐色 底部内面に自然釉がみら れる。
Po49 59	SG 5号 No663	坏蓋		口縁部上位に1条の凹線。1線 端部、天井部欠損。	外面残存天井部ヘラケズリ。内 面ナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 0.5mm程の石英を少々含む 良好 色調 内外面灰褐色
Po50 39 21	SG 5号 No548	坏蓋	口径13.4 器高 3.9	口縁部は直立し、わずかに肥 厚する。底部は丸い。天井部と の境界は不明瞭で、天井部は丸 い。	天井部外面弱ヘラケズリ。他ヨ コナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 0.5~1mm程の石英を含む 良好 (土質質) 色調 内外面暗茶褐色
Po51 59 21	SG 5号 No544	坏蓋	覆口径 13.5 復器高 3.2	口縁部はゆるやかに外へ開く。 肩部は丸い。天井部との境界は 不明瞭で天井部は平直。	天井部外面中央へラ切り未潤 滑。両辺部ヘラケズリ。内面不 整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回 転時計回り。	胎土 0.5~1mm程の石英、長石 を含む 不良 (土質質) 色調 内外面明茶褐色。
Po52 59 21	SG 5号 No543	坏身	覆口径 12.1 器高 3.3	たちあがりは極小化し、内縁す る。肩部は丸い。受部は短く、 斜方して丸い。底部はやや平直。	底部外面弱ヘラケズリ。他ヨコ ナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 薄 不良 (土質質) 色調 内面淡茶褐色 外面淡茶褐色。
Po53 39	SG 5号 No412	坏身	覆口径 12.5 復器高 3.6	たちあがりは短く、内縁しなが らわずかに外反する。受部は短 く、水平に伸びる。底部中央部 欠損。	底部外面弱ヘラケズリ。他内外 面ヨコナデ。ロクロ回転時計回 り。	胎土 0.5~3mm程の長石を少 量含む 不良 (土質質) 色調 内外面明茶褐色
Po54 39 21	SG 5号 No346, 547	坏身	覆口径 12.0 復器高 3.5	たちあがりは短く、内縁する。 肩部は丸い。受部は短く、上 方へ伸び、肩部は丸い。底部は丸 い。	底部外面弱ヘラケズリ後ナ デ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計 回り。	胎土 0.5~1mm程の石英、長石 を含む 不良 (土質質) 色調 内外面明茶褐色。
Po55 39 21	SG 5号 No545, 549, 481	坏身	覆口径 12.0 復器高 4.4	たちあがりは短く、外反気味に 内縁する。肩部は丸い。受部は 外上方に伸びる。	内外面ヨコナデ。	胎土 1~2mm程の石英を少量 含む 良好 色調 内外面青灰色

図表17 佐川5号墳出土須恵器観察表④

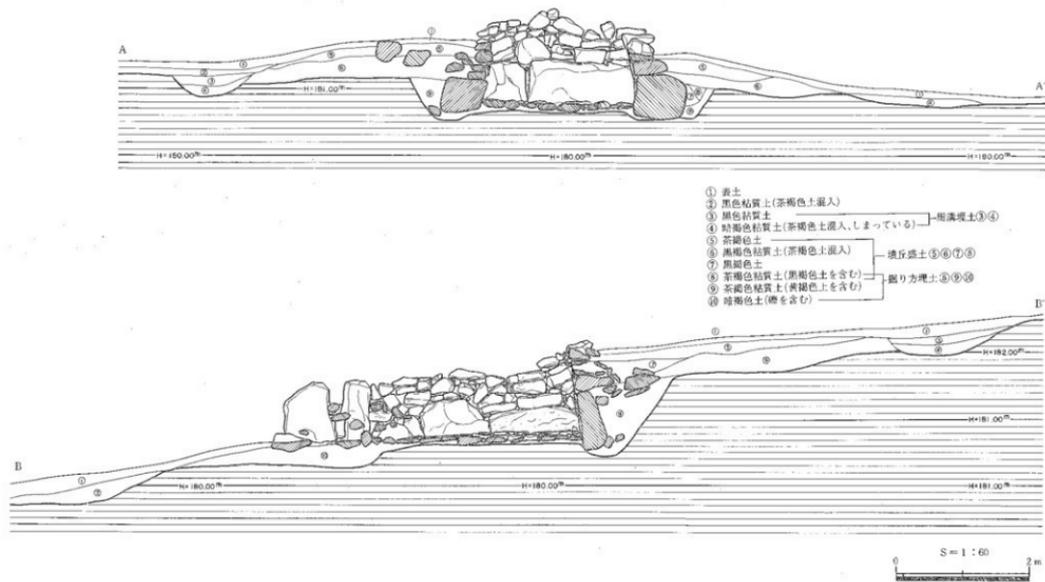
### 第3節 佐川6号墳

**位置** 佐川6号墳は5号墳の北東27m、同一丘陵上に位置し、標高180.6m～182.4mの尾根脊梁部に立地する。墳丘は封土がかなり流出しており、主体部南側脇には尾根筋に沿った山道が通るとい状態であった。主体部の横穴式石室は天井石を失い、砕かれた石材が付近に散乱しており、封土の流出とあいまって、積石塚を思わせる状況であった。

**周溝** 調査は露出する石室の主軸に沿わせ、或いは直交させるように土層断面ベルトを設定し、掘り下げを開始した。墳丘築造時の地表面、墳丘盛土と後の周溝埋土がともに黒色粘質土であった為、周溝確認が困難で、早い時期に断面ベルトに沿い墳丘裾部を断ち割らねばならなかった。周溝は丘陵斜面上位の残りの良い箇所て幅1.65m、深さ0.3mを測った。南側では旧地表面が掘り込まれることから周溝の位置がおおよそ察知できる程度で、丘陵斜面下位において周溝外側の肩は確認できなかつた。墳丘は東西8.8m南北10.3mを測る楕円に近い円形で、周溝を含めると径12m程の円墳である。



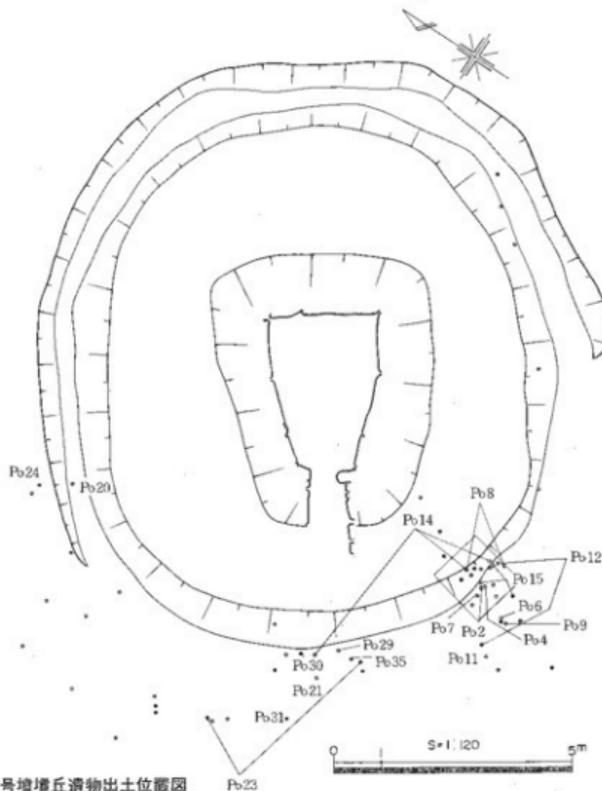
挿図60 6号墳墳丘実測図



挿図61 6号墳境丘土層断面図

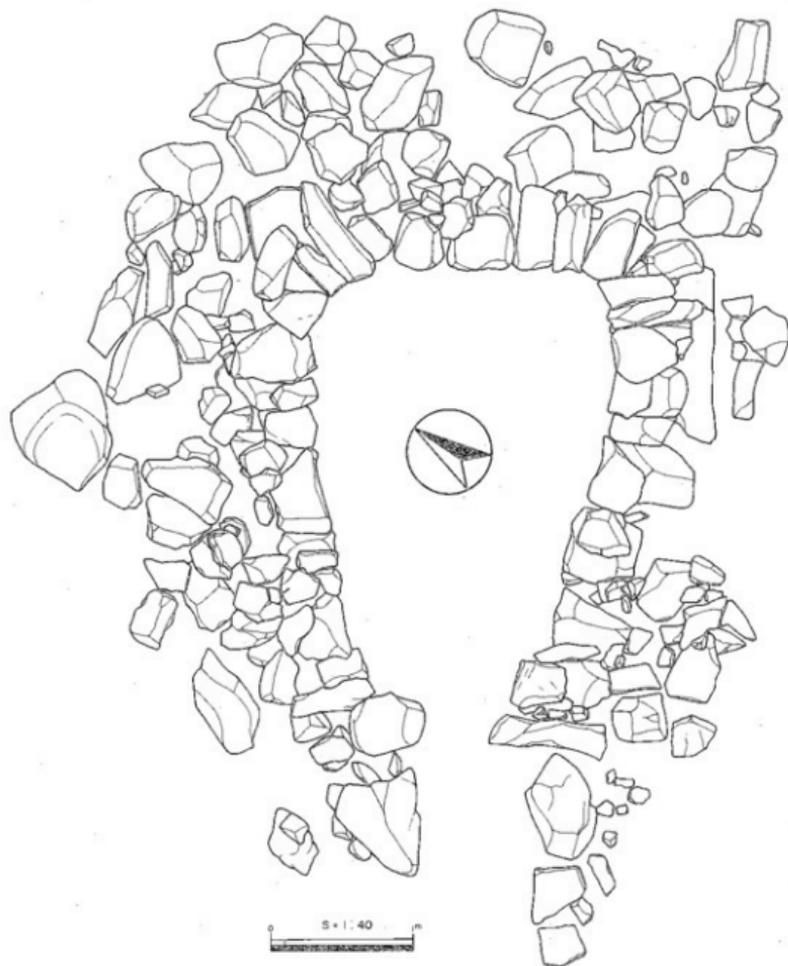
(挿図60)。土層断面の観察によると、墳丘の築造はまず地山を掘り込み、石室掘り方、周溝を形成する。次に石室構築に伴なって裏込、盛土を行なっている。残存する盛土の厚さは40~60cmである(挿図61)。

**石室** 中心主体はS-55°-Wに開口する横穴式石室であり、削平により天井石・壁体上部を失っている。石室は玄室と羨道からなり両袖石と甬石により画されている。石室規模を見ると石室全長5.20mを測り、残存する羨道長は1.5mで、幅は玄門側0.75m、羨門側0.85mを測る。玄室長は3.3m、玄室幅は奥壁側で2.32m、奥壁より1.25mの箇所まで2.25m、玄門部側で1.24mとなる。平面プランは両袖式で玄室幅の奥側が広く玄門側が狭い。さらに羨道が外に向けて幅広となる羽子板状を呈し(挿図64)床面には径30cm厚さ10cm前後の扁平な石を全面に敷いている。玄室床面では扁平石の隙間に小礫を詰め込んでいた(図版26)。石室の構築はまず地山面に梯形に近い掘り方(長径6.0m、短径奥壁側4.5m・羨道側3.2m)を穿ち、表面の平滑な大型石材を腰石として横長に据える。そして裏込め石を入れながら腰石の上に自然石・割石を小口積みしており、

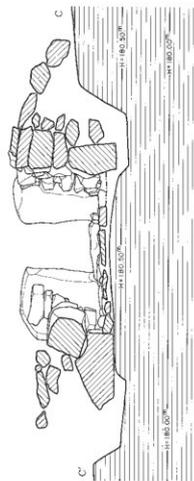
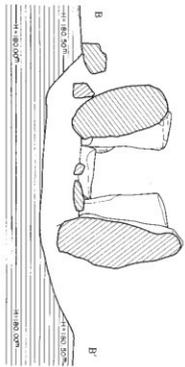


挿図62 6号墳墳丘遺物出土位置図

奥・両側壁裏面には厚い控え積みがみられた(挿図64・図版22)。腰石同様、上部に積む石も壁面が整うよう配慮され、5号墳石室と比べて壁面処理が巧みである。奥壁同コーナーでは、側壁と奥壁の上端の高さを合わせた後、両壁に力石的存在の平石を渡しているが、そのまま平積みされており、積み送りを強くして天井を狭める意図はみられない(図版25)。各壁の石積みを見ると腰石上に1~2石の単位で縦目地が通る重箱積みの技法がみられ、部分的には斜めの目地が通る箇所もある。両側壁は奥壁側よ



挿図63 6号墳石室検出状況図



0 1 2m  
S=1:40

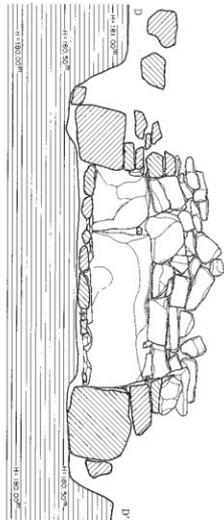
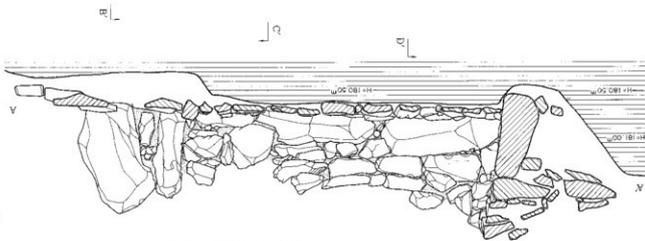
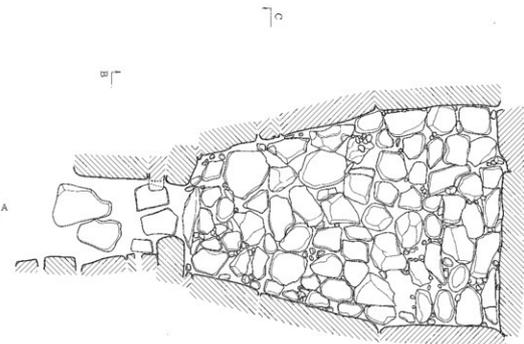
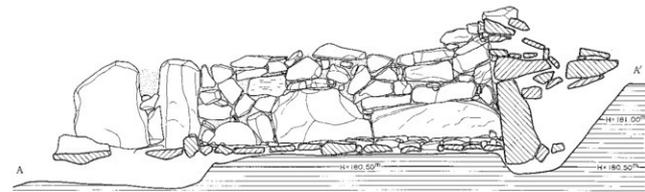
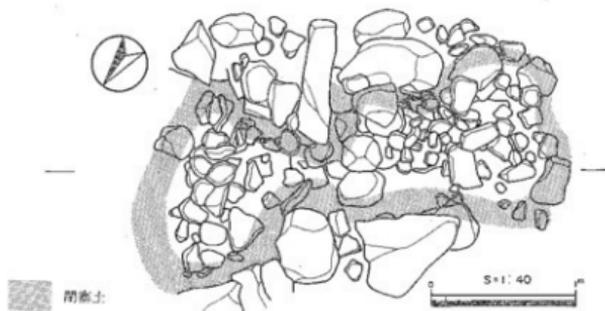
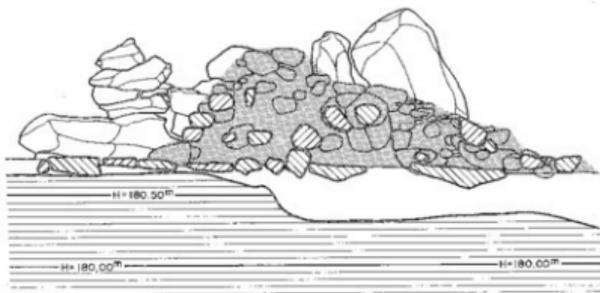


插图64 6号填石室实测图

り2石は大型の腰石を用いるが、それより前側は大型の腰石を用いず、割石を乱積み  
 にしている。石積みの画期を推定させる横方向のラインはみとめられない。袖部には  
 高さ1.0、幅0.7mの板石を縦長に据えて袖石としており、羨道は高さ1.0~1.3m程の  
 1枚石を袖石と同様に縦長に据えて羨道側壁としている。削平の為羨道の前に墓道が  
 続くか否か確証はないが、5号墳では墓道が存在した可能性を指摘されており、6号  
 墳にも当初墓道に類する施設が設けられていた可能性は強い。

**閉塞状況** 玄門部閉塞状況(挿図65)をみると、羨道側壁中程を境に玄室側と外側で隙の大き  
 さが異なる。これは閉塞行為が時間を違えて行なわれたことを示しており、2回目の  
 閉塞の際に、玄門をくぐってかなりの閉塞石・土が玄室内に入り込んでいる。

**遺物** 6号墳主体部石室の玄室の床面直上にて鉄刀(F1)、鏝(F2)、鉄鎌2(F3・  
 4)、管玉2(J1・2)を検出した(挿図68、図版31)。玄室内は床面まで攪乱を受  
 けており、各出土遺物は原位置を保っていない可能性は強い。F1は、残存長64.5cm  
 を測る平造りの直刀で、鋒を欠く。茎部は長さ12.1cmを測り、撫角片間で、一文字尻  
 に終る。目釘穴は2ヶ所ある。F2は縦径5.6cm、横径4.9cmの倒卵形の鏝で、外周縁  
 部には断面半円状の縁取りが認められる。中心孔は長径3.0cm、短径2.0cmを測り、中  
 心孔の周縁には柄鞘部の痕跡が残る。F2が直刀F1に伴う鏝がどうかは、出土位置



挿図65 6号墳石室閉塞状況図

4.18.00m

4.18.00m

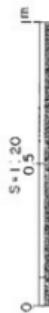
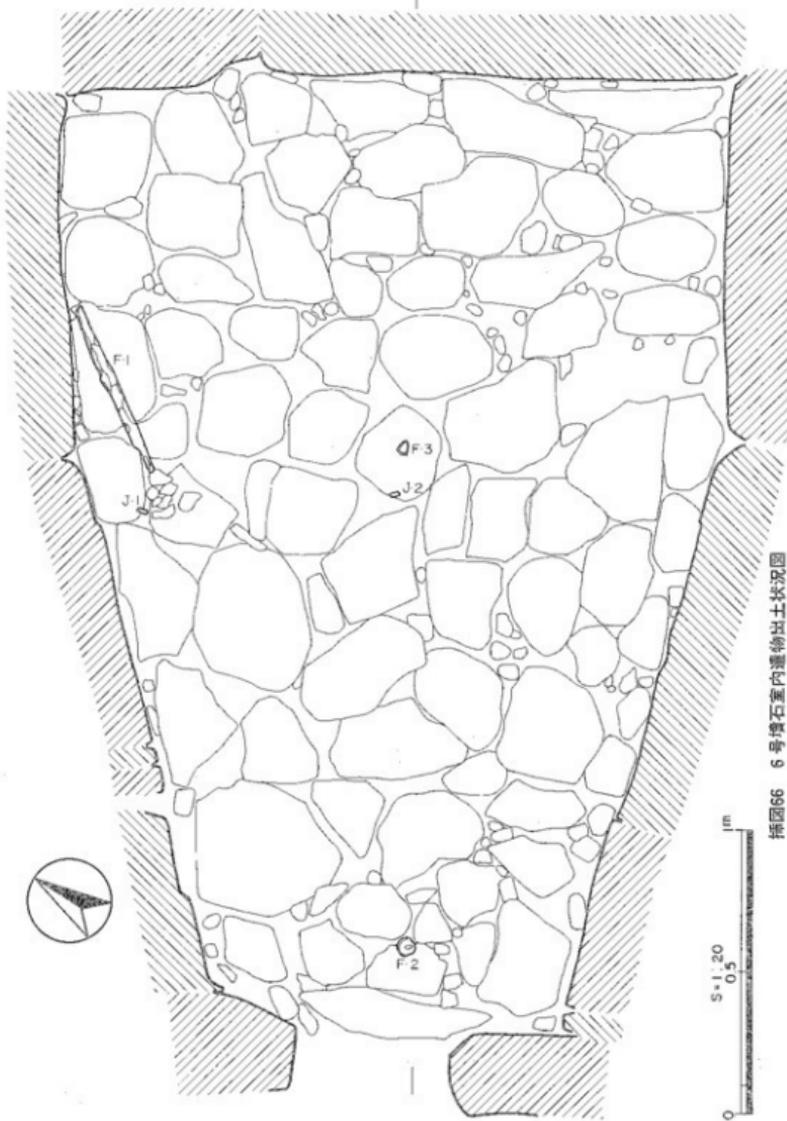
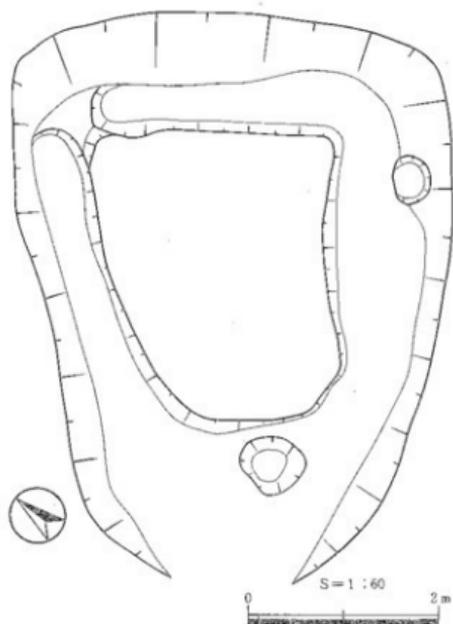
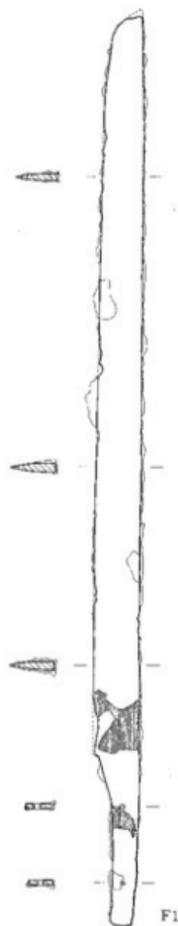
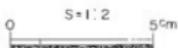
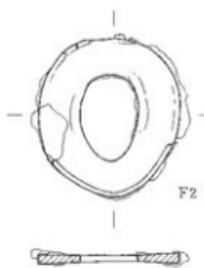
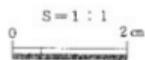
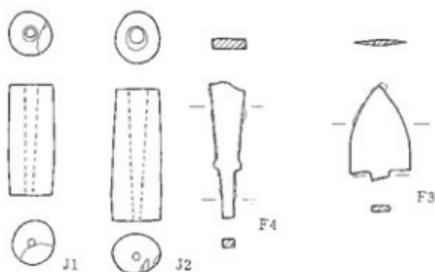


插图66 6号碑石室内遗物出土状况图



挿図67 6号墳石室掘り方実測図



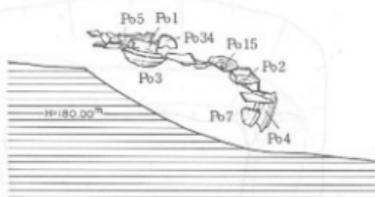
挿図68 6号墳鉄器・玉頭実測図

からしても不明である。F 3は残存長3.4cmを測りふくらみをもつ有茎三角形鉄片の鉄鏃である。F 4は鏃身を欠く頭部（まきよく）、鏃（のこぎり）を有する琵琶玉（のこぎり）をもつ。管玉は碧玉製で、濃緑色を呈する。J 1が長さ2.08cm、幅0.91cm、孔径0.29cmと0.1cm。J 2は長さ2.36cm、幅0.93cm、孔径0.36cmと0.19cmでいずれも片側よりの穿孔である。

須恵器 6号墳出土土器は全て須恵器であり、そのほとんどが破片である。土器の出土は墳丘南側の裾部、周溝部で認められるのみで原位置を保つと考えられる。その出土状況を観察すると、周溝がある程度埋まった段階で蓋坏・高坏が置き去られていることがわかる。また、これらの土器は、

坏 蓋 遺物の詳細は観察表に譲り、須恵器蓋坏類の時期を検討すると、坏蓋は口径13.2~13.8cmを測り、Po17、18が外面に1~2条の凹線をめぐらし天井部と口縁部を区別する以外は境界が不明瞭で口縁部内面の段はみられない。坏身は径11cm前後と、12.0~13.0cm前後の2種類があり、ちがいは、短く内傾するが、さらに矮小化したものもみとめられる。調整は、天井部、底部外面をヘラケズリするものと、周辺のみ1~2周ヘラケズリするもの、さらにヘラ切り未調整のものがある。天井部につまみのつくPo12は台付壺Po13の蓋、Po15、29は、高坏Po16、30の蓋であろう。高坏は長脚2段透しのものである。これらの坏蓋は、山陰須恵器編年のIII期に属するもので、Po27、28の矮小化した坏身はIV期まで降るものと考えられる。

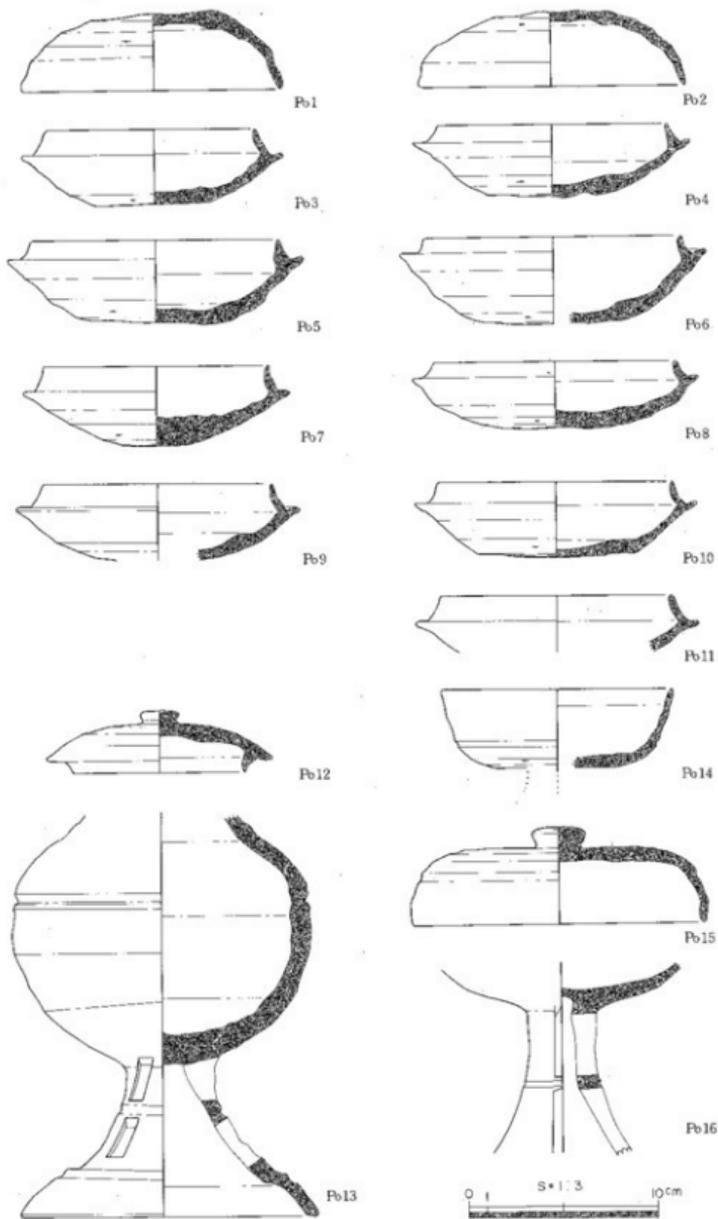
(太田正康・中原 斉)



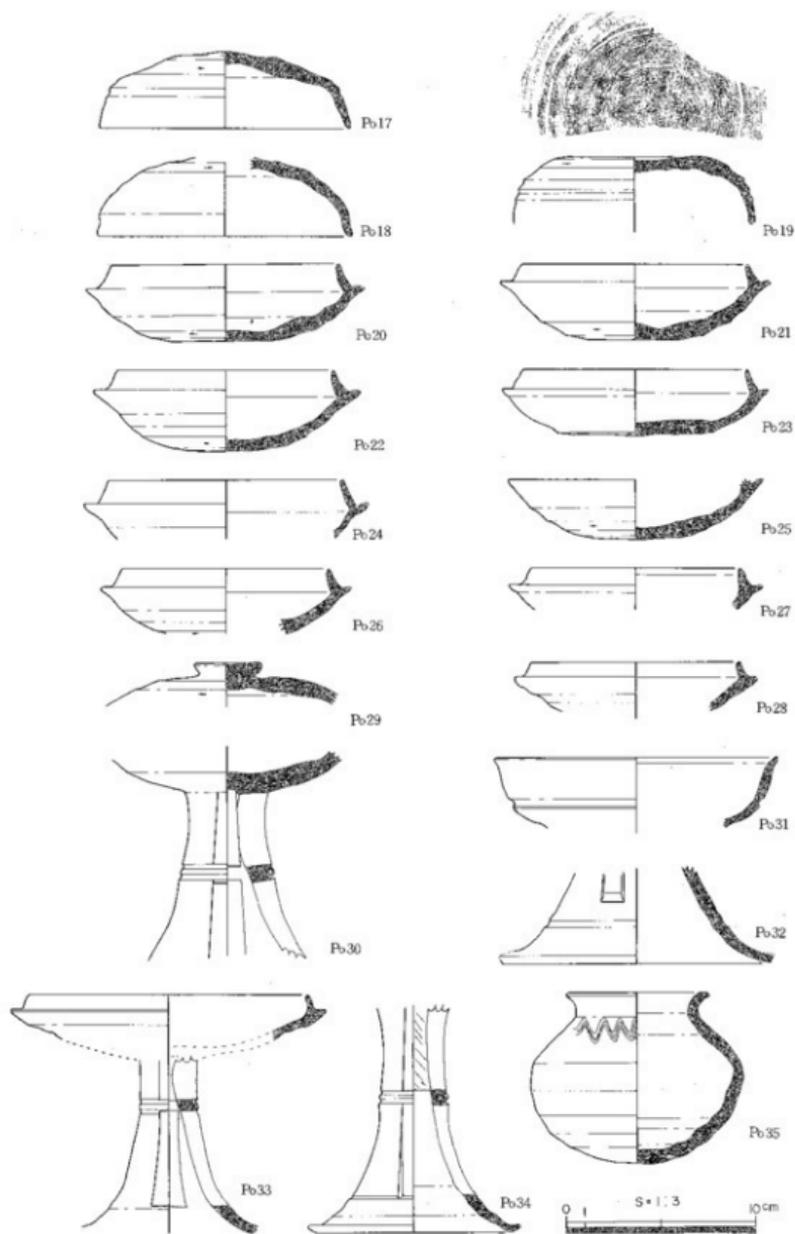
挿図69 6号墳周溝遺物出土状況図



写真3 佐川6号墳調査中風景



挿図70 佐川6号墳須恵器実測図①



挿図71 佐川6号墳須恵器実測図②

産物番号 採出地 採出番号	取上番号	器種	法 (cm)	量	形	態	手	法	備	考
Po1 70 29	S G 6号 No359	坏蓋	口径13.7 器高 4.2		口縁部は外へ開く。胎部はやや肥厚して丸い。大井部との境界は不明瞭で天井部はやや平坦。	天井部外面ヘラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	0.5~1mmの石英を含む。 良好 暗灰色 炭灰色	
Po2 70 29	S G 6号 No357	坏蓋	口径13.8 器高 4.0		口縁部はやや外反気味に開く。胎部は丸い。天井部との境界は不明瞭で天井部は丸い。	天井部外面へヘラ切り未調整。周辺部ヘラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	砂粒を含む。 良好 内外面明灰色。	
Po3 70 29	S G 6号 No359	坏身	口径10.7 器高 3.9		たちあがりは短く、内傾しながらわずかに外反する。胎部は丸い。受部は短く斜上方へ伸びる。底部は平坦。	底部外面へヘラケズリ後ナデ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	1mm程度の石英・長石を含む。 良好 外面暗灰色 内面青灰色	
Po4 70 29	S G 6号 No355	坏身	口径12.1 器高 3.9		たちあがりは短くやや内傾する。胎部は丸い。受部は肥厚して丸い。底部は平坦。	底部外面中央へヘラ切り後オサエナデ。周辺部ヘラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	1~4mmの石英を多量含む。 良好 内外面暗灰色。一部炭灰色 内面底部に三叉トナ目。	
Po5 70 29	S G 6号 No356	坏身	口径13.0 器高 4.4		たちあがりは短く、直立気味。胎部は丸い。受部は肥厚して丸い。底部は丸い。	底部外面へヘラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	0.1~1mm程度の石英・長石を含む。 良好 内外面暗灰色	
Po6 70 29	S G 6号 No348	坏身	口径13 器高 4.4		たちあがりは短く、内傾する。胎部はやや肥厚して丸い。受部は短く丸い。底部はやや平坦。	底部外面へヘラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	0.5~1mm程度の石英を含む。 良好 内外面乳白色	
Po7 70 29	S G 6号 No363, 358	坏身	口径11.9		たちあがりは短く、内傾する。胎部は僅かに外反し、丸くおさまる。受部は丸い。底部は丸い。	底部外面中央へヘラ切り未調整。周辺部ヘラケズリ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	0.5~2mm程度の石英を含む。 良好 内外面暗灰色、外面に自然釉。	
Po8 70 29	S G 6号 No274, 354 S G 4号 No598 S G 5号 No607	坏身			たちあがりは短く、内傾してやや外反する。胎部は丸い。受部は短く、水平に伸び、胎部は丸い。底部は平坦。	底部外面中央へヘラ切り未調整。周辺部ヘラケズリ。他ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	赤 良好 内外面暗灰色。 自然釉がかかる	
Po9 70 29	S G 6号 No240	坏身	口径 11.9		たちあがりは直立気味に内傾する。受部は水平に伸びる。底部欠損。	底部外面へヘラケズリ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	0.5mm程度の石英を含む。 良好 内外面青灰色	
Po10 70 29	S G 6号 No146, 273 S G 3号 No797, 665	坏身	口径 12.4		たちあがりはやや外反しながら内傾。胎部は丸い。受部は短く、斜上方への傾部は丸い。底部はやや平坦。	底部外面へヘラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	1mm程度の石英を少量含む。 良好 内外面青灰色	
Po11 70	S G 6号 No239	坏身	口径 12.0		たちあがりは内傾し、胎部は丸い。受部は肥厚して短く、水平に伸びる。底部欠損。	内外面ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	やや粗(0.5~2mm程度の石英の斑点が陶器全体にあり)。 良好 内外面暗灰色。	
Po12 70 29	S G 6号 No273, 238	坏蓋	口径 8.9 器高 3.3		円錐状のつまみをもつ。かえりはやや外反して短い。胎部先端は鋭い。天井部は丸い。	内外面ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	密 良好 内面暗青灰色。外面暗灰色。	
Po13 70 29	S G 6号 No641,351, 236 S G 5号 No5, 15, 103, 107	白付甕	口径高 8.0 器高 15.8		胴部は胴部との境に凹線をめぐる。口部は、やや外反のぼる。胎部は「ハ」の字状に外に開く。中位に凹線をめぐるし、その上に長方形の三方透し孔を穿つ。口縁部欠損。	体部外面ヘラケズリ後ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	砂粒を多量に含む。1mm程度の石英を少量含む。 良好 内外面暗灰色~青灰色	
Po14 70 29	S G 6号 No254	高坏	口径 11.9		口縁部は長く、直立気味で胎部はやや丸い。胎部との境に凹線めぐる。口縁部欠損。	坏部外面へヘラケズリ後ナデ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	砂粒を含む。 良好 内外面青灰色。内外面に自然釉	
Po15 70 29	S G 6号 No367	坏蓋	口径 15.3 器高 5.2		口縁部は直立し、胎部は丸い。大井部との境界に凹線めぐる。天井部は平坦。円錐状のつまみをもつ。	天井部ヘラケズリ後ナデ。天井部不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	砂粒を含む 良好 内外面明灰色	
Po16 70 29	S G 6号 No382, 61 S G 8号 No319 S G 3号 No3 S G 4号 No3	高坏			胴部の中央には、2本の凹線めぐる。上下二段に透し孔を穿つ。	内面不整ナデ。他ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	砂粒を含む 良好 内外面明灰色	
Po17 71 30	S G 6号 No326	坏蓋	口径 13.2 器高 4.1		口縁部は外へ開き、胎部は丸い。天井部との境界に凹線めぐる。天井部は丸い。	天井部外面中央へヘラ切り後ナデ。周辺部ヘラケズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	胎土 良好 外面 内面	砂粒、石英を少量含む。 良好 内外面暗灰色	

採表18 佐川6号墳出土須恵器観察表①

遺物番号 標記番号 図版番号	取上番号	形種	法 (cm)	量	形	態	手	法	備	考
Po18 71 30	S G 6号 No.326	坏蓋	復口径	13.3	口縁部は直立気味でやや外反し、 端部は丸い。天井部との境界は 不明瞭で、天井部は平坦。	天井部外面へラ切り後ナデ。内 面不整ナデ。他ヨコナデ。ロク ロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面淡灰色		
Po19 71 30	S G 6号 No.265	坏蓋			天井部との境界に2条の凹縁で 縁をつくり出す。天井部は凹み 気味で平坦。口縁部欠損。天井 部にへラ記り。	天井部外面へラケズリ後ナデ。内面 不整ナデ。他ヨコナデ。ロク ロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	0.5mm程度の石を含む。 良好 内外面青灰色		
Po20 71 30	S G 6号 No.302	坏身	復口径	12.0	たちあがりは短く、内傾する。 底部は丸い。受部は短く、斜上 方に伸びる。	底部外面中央へラ切り後ナデ。 端部へラケズリ後ナデ。内面 不整ナデ。他ヨコナデ。ロク ロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面青灰色。外面に白 土塗。		
Po21 71 30	S G 6号 No.318	坏身	復口径	13.0	たちあがりは短く、内傾する。 受部は短く、水平に伸びる。と もに端部は丸い。底部は平坦。	底部外面へラケズリ。内面不 整ナデ。他ヨコナデ。ロク ロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	0.5~2mm程度の石英、長石 を含む。 良好 内外面淡灰色。		
Po22 71 30	S G 6号 No.259, 608, 622, 627	坏身	口径 明高	11.3 4.3	たちあがりはやや短く、外反気 味に内傾する。端部は丸い。受 部は短く、斜上に伸びる。底 部は丸い。	底部外面へラケズリ後ナデ。 他ヨコナデ。ロクロ回転時 計回り。	胎土 焼成 色調	赤 良好 内外面青灰色。外面暗灰 色。		
Po23 71 30	S G 6号 No.392	坏身	復口径	11.8	たちあがりは短く、内傾する。 端部は丸い。受部は短く、水平 に伸びる。底部は平坦。	底部外面へラケズリ。内面不 整ナデ。他ヨコナデ。ロク ロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	1~5mmの石英を少量含 む。 良好 内面明灰褐色。外面暗青 灰色。		
Po24 71 30	S G 6号 No.368	坏身	復口径	12.4	たちあがりは内傾し、端部は丸 い。受部は短く、斜上に伸び る。底部欠損。	内外面ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	砂粒を多量含む 良好 内外面青灰色		
Po25 71 30	S G 6号 No.347	坏身			受部は短い。底部は丸い。た ちあがり欠損。	底部外面へラケズリ。内面不 整ナデ。他ヨコナデ。ロク ロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	0.5~1mm程度の石英を少 量含む 良好 内外面青灰色。		
Po26 71	S G 6号 No.477	坏身	復口径	16.8	たちあがりは短く、内傾する。 端部は丸い。受部はやや斜上 方にび丸い。底部欠損。	底部外面へラケズリ。他ヨコ ナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	0.5~1mm程度の砂粒を少量 含む 良好 内外面暗青灰色。		
Po27 71	S G 6号 No.364	坏身	復口径	11.0	たちあがりは短く、やや内傾す る。端部は丸い。受部は短く、 斜上に伸びる。底部欠損。	内外面ヨコナデ。ロクロ回転時 計回り。	胎土 焼成 色調	1mm程度の石英を少量含む 良好 内外面青灰色		
Po28 71	S G 6号 No.312	坏身	復口径	11.0	たちあがりは細小化し、やや内 傾する。端部は丸い。受部は短 く、水平に伸びる。底部欠損。	内外面ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	砂粒を多量含む。 良好 内外面明褐色。		
Po29 71 30	S G 6号 No.251	坏蓋			上部の僅く円たぬ扁平なつまみ をもつ天井部は丸い。口縁部欠 損。	天井部内面不整ナデ。外面へ ラケズリ後ナデ。他ヨコナデ。 ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	1mm程度の石英を多量含む 良好 内外面明灰色		
Po30 71 30	S G 6号 No.254	高坏			胴部中に2条の凹縁がめぐり、 その上下に透しあり。坏口縁 部端部欠損。	坏底部内面ヨコナデ不整ナデ。 胴部内周しほり目。他ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面灰褐色。		
Po31 71 30	S G 6号 No.316	高坏	復口径	14.0	楕状の体部から外反気味に開く 口縁部。端部は丸く、内面に 縁をもつ。底部との境界に凹縁を めぐらす。	内外面ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内面淡灰褐色 外面灰褐色		
Po32 71 30	S G 6号 No.249	高坏	復口径	14.0	「ハ」の字状に開く低い胴部に 浅い凹縁がめぐり、その上位に 長方形の透孔。	内外面ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面灰褐色		
Po33 71 30	S G 6号 No.248 313	高坏	復口径	15.6	坏部のたちあがりは細小化、垂 立気味。受部は斜上方に伸びる。 胴部には2条の凹縁がめぐり、 上下二段に透孔を穿つ。	胴部内面しほり目。他ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	砂粒、石英を少量含む。 良好 内外面暗青褐色 坏部外面明灰色。		
Po34 71 30	S G 6号 No.353 S G 5号 No.173	高坏	復口径	11.2	「ハ」の字状に開く胴部。中位 に2条の凹縁がめぐり、上下に 長方形の透孔。坏部欠損。	胴部内面しほり目。他ヨコナデ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む 良好 内外面灰褐色		
Po35 71 30	S G 6号 No.211, 250	小型器	復口径 器高	7.4 16.0	丸底で球形の胴部。胴部は明瞭 で短く反する口縁。口縁端部 に面をもつ。胴部一部が欠損。	胴部下位へラケズリ。他ヨコ ナデ。ロクロ回転時計回り。	胎土 焼成 色調	1~2mm程度の石英を含む 良好 内外面淡青灰色		

挿表19 佐川6号墳出土須恵器観察表②

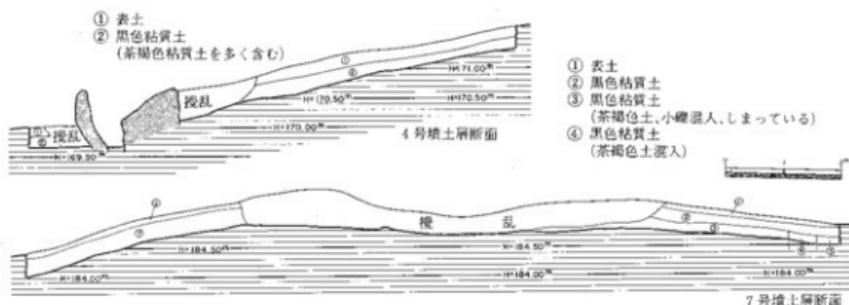
## 第4節 佐川4号墳・7号墳及び遺構外出土遺物

### 1. 佐川4・7号墳

調査開始前の踏査では「西麓分布」に記載された佐川4号墳（江戸町No16）7号墳（No19）を確認することができなかった。調査にあたっては、報告書の記述・位置を参考にして、以下の2地点を該当する古墳と推定した。

**4号墳** 当初、5号墳南西側に露頭していた立石を破壊された4号墳主体部の一部だと考え、土層断面ベルトを設定し掘り下げた。しかし、墳丘及び周溝が確認出来なかった為墳丘ベルトに沿って、断ち割りトレンチを入れた。断面観察の結果土層は自然堆積であり、露頭していた石材も地山に喰込んだ自然石であった（挿図72）。これにより4号墳は古墳でない判断した。

**7号墳** 6号墳の北約10mの尾根稜線をずれた位置に径約5mの摺鉢状の落ち込みがみとめられ、これを破壊された古墳と考え7号墳と推定した。落ち込みを中心に墳丘ベルトを設定し掘り下げを開始したが、墳丘及び周溝が確認できなかった為、墳丘ベルトに沿って断ち割りトレンチを入れた。断面観察の結果、中央部の攪乱土層を除いて、自然堆積が認められ（挿図72）、7号墳は古墳でない判断した。

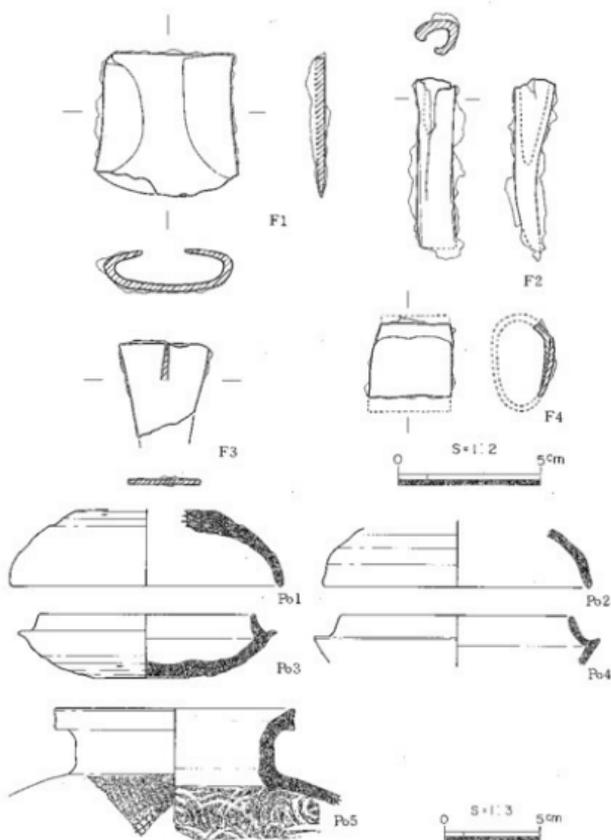


挿図72 4・7号墳土層断面図

### 2. 遺構外出土遺物

以上のように佐川4・7号墳は古墳ではなかったが、調査において、破壊された5・6号墳からの流入と考えられる須恵器、鉄器類（挿図73、図版31）を検出している。

**鉄器** F1は両側を折り曲げて装着する鋤先であり、刃部は弧状を呈し、幅5.0cm、長さ5.0cmを測る小型品である。F2は折り曲げて筒状にした袋部をもつ髯先状鉄製品で、先端部が錆化により不明瞭ではあるが、長さ6cm、幅1.3cmを測る。F3は先端部が斧箭形を呈する鉄鏃で先端幅3.2cm、厚さ0.2cmを測る。F4は、幅3cm前後の薄鉄板を曲げて楕円形にした鞘口金具の類と考えられる。須恵器類は坏蓋Po1、2は、僅かにアクセントを残すが天井部と口縁部の境界は不明瞭である。坏身Po3、4はたちあがり内傾して短く、端部は丸い。Po3の底部外面はヘラケズリする。



挿図73 佐川古墳群遺構外出土鉄器・須恵器実測図

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	器種	法 量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po 1 73 31	I W No685	環蓋	横口径 14.5	口縁部は直立し、端部は丸い。 天井部は平坦。	天井部外面ヘラズリ。他ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 砂粒を含む 良好 青灰色青灰褐色。
Po 2 73 31	I W No686	環蓋	横口径 14.0	口縁部は直立し、端部は丸い。 天井部との境界は不明瞭。天井部欠損。	天井部外面ヘラズリ。他ヨコナデ。	粘土 良好 色調 0.5cm程度の石英、灰石を含む。 良好 内外面青灰褐色。
Po 3 73 31	I W No617	不舟	口径11.2 器高3.4	立ちあがりは短く内傾して、端部は丸い。受部は短く水平にのび、端部は丸い。	底部外面中央へ切り込み溝部。周辺部ヘラズリ。内面不整ナデ。他ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 0.5~1mm程度の石英を少量含む。 良好 内外面灰褐色。
Po 4 73 31	I W No685	環身	横口径 12.0	立ちあがりはやや長く、外反気味に内傾し、短部は丸い。受部は短く、端部は丸い。	内外面ヨコナデ。	粘土 焼成 色調 砂粒を含む 良好 内外面青灰褐色。
Po 5 73 31	I W No640	蓋	横口径 12.5	端部の頸部は短く外反する。口縁部は上下に僅かに拡張し、端部は丸い。側部は大きく張り出している。	口縁部から頸部にかけて内外面ヨコナデ。側部外面格子状タタネ、内面同心文。	粘土 焼成 色調 0.5cm程度の石英を少量含む。 良好 内外面青灰色。

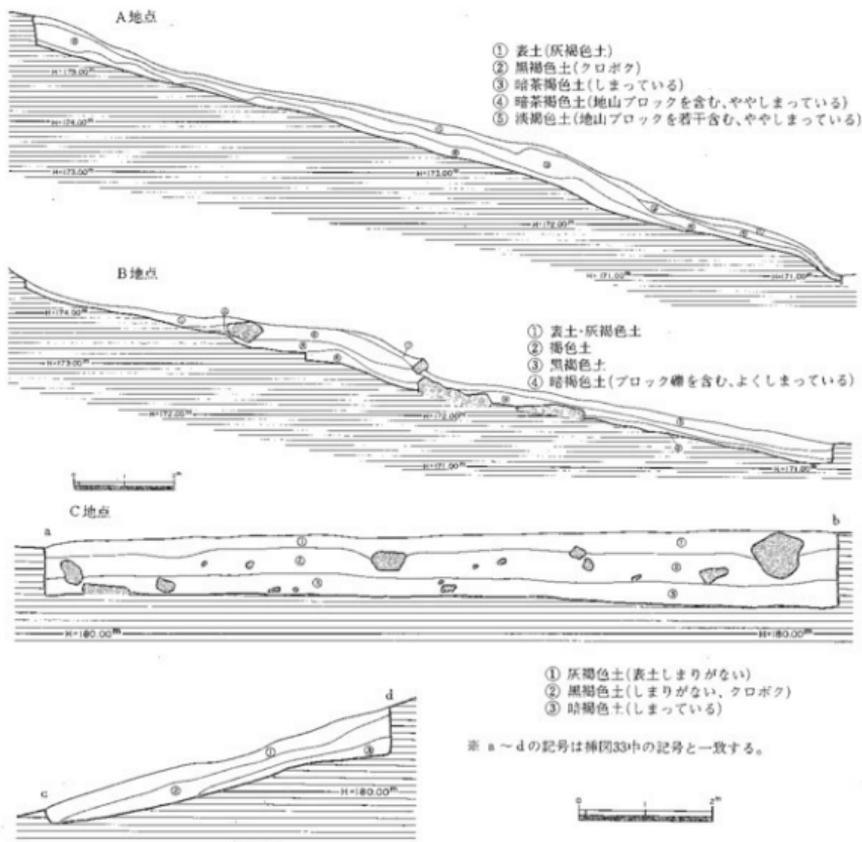
挿表20 佐川西尾根遺構外出土須恵器観察表

## 第5節 A、B、C地点の試掘調査

佐川古墳群の調査において『西麓分布』に記載のある3～7号墳を除く3ヶ所を古墳である可能性を考慮して試掘調査を行った。

**A地点** 佐川第一遺跡の北東40m、東光寺裏山南斜面が標高175m付近で傾斜変換するところに、幅10m、長さ7mのテラスが存在し、古墳あるいは他の遺構の存在を想定した。調査は土層断面ベルトを設定して掘り下げたが、土層断面には自然堆積のみ認められ、遺構、遺物は全く検出されなかった。

**B地点** 東斜面の佐川3号墳西側30mには、高さ3mの段差が存在し、下段に幅30m、長さ15mの平坦面が造られている。平坦面中央にやや大きめの石材を含む高まりが認められ、古墳を想定したが、土層断面によると遺構はみとめられず、段差自体が後世の削



挿図74 A・B・C地点土層断面図

平によるものであった。但し、調査に伴って、弥生土器、須恵器が出土しておりかつて古墳ないし遺跡が存在した可能性は高い。弥生土器はPo1～6が岩屋ケ成遺跡C類、Po7が高坪B類、Po8が脚部b類、Po9は底部B類に分類でき、弥生時代後期後半の時期である。須恵器Po10、11は山陰須恵器編年Ⅲ期に相当する。

**C地点** 佐川3号墳東側に古墳状の高まりがあるとの情報により、表面を清掃したが、古墳は発見できず、トレンチ調査に切り換えた。幅2mのトレンチを鏡形に設定し、最高1.5mまで掘り下げたが、土層は自然堆積のみ認められ、遺構・遺物は全く検出されなかった。

(浅川美佐子・太田正康・中原 斉)

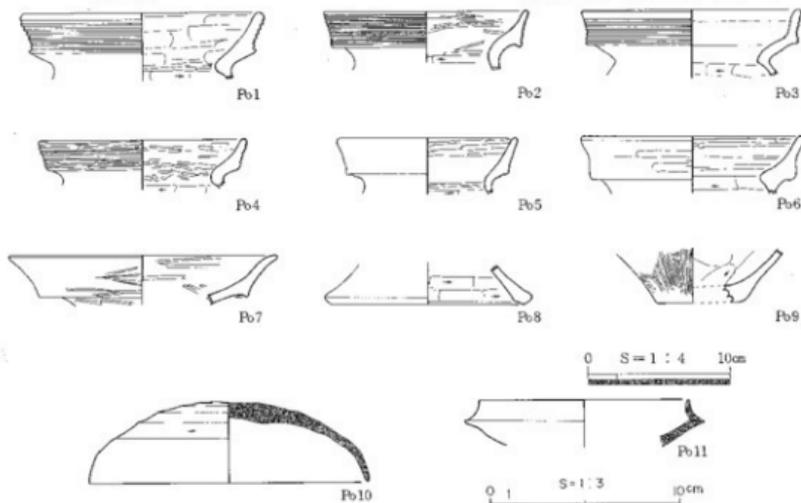


図75 B地点出土土器実測図

遺物番号 採出 図版番号	出土番号	器種	法 量 (cm)	形	部	手	法	備	考
Po 1 77 31	SG10号 No14	甕	復口径 16.6	やや外反する複合口縁、縁は水平に突出。口縁部に7条の柳葉平行線文を施す。	口縁部内面ヘラミガキ。頸部以下ヘラクスリ。	胎土 焼成 色調	1mm大の石英、長石を多量含む。 良好。 口縁部外面暗褐色。内面淡黄褐色。 特徴 外面スス付着。		
Po 2 77 31	SG10号 No 6	甕	復口径 15.4	ほぼ直立する複合口縁で2条の柳葉平行線を施す。下部部は下盤する。	外面頸部ナデ。内面口縁部ヘラミガキ。頸部以下ヘラクスリ後ナデ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内外面淡褐色。		
Po 3 77 31	SG10号 No 4	甕	復口径 15.4	ほぼ直立する複合口縁。口縁部に6条の柳葉平行線文を施す。	外面頸部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ヘラクスリ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内外面淡茶褐色。		
Po 4 77 31	SG10号 No 6	甕	復口径 14.4	やや外反する複合口縁で下部部はト平しない。口縁部に6条の柳葉平行線文を施す。	外面口縁部ヘラミガキ。頸部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。頸部以下ヘラクスリ。	胎土 焼成 色調	1mm大の石英、長石を多量含む。 良好。 口縁部外面暗褐色。頸部黄褐色。口縁部内面黄褐色。		
Po 5 77 31	SG10号 No 6	甕	復口径 12.4	やや外反する複合口縁。口縁部は僅かに下筆し丸い。	外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。頸部以下ヘラクスリ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 1mm大の長石を多く含む。 不真。 内外面淡茶褐色。		
Po 6 77 31	SG10号 No 3	甕	復口径 15.4	やや外反する複合口縁。口縁下部部が肥厚して丸い。	口縁部内外面ヨコナデ後一部ヘラミガキ。頸部以下外面ヨコナデ。内面ヘラクスリ後ナデ。	胎土 焼成 色調	砂粒を含む。 良好。 内外面淡灰褐色。		

Po 7 77 31	SG10号 No.17	高坏	復旧径 18.6	坏部。外反する複合口縁で下縁がやや下平。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヘラミダキ。口縁内面局部横ナテ。	胎土 黄灰色 色調	砂粒を含む。 良好。 内面赤色染影。外面茶褐色。
Po 8 77 31	SG10号 No.4	高坏	復旧径 13.3	「ハ」の字状に開く御台部。	内面ヘラズリ。外面ヨコナテ。	胎土 褐色 色調	砂粒。金漆母をきむ 不良。 内外面淡黄褐色。
Po 9 77 31	SG10号 No.6	底部	復旧径 6.0	平底。	外面武尾ヲテハケメ。底面ナテ内面底部ヘラズリ。	胎土 褐色 色調	砂粒を含む。 良好。 内面淡褐色。外面灰褐色。
Po10 77 31	SG10号 No.3	坏蓋	復旧径 14.6 器高 4.2	口縁部は外へ開き、底部は丸い。天井部との境界は不明瞭。天井部は丸い。	天井部外面引ヘラズリ。内面小窓ナテ。底ヨコナテ。ロゴロ回転時計回り。	胎土 褐色 色調	緻密 良好。 内外面灰色。
Po11 77 31	SG10号 No.2	坏身	復旧径 11.0	たらあがりは短く、内傾する。受部は水平に突出する。	内外面ヨコナテ。	胎土 褐色 色調	緻密 良好。 内外面黄灰色。

挿表21 佐川B地点出土須恵器・弥生土器観察表

## 第7章 若干の考察 ————まとめにかえて

### 第1節 縄文時代

岩屋ヶ成遺跡では、石鏃1点と土器少量が出土したのみで、縄文時代遺構は検出しなかった。その南東約50mに位置する佐川第1遺跡では、早・前・後～晩期の土器が出土し、後～晩期と考えられる土壌を1基確認した。また後述する通り、DOT-MAPの観察により、当時の生活空間の復原も可能であった。

佐川第1遺跡の場所に、かつて縄文人がキャンプの居住を営んだ。彼等はこの地以外にも、キャンプ的居住の場・本拠となる居住の場を求めていたはずである。今後、それらの遺跡が確認されることによって、縄文人の広範な生活空間を捉えることができ、またその空間の一部分として佐川第1遺跡が位置づけられていくであろう。今回の調査によって佐川周辺地域を舞台に営まれた縄文人の生活の一形態を示すことができたと思える。

#### 佐川第1遺跡出土遺物DOT-MAPについて

佐川第1遺跡の出土遺物については、そのほぼ全てを図化（平板によるポイントあげ）しながら取り上げた（挿図7・76）。一つの遺跡において、異なる時代の遺物が層序的に相互の上下関係を乱すことなく分布する状況は、その遺跡が存在した時点から現在に至る迄の間、大きな擾乱を受けていないという事実を明確に示すものである。その事実を再確認した上で佐川第一遺跡の縄文土器出土状況に関して検討を加えていく。

分類した遺物をDOT-MAPに示した。その中で時期が判明するものは、古い順に早期□（押型文）、前期▲（条痕系）、後～晩期△・●（無文精製・粗製）+（弥生土器）で、時期不明のものに○（無文）と★（剝片）がある。それらの遺物が挿図7・76の中で如何に分布するか観察したい。まず垂直分布からみていく。

挿図7 ▲・★とその他に2大別できる。この図において、我々が確認した分層ラインは厳密には更に細分されるであろう。つまり、この図に示される単一層の中に、実際には複数の包含層が存在するということである。例えば②層は、△・★を含む北側と、○・●・+を含む南側に区分可能となる。従って、この図については、ある程度地傾斜に則した上下関係も考え合わせて、早・前期の遺物と後～晩期の遺物が区分される。南側における各マークの混在は、挿図76の垂直分布状況などから考えると、後に動かされたものとみ方がよからう。

## 挿図76

- Aブロック 若干ではあるが、○が他のマークよりも下位に分布する。他のマークは混在する。  
Bブロック Aブロック同様、○が下位に分布する。北側では▲・★と○が混在するが、挿図7  
の状況が示す様に、○の方が本来上位に分布する。その群からやや離れて分布する○  
・●も上位（新しい時期）のものとして捉えられる。  
Cブロック Aブロックと同様である。●と△とは重なり合う。

以上の垂直分布の中には、異なるマークの混在する状況が頻繁に見受けられた。これは、そこに分布する遺物のうち、新しい時期のものがその場所に置き去られたことによって、その状況に至ったか、或いは、それらの遺物が他の箇所から同時に流入して来たかのどちらかであるが、挿図76の平面分布をみると、自ずとその解答が得られる。

挿図76(平面図) 線の集結は接合関係を示す。(Po8・11などは、ある程度復原もされている。)

▲・★は中央部に集中し、△・●・○は南側に集中する傾向がある。

新しい時期の遺物（現位置を保っている可能性が強い）が、ある程度復原できること、且つ、各時期の遺物の分布にまとまりがみられることは、本遺跡における遺物の分布が、自然的作用（流れ込み）によるものではなく、人為的作用の結果生じたものであることを明確に示している。この人為的作用とは、人間が居住空間を維持しながらおこなう行為であることには間違いないが、もう一歩踏み込むと、おそらくは各時期に生きた人間が、各々の空間を成立・維持するため行なった清掃行為であろうと考える。

以上DOT-MAPを観察してきたが、これを統合すると▲→○→●・△という上下関係（時間的差異による）があること、その平面分布も各時期毎にまとまりを示すことが判明した。そのことにより、本遺跡における生活空間（遺物分布範囲）の時間的変遷を類推することができる。

早期の遺物出土量は極少で、その生活空間を想定するに至らなかったが、本遺跡より北西へ50mの位置にある岩屋ヶ成遺跡からも、同時期の遺物が出土しており、その関連が窺われる。前期の遺物は中央部に集中する。これは前期以降の人為的作用により影響を受けたものであるが、実際と大きく食い違うことはないと考えられ、ここに生活空間を想定できる。○で表わした無文土器の時期は不明であるが、その分布範囲は出土遺物の中で一番の広がりをみせ、後～晩期の範囲とほぼ重なり合う。後～晩期の遺物は南側に集中する傾向がある。従ってこの付近に生活空間を想定できる。以上のように生活空間の時期毎の変遷が迎れるわけであるが、各時期とも遺物出土量から類推すると、長期間継続して人間が居住しておらず、むしろキャンプ的居住であったと考えられる。

最後に今回の調査において、遺物を図化（平板によるポイントあげ）しながら取り上げた重要性、並びに必要性について少し触れ結びとしたい。全国的にみても、縄文時代とりわけその古い時期において、明確な生活跡（特に住居跡等）はほとんど確認されていないのが現状である。その為に当時の生活空間を復原する作業は困難を免れない。近い将来そのような遺構が確認されることを期待して止まないが、現段階では出土遺物の分布等を利用するという方法でしか生活空間



挿図76 佐川第1遺跡出土縄文土器DOT-MAP

復元へのアプローチが行えない。つまり現場における遺物の1点あげど、それによるDOT-MAP（平面・垂直）の作成が必要不可欠なのである。佐川第1遺跡では、性格不明の後～晩期の土壌を1基検出したのみであったが、以上述べた方法により居住空間とその性格、加えて時期毎の変遷が想定できた。もしDOT-MAP作成を行わなかったとすれば、調査の後に遺物が残っただけという状態に陥ってしまい、遺物の実測図と写真を報告するだけで、上述のように遺跡の性格を論ずることはできなかったであろう。「どの位置関係を記録するかは、発掘現場における調査者の判断にかかっており、調査者が記録しておかなかった位置関係は、発掘によって解体されてしまえば再点検の方法がない。考古学の研究作業の中には、一発勝負的な場面が含まれている…」<sup>註4</sup>（太田正康）

註1 精製土器としたものは土器外面にヘラ跡が、粗製土器としたものは土器外面に削痕がそれぞれ認められる。

註2 挿図7の中では弥生土器の混在が認められ、挿図76では○マークは●・△よりも下位に分布する。それらのことから、この状況は攪乱によるものとする。

註3 古い段階の土器の中に、ひどく磨滅したものがないことも、その根拠の1つとなる。

註4 横山浩一「考古学とはどんな学問か」『日本考古学を学ぶ(1)』有斐閣選書1978年

## 第2節 弥生時代以降

1. 遺構 佐川第1遺跡、岩屋ヶ成遺跡では弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけての集落跡を調査することができた。調査は遺跡の全体からすれば部分的であり、遺構の検出状況は必ずしも良好とはいえなかった。したがって、竪穴住居、掘立柱建物、土壌墓、土壇といった遺構各個について新たな知見は得られていない。日野郡において当該期の遺構を検出した調査例としては溝口町神原遺跡、上中ノ原遺跡、日野町岩田遺跡<sup>註1</sup>に次ぐものである。いずれも弥生時代中期中葉以降の遺跡であり、前期ないし中期前葉にまで遡る遺跡は現在まで確認されていない。当時の初期農耕技術が山間部特有の気候、地形条件を克服できるのが中期中葉頃ということであろうか。岩屋ヶ成遺跡についていえば、石の多い覆せた尾根上に立地しており、可耕地との距離も遠く、有利な遊地とは考えにくい。弥生時代後期後半の短期間、こういった不便な尾根あるいは斜面に立地する例は比較的多く、それらと同じ理由によるものかもしれない。いずれにしても、当地域の古代集落遺跡の調査は緒についたばかりであり、その実態の解明は今後の課題である。

2. 遺物 検出した遺構と同時期と考えられる遺物として多数の弥生土器、土師器と若干の石器類を検出している。第5章第2節では岩屋ヶ成遺跡出土土器の分類と、特に複合口縁甕の変遷を検討した。先述の如く、これらは遺構に伴う土器ではないためセット関係の把握はもちろん、切り合い、層位等も確認できておらず、形式的な変遷を示し得るにすぎない。但し、この土器群は、弥生時代後期後半～古墳時代初頭という、限定された短期間における複合口縁甕の連続する変化を示している点に着目したい。鳥取県西部においては、すでに米子市青木遺跡の報告において弥生時代中期中葉～古墳時代後期までの体系的な土器編年<sup>註2</sup>が示されており、これに従うと、複合口縁形態の成立から、所謂「布留式」土器の影響を受ける直前の青木Ⅲ期～Ⅴ・Ⅵ期の幅の中に収まるものと考えられる。具体的にはA類（Po24）がⅢ期古段階、B～D類がⅢ期新段階～Ⅳ期、E類がⅤ・Ⅵ期に相当する。ここで問題となるのはⅢ期新段階～Ⅳ期という従来弥生土器から土師器への移行期と考えられたB～D類の土器群である。資料的な限界<sup>註4</sup>から、当該期の土器編年に

言及することは避けたいが、近年注目されている口縁外面の平行沈線をナデ消す手法について触れておきたい。弥生時代後期後半に特徴的にみられる調整手法として、B-a類にみられる口頸部内面に施すヘラミガキが知られている。これは赤色塗彩等と同様に内面の装飾的效果を目的としたものと考えられるが、このヘラミガキの多用は、口縁外面の施文が、凹線文(擬凸線文)から櫛歯平行線文に変わることとほぼ同時にみられる現象である。次の段階にC-a類P033のようにヘラミガキ、平行沈線がヨコナデによりナデ消されている手法がみられる。この手法は、現在まで鳥根県では確認されていないようであるが、鳥取県においては本遺跡例を加えると東部・中部・西部いずれにも普遍的にみられることが明らかとなっている。この手法は口縁部の最終の仕上げ調整であり、内外面をヨコナデ調整するという土師器の手法への指向とみることができる。したがって、ナデ消しによって否定される平行沈線は、単に文様というより、ハケメ同様の調整的意味あいを持っていたとも考えることができる。文様の消失、ミガキ→ナデ調整という流れに沿って岩屋ケ成B~D類土器群をみるならば、時間的に重複する部分はあるが、形式的にはB→C→D類という変遷を把握することが可能であろう。(中原 齊)

- 註1 益田晃他『神原遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会 1979年  
 益田晃他『土中ノ原・井後早里遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会 1983年  
 田中秀明他『岩田遺跡発掘調査報告書』日野町教育委員会 1980年
- 註2 陰田弥生集落では内的な社会的発達(人口増加に伴う可耕水田の拡大)の過程で、自然現象の変化に対応するために丘陵上に立地せざるをえなかったことを推定した。  
 中原齊「陰田弥生集落の歴史的位置」『陰田』米子市教育委員会 1984年
- 註3 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書III』1978年
- 註4 複合口縁部に完形品が一点もないことから、胴部、底部形態が全く検討できていない。特にこの時期において底部の平底→丸底化は大きなメルクマルとなる要素である。
- 註5 この手法について初めて触れているのは下記文献であり、  
 真田幸彦『土米積遺跡群発掘調査報告書II』倉吉市教育委員会 1980年  
 この手法の存在をして時期差を設定する編年案も発表している。  
 土井珠美「弥生時代後期から古墳時代初期のいわゆる山陰系土器について―鳥取県下の状況―」『第18回埋蔵文化財研究会発表記録』1986年(1985年8月発表)
- 註6 ヘラミガキ手法については「器表付近の砂粒をしずめ、光沢をもたせる装飾的效果と、多孔質の土器面を、より透透性のすくない、きめこまかい面とする実質的な役割をはたすもの」があるとされている。  
 佐原 真『紫雲出』 鹿野町文化財保護委員会 1964年
- 註7 八頭郡船岡町奈免屋・西ノ前遺跡出土土器にみられることを確認できた。山研雅美氏教示。

### 第3節 古墳時代

佐川古墳群を始め江府町域において、古墳時代前期に遡り得る古式古墳は発見されていない。既知の古墳の殆どは横穴式石室を主体部とする小規模円墳であり、2・3基を単位に小古墳群を形成している。したがって、佐川古墳群の如き横穴式石室を主体部に持つ古墳を検討することは江府町いはいは日野郡全域という山間部の古墳文化を解明する糸口となると考えられる。本節では、佐川3・5・6号墳の横穴式石室の平面プラン、石積手法について検討することとする。

平面プラン 3号墳は石室の破壊が著しく、平面プランを検討することができないが、5・6号墳は石室下部構造が遺存しており、平面プランを比較することが可能である。両石室とも所謂「両袖式石室」で玄室奥壁幅が最も広く、羨道(玄門)に向う程幅が狭くなる点は共通している。この平面プランを詳細に検討すると、奥壁腰石と側壁腰石のつくる隅角はほぼ直角を保ち、奥側よ

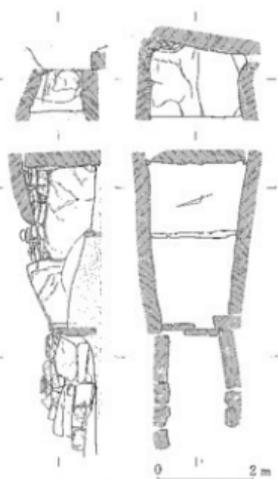
り数えて5号墳は2石、6号墳は1石の腰石を玄室幅を狭めることなく配している。玄室幅が狭まるのはこの前面の腰石を内側に寄せて据える為である。6号墳羨道部は不明瞭ではあるが、真直ぐか、僅かに開き気味で「羽子板状」の平面プランを呈しているのに対して、5号墳は玄室側壁の内側に寄せたラインをそのまま羨道側壁に続けている点に大きな差異が認められる。

**石積技法** 3・5・6号墳石室壁体は大型の板石を立てて腰石とし、その上に割石、自然石を小口積みしている。5・6号墳でみると部分的に積石の横方向に目地が通る箇所がみられるが、石室全体における石積みの画期はみとめられない。細部を観察すると、積石の目地が上下に通る重箱積みの手法が顕著であり、部分的には斜めに目地が通る斜積技法もみうけられる。石材の選択においても3・6号墳石室では平滑な面を用いて壁面を整えているのに対して5号墳石室は割面、自然面をそのまま用いており、壁面が粗い印象を受ける。5・6号墳石室奥側隅角部には両壁に渡して置かれた「力石」的な石がみとめられるが、壁体の上部構造は破壊により明らかでない。残存部分でみると壁の立ちあがりは僅かに内傾するものの強く持ち送る状況はみられなかった。この力石も2石を重箱積み状にしており、隅角を解消する意図はみられず、貝田1号墳(挿図78)の如き穹窿天井を支える「力石」とは異なる存在である。

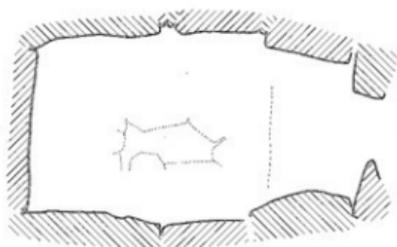
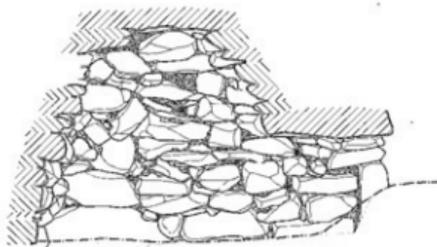
以上を総合すると

- 1) 平面プランは羽子板形ないし、その変容形をとる。
- 2) 壁体は腰石上に割石、自然石を小口積みし、重箱積み、斜積みの技法がみられる。
- 3) 力石的手法の石がみとめられるが、壁体を強く持ち送った形跡はない。

といった特徴があげられる。1)の羽子板形プランは周辺地域では日野川下流左岸の法勝寺川下流域、小松谷川流域で米子市宗像1号墳A・B石室、西伯町境古墳、会見町金4号墳の4例が確認されている。この地域の横穴式石室を検討した角田徳幸は「玄門の内側に框石を配する手法」「奥壁に平行する屍床仕切石」と併せ宗像1号墳A石室を北部九州との関連でとらえ、これを祖形として角田のいう盛行期A類石室が普及型として定着した可能性を指摘している。羽子板形プランの石室は北部九州に多くみられるもので、特に筑前宗像、肥前佐賀平野に集中してみられるという。6号墳石室にみられる玄門内側に框石を配す手法が肥前地方に多いという点からも、6号墳石室を北部九州の羽子板形プラン石室の系譜上にあるものとする事ができよう。前述した側壁が玄門に向かって一直線に狭まらない平面プランも、奥側の腰石が平行する部分を屍床仕切石と同様に埋葬位置を示す構造と考えることもできる。6号墳石室は宗像1号墳A石室と比較すると壁体が奥・側壁とも腰石上に割石・自然石小口積みしている点、羨道側壁が板石を1枚立てている点などに差異がみとめられる。奥壁も含めた周壁において腰石上に小型割石を小口積みする



挿図77 米子市宗像1号墳A石室  
(羽子板形プラン) 註5文献より



補図78 江府町貝田1号墳石室実測図 (中原・西田実測)

高坏が保管されており須恵器は古州のもので山陰須恵器福年I期に相当する(埴区82)。したがって美用古墳群の時期は中期まで遡り得る(附章参照)。

- 註2 「羽子板形」平面プランの用語は厳密には玄室奥壁幅が前壁側より広く、羨門幅が玄門部の幅より広いものをいうが、6号墳石室も同プランの系譜に連なるものとして「羽子板形」の用語を用いた。
- 註3 小田富士雄「福岡県・倉瀬戸古墳群の性格」『九州考古学研究・古墳時代編』1979年
- 註4 力石の用語は小田富士雄の概念に従っている。註3文献
- 註5 角田徳幸「法勝寺川流域および日野川下流域における横穴式石室とその系譜」『鳥観泉考古学会誌』第2集 1985年
- 註6 盛行期A類石室とは「側壁は、基部に大形石材を用いて上部に割石を小口積みにし、奥壁は1枚石で構成されるものが多い。天井は1枚石を用いるのが通例で、玄門には2枚の板石を立てて両袖とし、楣石に扁平で大形の石材を架構する」とされている。註5文献
- 註7 柳沢一男氏教示。
- 註8 角田徳幸氏は盛行期B類石室については壁面構成法と狭長な石室プランさらに袖部を構成するという視点から、日野郡の横穴式石室との共通性を指摘している。確かにB類石室の分布する法勝寺川上流域は、日南町と接しており、日野川沿いルートにこだわらねば塚原古墳群等に類似する石室がみられることも背首できるが、江府町域の石室には異なる観点が必要であろう。梅原末治「因伯二国に於ける古墳の調査」『鳥取県史蹟勝地調査報告一第二冊』1924年

(中原 育)

手法は佐川2号墳、貝田1号墳、下安井神社古墳等江府町の横穴式石室に特徴的にみられるようであり、奥壁石積みの手法は日野町・日南町の石室と異<sup>註8</sup>っている。

以上のように佐川6号墳石室は、穹窿天井をもつ貝田1号墳と同様に北部九州にその系譜を辿ることができる。但し、それは、石室構造細部の差異からみて、直接的な交渉ではなく、沿岸部の宗像古墳群等を營造した集同等を介しての交流であったと思われる。横穴式石室の検討は、こうした地域間交流に言及する資料となりうるものであるが、日野郡山間部の横穴式石室の実態は十分に把握できておらず、周辺地域との比較は今後の課題としたい。

註1 江府町歴史民俗資料館に美用上ン原出土の須恵器鉢・坏身・土師器

## 附載 江府町歴史民俗資料館所蔵の考古資料

佐川遺跡群の調査は当地域における本格的な大規模発掘調査としては初めてのものであり、地域の古代史を復原する大きな契機となるものであろう。しかしながら、道路建設に伴う事前発掘調査という性格から、調査範囲は限定されており、遺跡の全体像を把むには至っていない。ここでは江府町の原始、古代を考える資料として江府町歴史民俗資料館所蔵の資料について紹介しておくこととする。

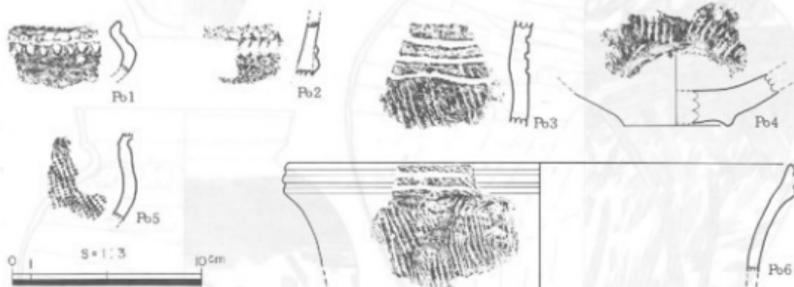
### 1 縄文時代の遺物 (挿図79、写真4)

土器は助沢竜王遺跡 (挿図6-38)、石器は宮市山神脇遺跡 (24) 出土である。

中期の土器 Po1は口縁部片である。端部外面に、竹管による刺突を2列に施している。Po2は(Po1~4) 竹管による刻み目突帯がみとめられる胴部片である。Po1・2は中期前半の時期と考える。Po3は外面にRの燃糸文と、幅2mm、深さ1.5mm程度の3条の沈線を施す。Po4も外面にRの燃糸文を施す。底部はややあげ底気味であり、ナデ調整によって仕上げられる。Po3・4とも里木II式の特徴をもつ。

後期の土器 Po5は、RLの縄文を横位に施している。わずかではあるが幅5~6mmの沈線も確認できる。後期前半の時期である。Po6は口縁端部外面にRLの縄文と、幅2~3mmの沈線を施す。外面には条痕が明瞭に残り、内面はナデ調整である。彦崎KI式の特徴をもつ。

(太田正康)



挿図79 江府町助沢竜王遺跡・縄文土器実測図

石 鏃 S1・2はサヌカイト製石鏃である。基部に(S1・2) 抉入のある凹基無茎式で、S1は抉りの深い鉄形鏃である。

有舌尖頭器 S3はサヌカイト製有舌尖頭器で、断面三角(S3) 形を呈す。有舌尖頭器は先土器時代の終末から縄文時代初頭の短期間に用いられており、県内で15例目の確認となる。大山北麓から西麓にかけて多く分布している。(中原 斉)

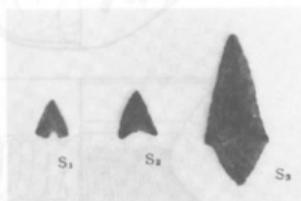
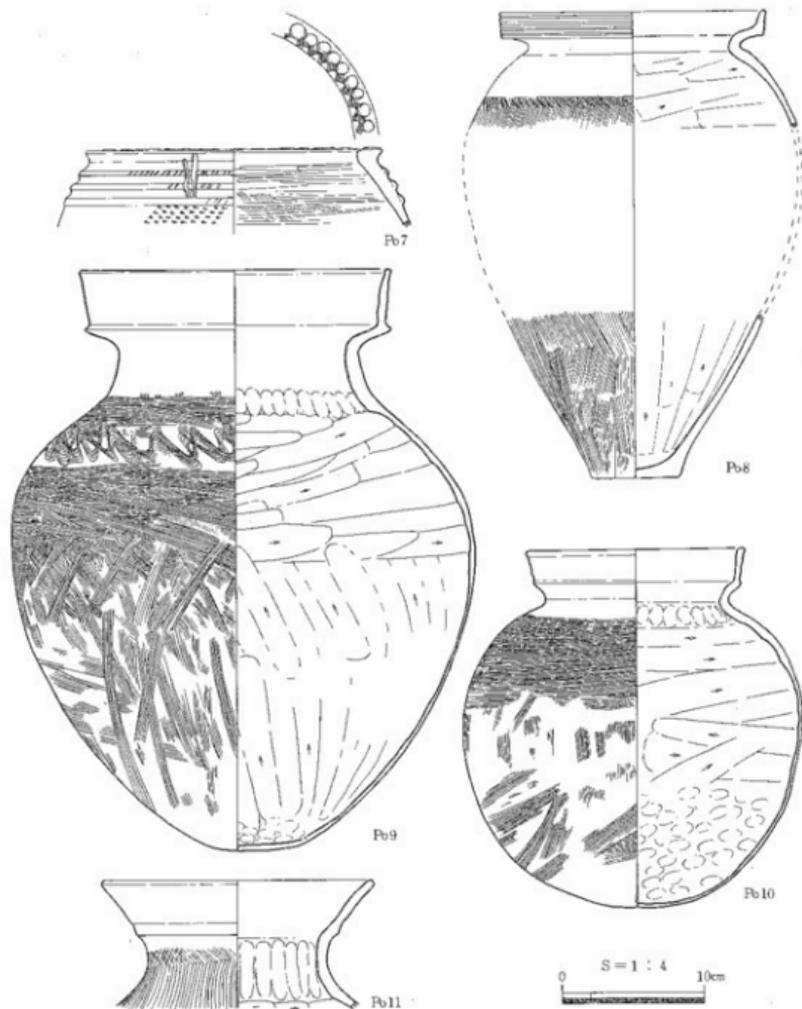


写真4 宮市・山神脇遺跡出土石器

## 2. 弥生時代の遺物 (挿図80・81)

弥生土器 Po7・8は荒田豆ヶ原遺跡(46)出土の土器である。Po7は無頸甕で、口縁平坦面に(Po7・8)波状文と円形浮文、口縁外面～肩部に刻目突帯、刺突文、棒状浮文で麗々しく飾っている中期中葉の土器である。Po8は口縁外面に4条の凹線、肩部に刺突文を施す甕であり、口縁部がほぼ直立することから、岩屋ヶ成遺跡の複合口縁甕A類に併行し、後



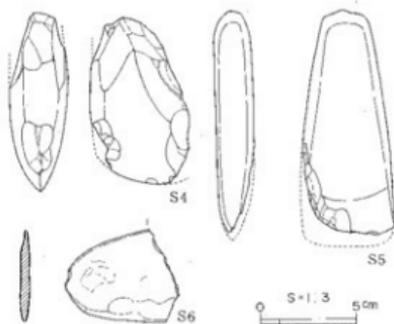
挿図80 江府町出土弥生土器・土師器実測図

期後半に相当する。

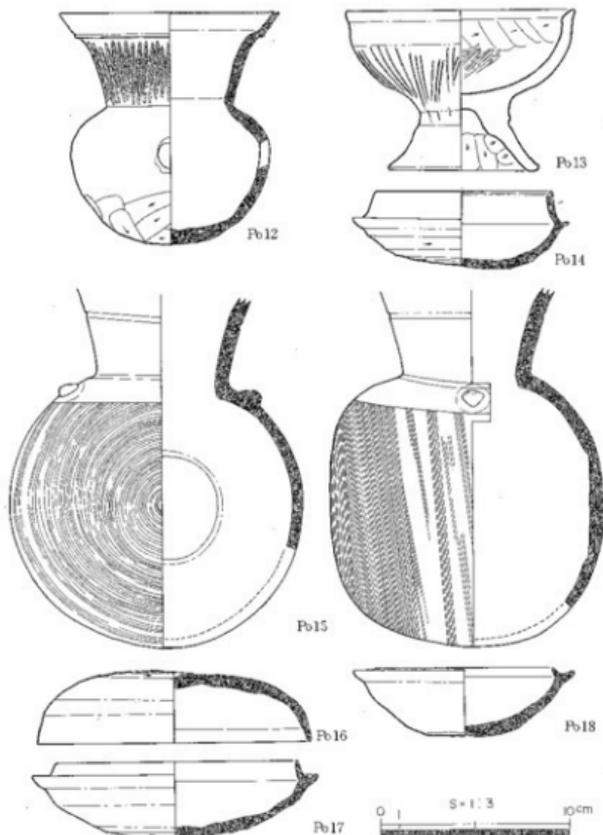
石器 S4～6は宮市吉裕遺跡(25)出土の石器である。S4・5は磨製石斧で、S4は弥生時代の太型始刃石斧、S5はやや扁平で縄文時代に属す可能性が強い。S6は石庖丁の破片で農耕文化の存在を具体的に示す資料である。

### 3. 古墳時代の遺物(挿図80・82)

土師器 Po9は佐川谷山日南遺跡(9)出土の甕である。ほぼ直立する複合口縁はシャープな線を描き、端部に面をもつ。



挿図81 江府町出土石器実測図



挿図82 江府町出土須恵器・土師器実測図

倒卵形の胴部は大型品の為やや平底のアクセントを残す。全体として古相を示し、岩屋ケ成遺跡複合口縁壺E類と併行する青木V・VI期と考えられる。Po10は佐川出土と伝えられる壺であり、退化した複合口縁に球形の体部が続く。胴部下半内面にはエビオサエが顕著にみられる。青木VIII期古相を示す。Po11は荒田豆ヶ原遺跡出土の壺で口縁が大きく開くが、複合口縁がシャープさを欠き青木VIII期以降に降るものであろう。

須恵器

(Po12-14~18)

須恵器隼Po12、坏身Po14、土師器高坏Po13は美用上原出土と伝える土器で、おそらく美用古墳群から出土したものと考えられる。Po12は古相を示す隼で底部外面を不整方向のヘラケズリしている。Po14は口径9.4cmの小型の坏身で、たちあがりが高く端部に段をもつ。山陰須恵器編年I期に属し、5世紀代に遡るものである。Po13は椀状の坏部に短い脚部がつく小型の高坏である。Po16・17も美用上原出土と伝えられる蓋坏で、口径は大型化し、蓋の天井部と口縁部の境界は不明瞭であり、III期に降るものである。Po15は荒田豆ヶ原出土の提瓶で、把手が退化して粘土粒を貼り付けている。Po18は宮市古墳出土の坏身で、口径は小型でたちあがりも矮小化しており、底部外面はヘラ切り後ナゲ調整している。山陰IV期に相当し、7世紀中頃の土器である。

#### 4. その他の遺物

勾玉

時期不明の遺物として、宮市山神臨遺跡(24)出土の勾玉がある。長さ1.84cmの小型のもので、淡緑色を呈する。鳥取大学赤木三郎教授の鑑定によれば硬玉製であり、形状からみても弥生時代～古墳時代前半頃と考えられる。その他、中・近世陶磁器、江尾城関係遺物が収蔵されているが、今回は資料化できなかつた。(太田正康・中原 育)

おわりに

「佐川遺跡群」の調査は昭和60年4月～7月まで約3ヶ月半で足早に終了した。ここに発掘調査報告書を上梓するにあたり、その成果と意義について振り返って結語としたい。佐川第1遺跡は縄文時代早期末まで遡り得る遺跡であり、今回DOT-MAP操作による生活空間の復原を試みたことは、縄文遺跡調査の方法を模索したものである。岩屋ケ成遺跡では江府町で初めて発掘された竪穴住居跡等、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落を調査することができた。古墳の調査では盗掘と擾乱により遺存状態はよくなかつたが、横穴式石室に九州を源流とする、糸譜を辿ることが認められた。実際には断片的な調査の積み重ねとなり、集落の全体像の把握や、古墳营造者層の分析など残された課題は多い。また、地元への調査成果の還元という視点からみれば、報告書という性格に制約されたとはいえ、本書が地域の歴史復原に果す役割は微々たるものであろう。江府町教育委員会、佐川地区自治会を初め、多数の方々のご助力に対して、十分なお返しができないのは残念ではあるが、僅かばかりの調査成果をもって感謝の気持ちに替えたい。最後に年若い我々にとって、調査現場は多くの地元の方々との交流の場であった。本場の「大山おこわ」を腹一杯食べた思い出と、最後の宴に披露された「遺蹟情話」の素朴な哀調を私たちは忘れることはないであろう。

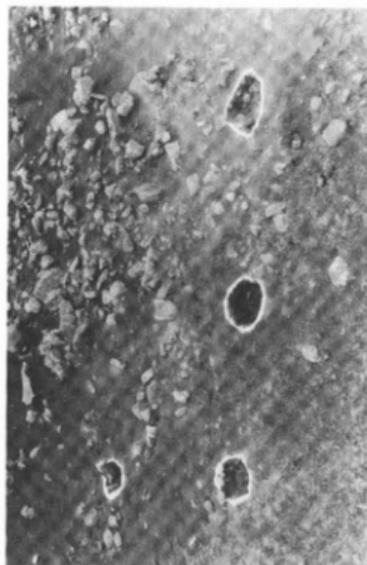
(中原 育)



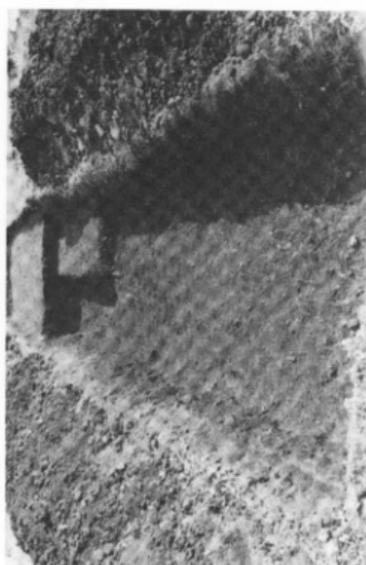
佐川5・6号墳遠景（東より）



岩屋ヶ成遺跡遠景（東より）



佐川第1遺跡 SB01 (北より)



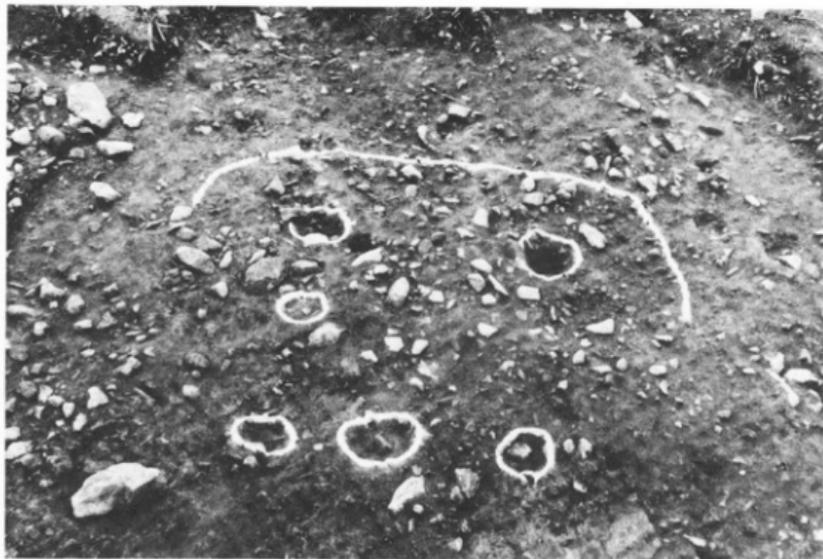
佐川第2遺跡試掘トレンチ (北より)



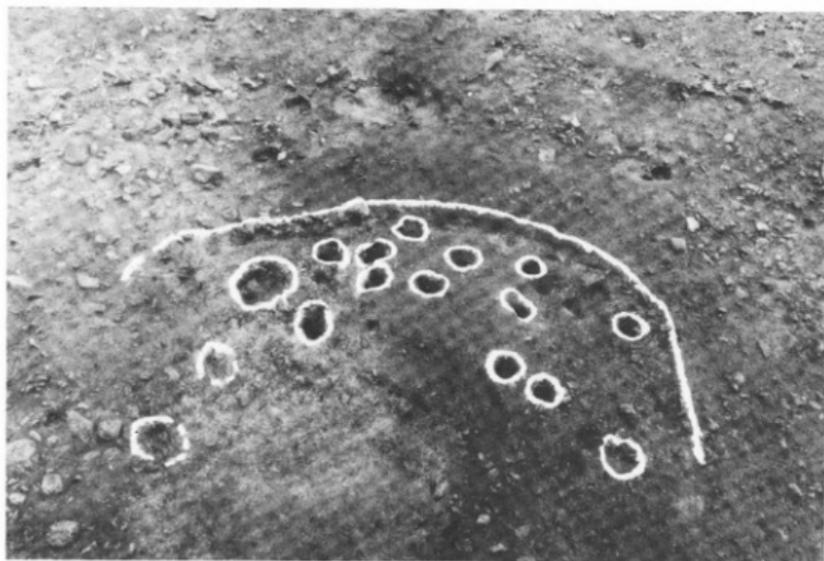
佐川第1遺跡全景 (北より)



佐川第1遺跡 SK01 (北より)



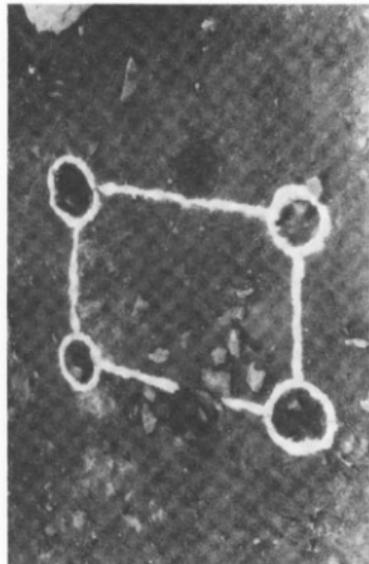
岩屋ヶ成遺跡 SI01 (南西より)



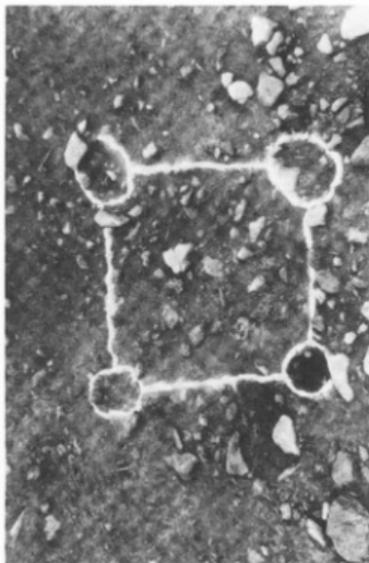
SI02 (南西より)



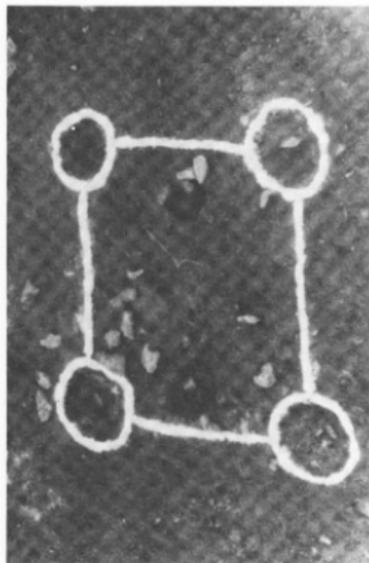
SB02 (南西より)



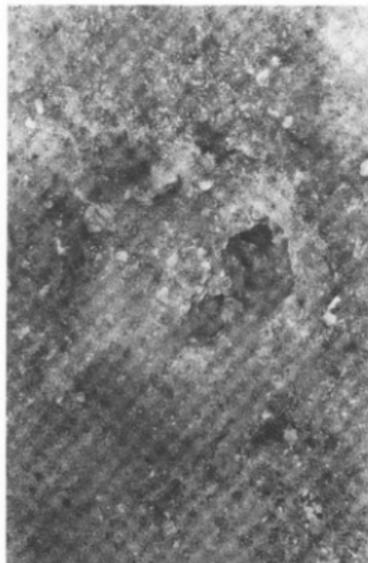
SB04 (南東より)



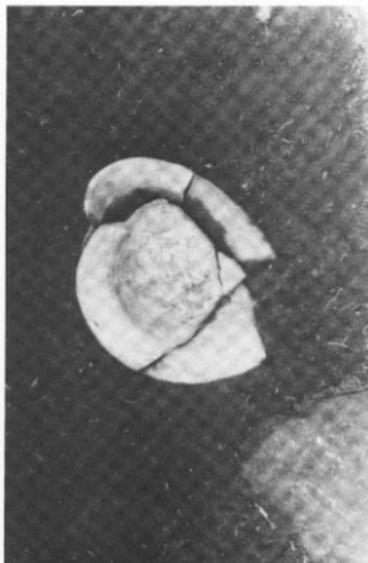
岩層ヶ成遺跡 SB01 (南より)



SB03 (南東より)



SK01 (南東より)



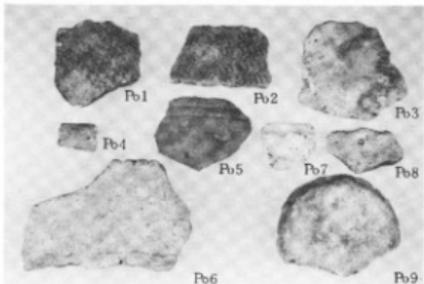
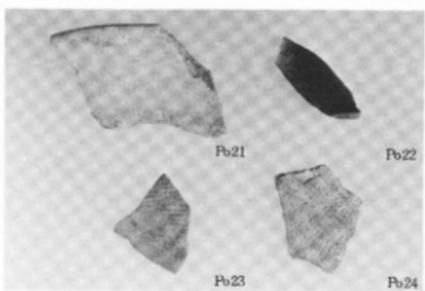
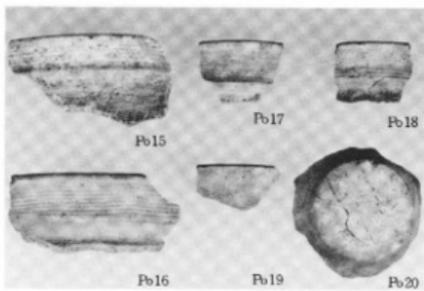
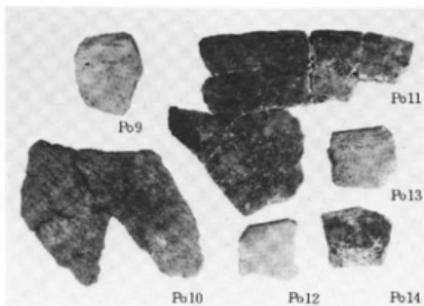
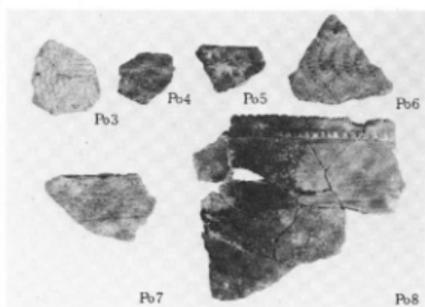
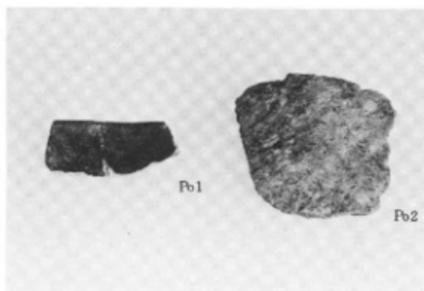
弥生土層 Rb87 土状況 (SI02南側)



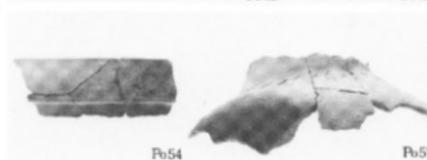
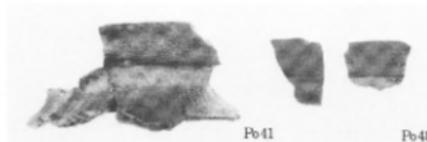
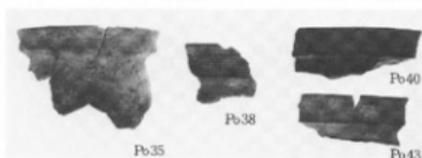
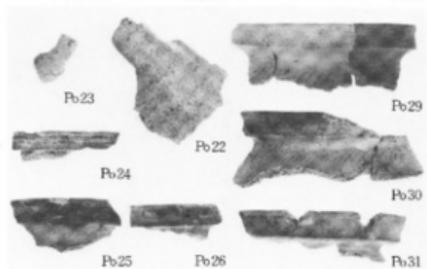
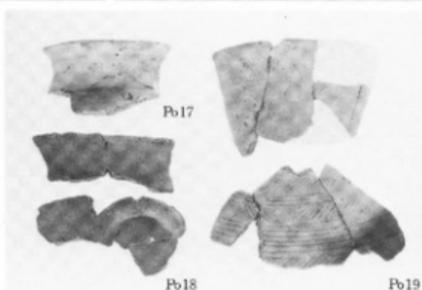
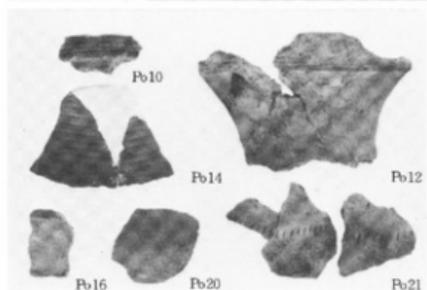
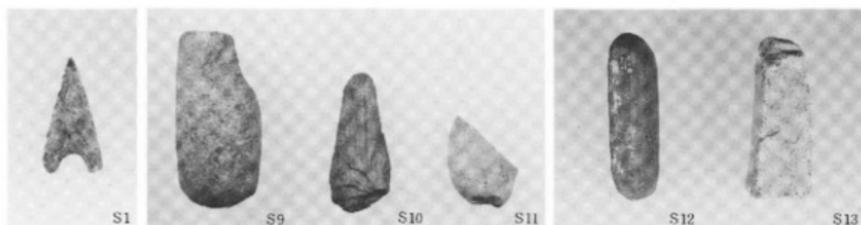
岩屋ヶ成遺跡 SX01 (南より)

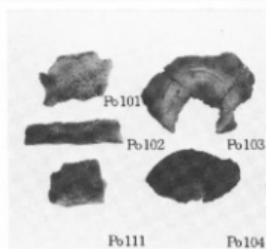
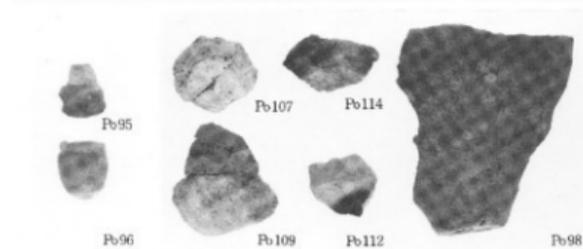
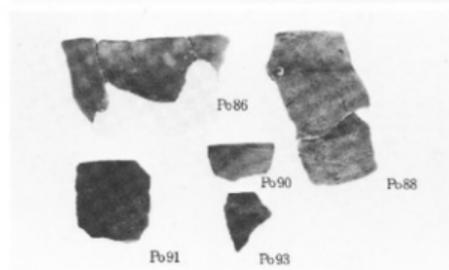
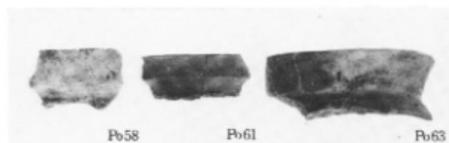


SK02 (北西より)



佐川第1遺跡・岩屋ヶ成遺跡 土器・石器



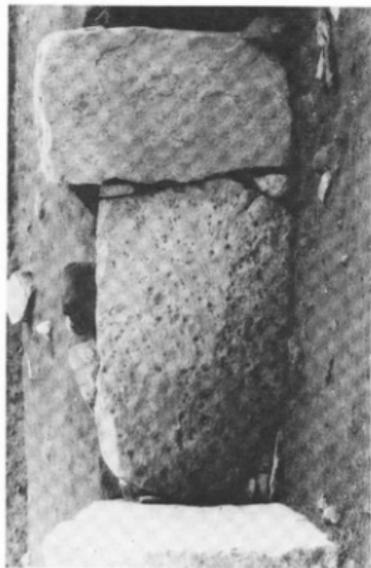




佐川3号墳全景（北より）



佐川3号墳石室検出状況（南より）



3号墳石室英壁腰石



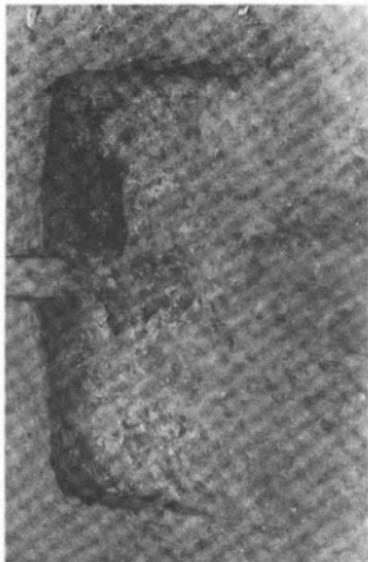
3号墳石室右側壁裏込め



3号墳石室左側壁腰石



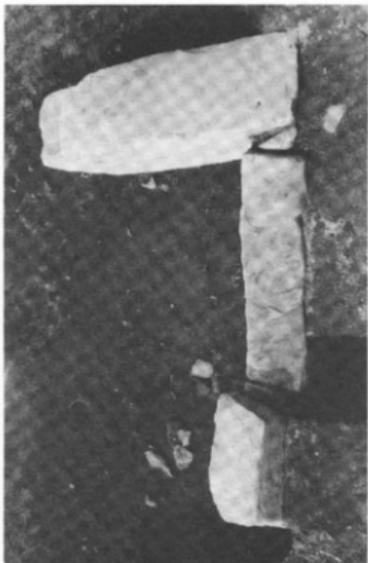
3号墳墳丘土層断面



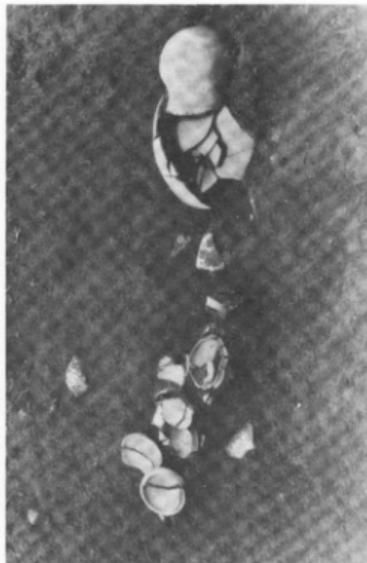
3号墳石室掘り方(南より)



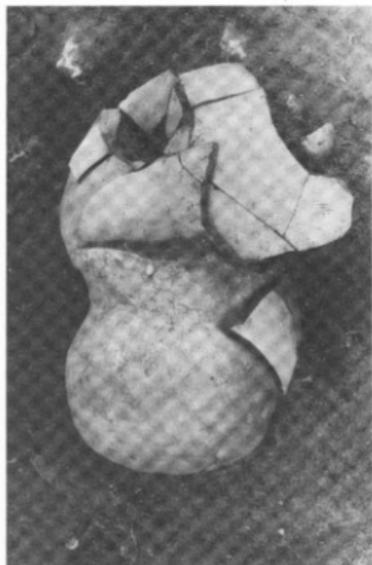
3号墳・調査風景



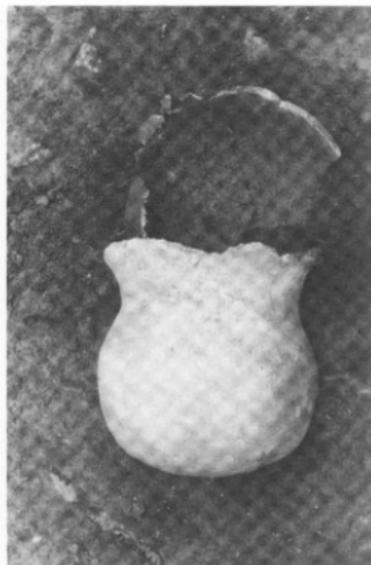
3号墳石室蓋石(北より)



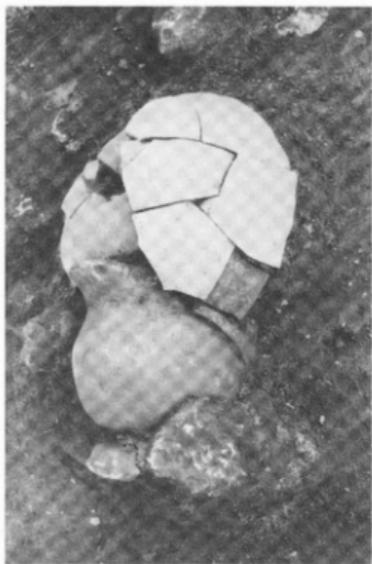
3号墳瓦溝遺物出土状況(北より)



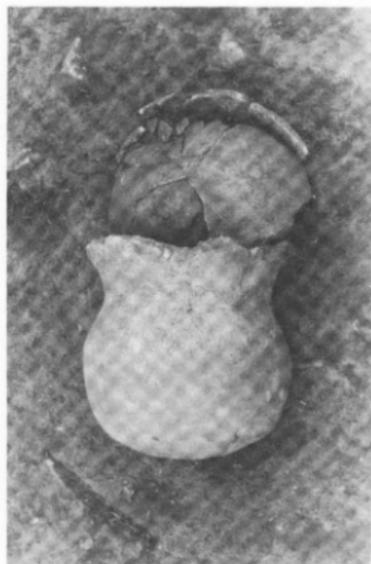
3号填土器棺② (一部除去)



3号填土器棺④



3号填土器棺① (検出状況)



3号填土器棺③ (須惠器除去)



Pb1



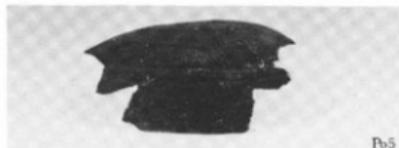
Pb3



Pb2



Pb4



Pb5



Pb9



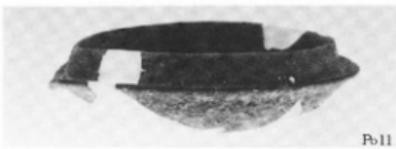
Pb6



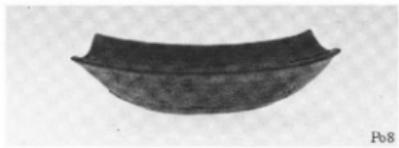
Pb10



Pb7



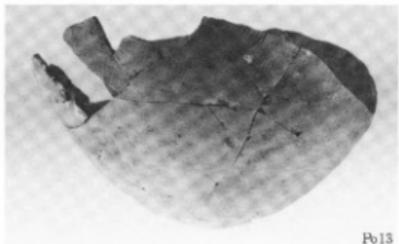
Pb11



Pb8



Pb14



Pb13



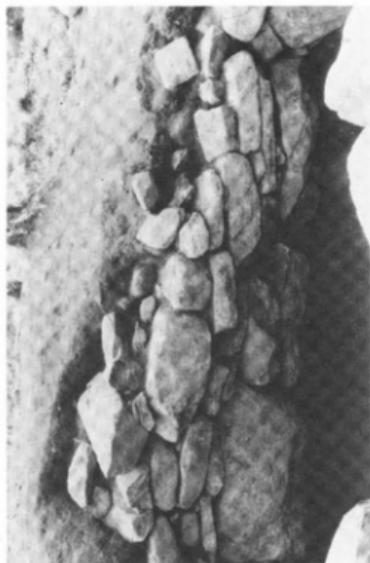
Pb15



5号墳墳丘全景（南西より）



5号墳石室検出状況（北西より）



5号墳石室右側壁



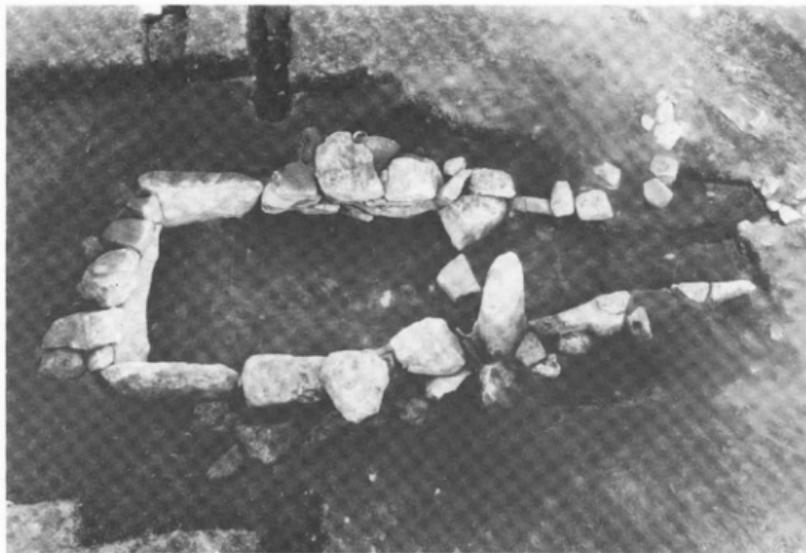
5号墳石室・玄門（西道より）



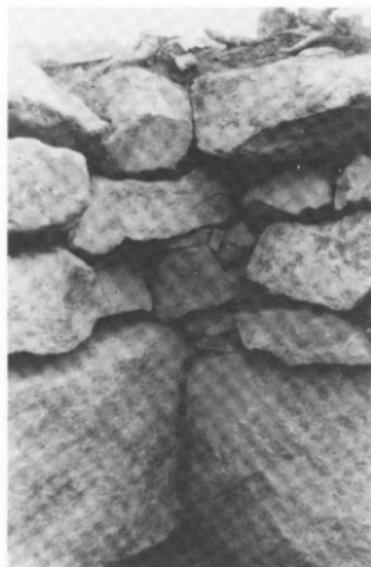
5号墳石室左側壁



5号墳石室東壁



5号墳石室石積状況（北西より）



5号墳石室奥側左隅角部



5号墳石室奥側右隅角部



5号墳石室・振り方(北西より)



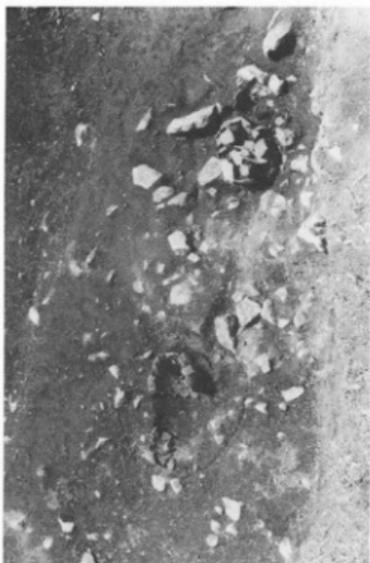
5号墳箱式石棺(南西より)



5号墳石室・腰石(北西より)



5号墳 箱式石棺蓋石(北より)



5号墳周溝外上層器検出状況（北東より）



5号墳周溝内須恵器・墓石検出状況（西より）



5号墳墳丘内須恵器検出状況



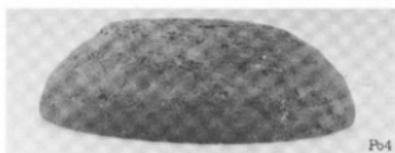
5号墳高道部須恵器検出状況（北西より）



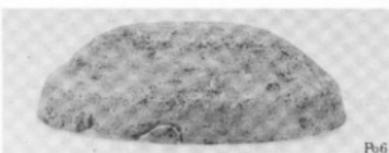
Pb1



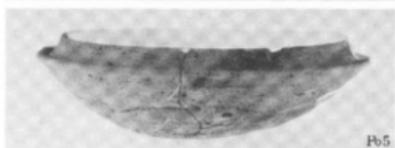
Pb2



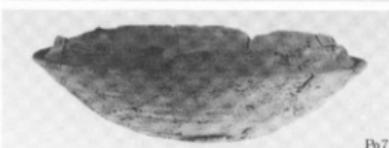
Pb4



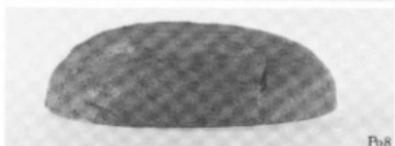
Pb6



Pb5



Pb7



Pb8



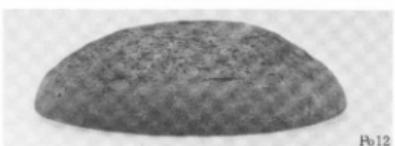
Pb10



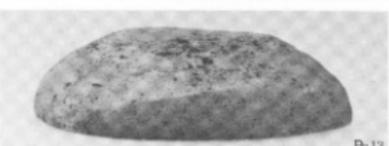
Pb9



Pb11



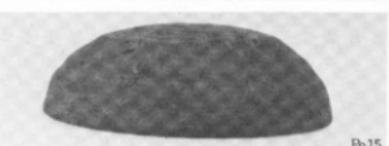
Pb12



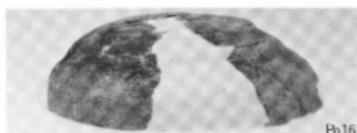
Pb13



Pb14



Pb15



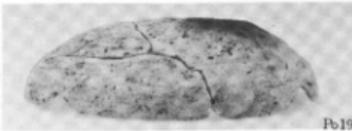
Po16



Po17



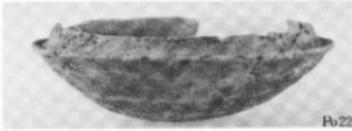
Po18



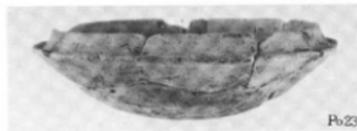
Po19



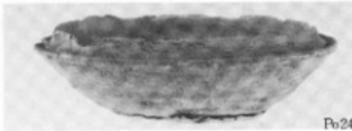
Po21



Po22



Po23



Po24



Po28



Po30



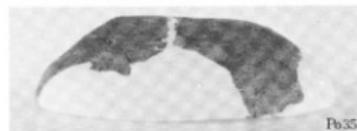
Po31



Po33



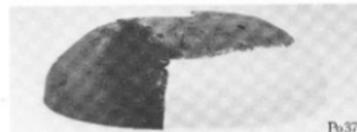
Po34



Po35



Po36



Po37



Po39



Pb40



Pb43



Pb44



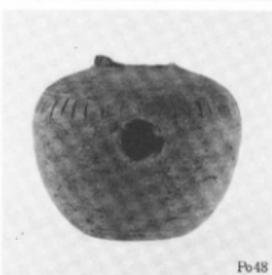
Pb45



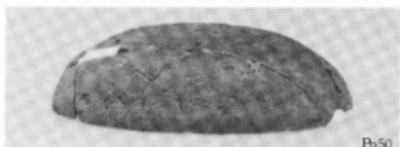
Pb46



Pb47



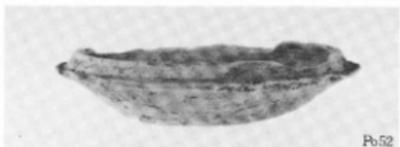
Pb48



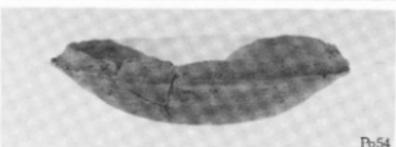
Pb50



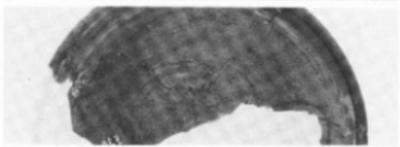
Pb51



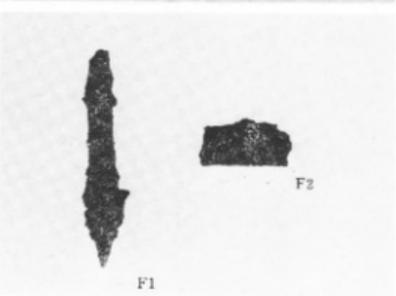
Pb52



Pb54



Pb55



F1

F2



6号墳墳丘全景（南西より）



6号墳石室検出状況（北西より）



6号墳石室右袖石



6号墳石室閉塞状況(玄室より)



6号墳石室左袖石



6号墳石室除出状況



6 另城石室右侧壁



6 另城石室左侧壁





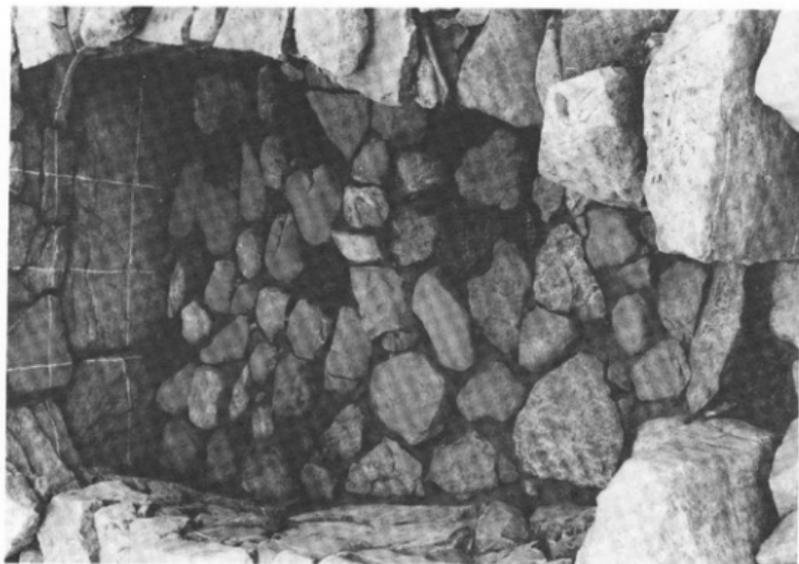
6号墳石室奥壁



6号墳石室奥側・左隅角部



6号墳石室奥側・右隅角部



6号墳石室 敷石



6号墳石室腰石 (北西より)



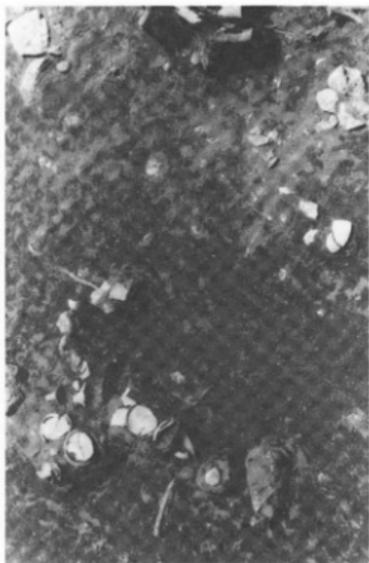
6号墳石室掘り方 (北西より)



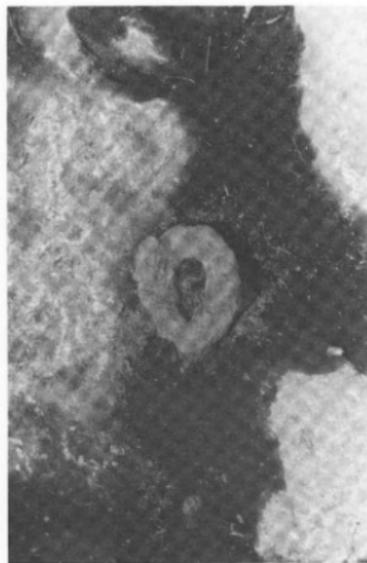
6号墳石室内・鉄鏃・菅玉出土状況



6号墳石室内・鉄刀出土状況



6号墳墳丘遺物出土状況(南より)



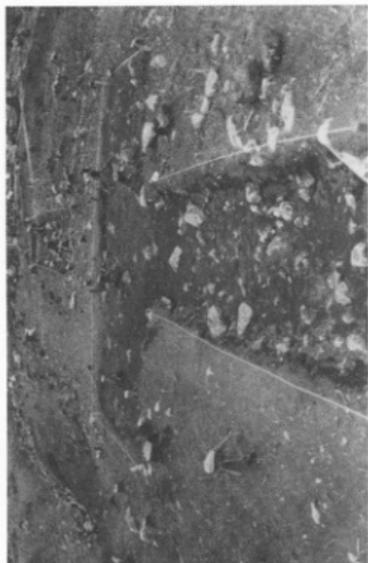
6号墳石室内鉄鐔出土状況



A地点試験状況（北より）



C地点試験状況（西より）



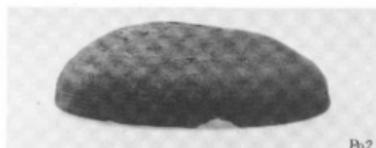
西尾根第1・第2トレンチ（南西より）



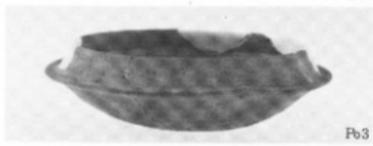
B地点試験状況（北東より）



Pb1



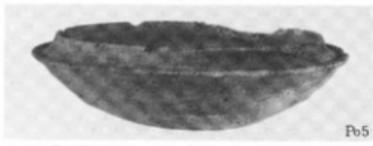
Pb2



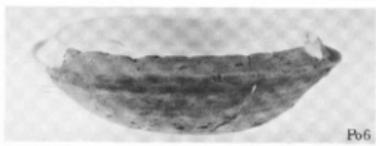
Pb3



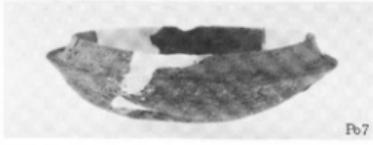
Pb4



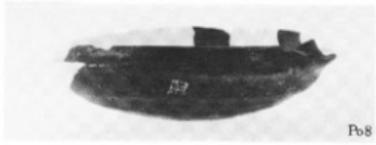
Pb5



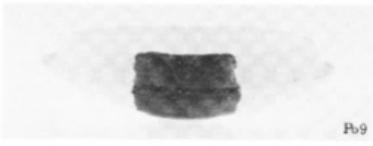
Pb6



Pb7



Pb8



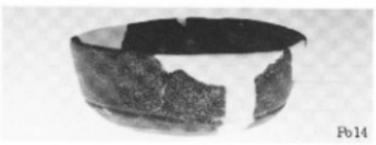
Pb9



Pb10



Pb12



Pb14



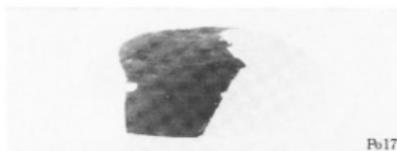
Pb13



Pb15



Pb16



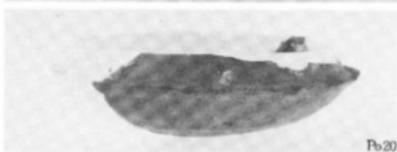
Pb17



Pb18



Pb19



Pb20



Pb21



Pb22



Pb23



Pb25



Pb29



Pb31



Pb30



Pb32



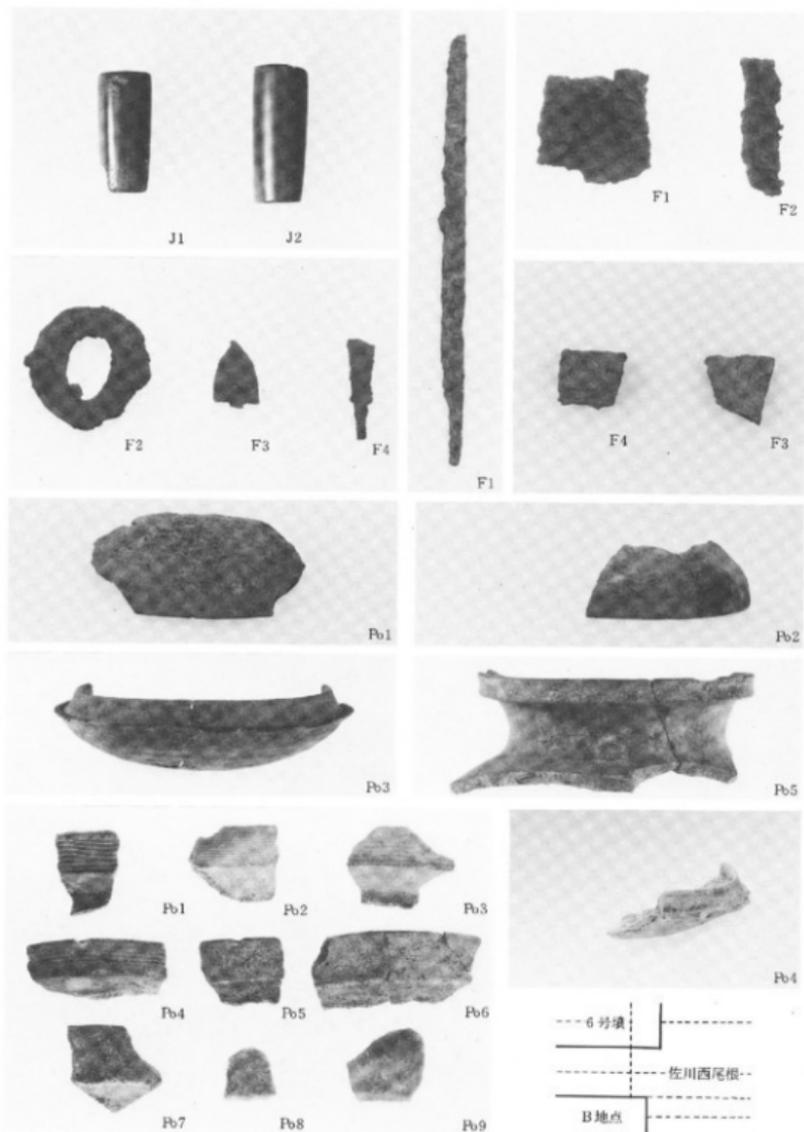
Pb33



Pb34



Pb35



佐川6号墳鉄器玉類・遺構外出土遺物

鳥取県教育文化財団報告書20  
中国横断自動車道岡山・米子線建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

**佐川遺跡群**

発行 1986・3

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団  
〒680 鳥取県社会教育福祉会館内  
TEL (0857)27-5252(代表)

印刷 中央印刷株式会社  
TEL (0857)53-2221